



敬虔と学問



Seigakuin University

pietas et scientia

自由を得させるであらう
 あなたがたに
 真理は、
 一人を愛し、
 一人を育む。
 神を仰ぎ
 人に仕う



創立30周年記念誌

扉をひらいて

Love God and Serve His People

一人を愛し、一人を育む。

真理は我らを自由にする

ἡ ἀλήθεια ἐλευθερώσει ὑμᾶς

Love God and Serve His People

聖学院大学

神を仰ぎ 人に仕う

敬虔と学問

敬虔と学問 神を仰ぎ 人に仕う 自由 真理は我らを

pietas et scientia

一人を愛し、一人を育む。 真理は、あなたがたに自由を得させるであろう ἡ ἀλήθεια ἐλευθερώσει ὑμᾶς

Love God and Serve His People

創立30周年記念誌
扉をひらいて

一人を愛し、一人を育む。 敬虔と学問 神を仰ぎ 人に仕う

一人を愛し、一人を育む。

真理は我らを自由にする 敬虔と学問 ἡ ἀλήθεια ἐλευθερώσει ὑμᾶς

Love God and Serve His People 聖学院大学 神を仰ぎ 人に仕う

神を仰ぎ 人に仕う

Love God and Serve His People

歴代学長



金井信一郎 (1888 - 1993)



安倍北夫 (1994 - 1998)



松川成夫 (1999 - 1999)



飯坂良明 (2000 - 2003)



阿久戸光晴 (2003 - 2013)



姜尚中 (2014 - 2014)

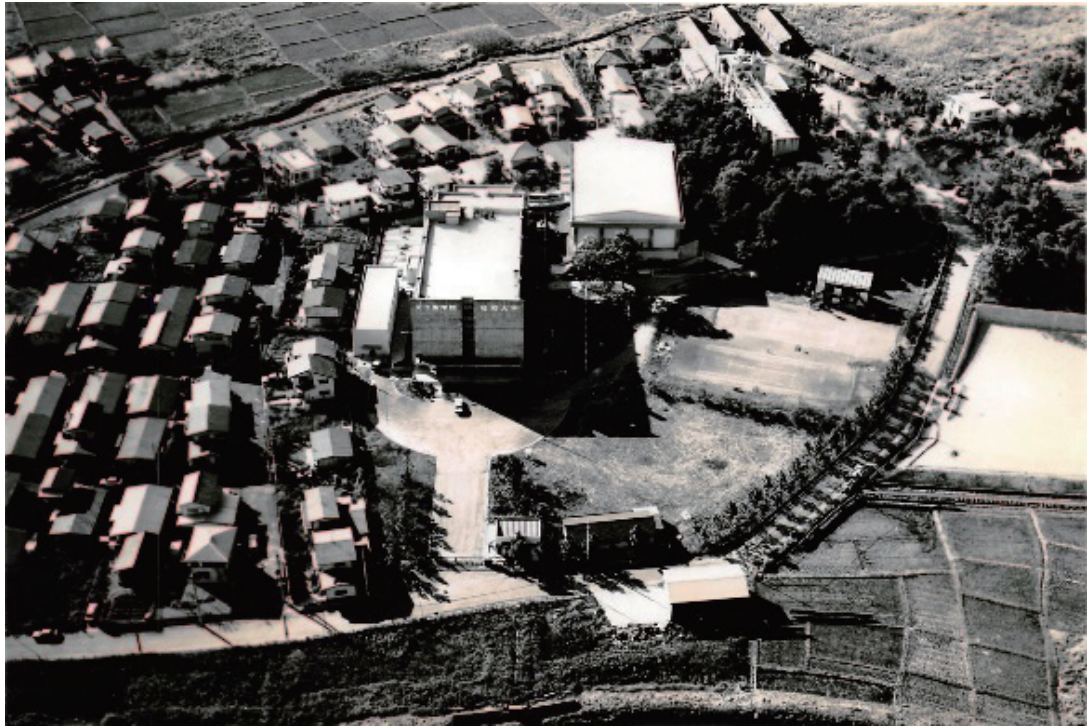


清水正之 (2015 -)

校章の持つ意味



この学園が仰ぎ、この学舎が生み出すもの。
それは、「信・望・愛」のペルソナ。
「信」は盾、「望」はオリーブの緑、「愛」
は救いの十字架。聖学院の「S」は実に
その上に乗せられてある。
しかもその「S」は「サービス」のSで
もある。「神を仰ぎ 人に仕う」かくして
わが校章のパーソナリティはなった。



1970年代初頭のキャンパス航空写真



1990年のキャンパス航空写真



チャペル外景



チャペル内

チャペルの風景



チャペル内 (前景)



チャペル内 (前景)



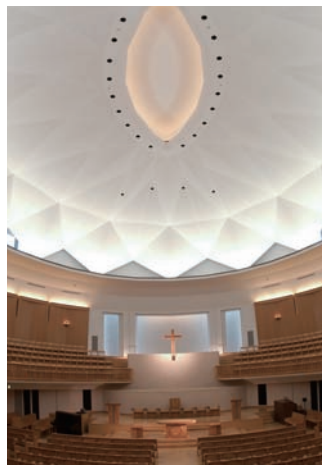
グラスアート



夜のチャペル



チャペル内洗礼槽



チャペル天井



カリヨン

クリスマスツリー一点火祭の変遷



2002年



2007年



2001年



2012年



2017年

学バスの変遷



2004年



2018年

様々な催し



2003年ページェント（大宮・ソニックシティ）



2005年ページェント（大学チャペル）



2008年度ジュベナリス祭（創立20周年記念・30キロウォーク 駒込から大学へ）



2001年FO（幕張）



2011年ヴェリタス祭・後夜祭



2016年度卒業式



2016年度入学式



1992年 旧正門前



2004年頃 旧正門解体工事



2003年 チャペル起工式



2004年 旧北キャンパス正門風景



1号館解体工事



現在の1号館前

聖学院大学の今（2018年）



桜のある風景



もみの木と本館



聖学院サークル



聖学院橋のある日



創立 30 周年記念 紙袋



創立 30 周年記念「ハニテラ」

巻頭のことば



学長 清水 正之

聖学院大学がこの地に誕生してから30周年を迎えました。今年、数々の記念行事と共に、この30周年記念誌が企画されました。この30周年記念誌は、そのモニュメントであるとともに、あらたな歩みを確かなものにするための一里塚でもあります。大学創設時の、また創設からの歩みの様々な側面が、それに関わってこられた方たちによって回想されています。

これを機に、キリスト教の理念によって教育研究の拠点として建てられた大学が、その年輪を重ねて今に至ることをあらためて覚えておきたいと願います。「神を仰ぎ 人に仕う」「一人を愛し、一人を育む。」あるべき教育の姿を掲げる聖学院大学が、教育界の一角に処を得ていることは大きな意味があります。

思い起こせば、前身の女子聖学院短期大学の創立からは51周年を迎え、そしてさらに聖学院の礎がおかれてから120周年を数年後に迎えようとしています。根を張り大木に育っていくプロセスを共にしています。一つの折りに重なる歴史の厚みを、あらためて30周年にあたって覚えたいと思います。30周年の歩みは、私たちの大学の理念を実現する過程でした。その目的にとっては、なお道ははるかに続くといっていると思います。理想の実現がこの大学の目的であるなら、私たちは振りかえりのみで済ませるわけにはいきません。

この折りに、在校生、教職員、そして30年の軌跡のなかで歩みをともししてきた教職員OB・OG、卒業生やそのご家族、さらには聖学院大学の理解者、大学に関心を寄せて下さる地元の方々と、一つとなって共に前に進む機会、企画となることを願った記念誌であるといえます。

30周年記念誌は、未来の40周年、50周年に向けての種まきでもあります。皆さんには、30周年を迎えた大学の現状を知っていただきたいと願っています。そして大学としては、これまで寄せられてきた信頼と信任にこれからも全力をもって応えていく所存です。

目次

巻頭のことば 清水正之

第1部 キリスト教教育

聖学院大学の理念	2
聖学院大学の歌	4
聖学院大学のキリスト教教育の「これから」について 柳田洋夫	11
コラム 聖学院 90+110 周年記念 一万人のクリスマス in 武道館 清水 均	16
キリスト教教育・関係資料	18

第2部 大学の教育

大学の教育 魅力の基底、そして、新たな魅力の創造に向けて 清水 均	37
主要年表	44
大学のあゆみ・思い出	46
理念から始まる創設と形成 阿久戸光晴	46
開学の頃の思い出 標 宣男	53
大学創立への思い 黒木 章	60
コミュニティ政策学科と NPO 富沢賢治	65
欧米文化学科の設立の経緯と歴史 稲田敦子	70
日本文化学科設立のころ 鵜沼裕子	75
日本文化学会の設立 清水 均	81
ほっこりとした時の流れの中で 村山順吉	87
人間福祉学科の 20 年 古谷野 亘	89
こども心理学科の設立の経緯と歴史 窪寺俊之	93
聖学院大学創立 30 周年おめでとうございます！ 古屋博規（後援会会長）	96
聖学院大学での学び 坂村哲也（同窓会会長）	98
同窓会のあゆみ	99
あのころのこと 学生生活の思い出 倉橋 基 (88 P)	102
クラブ活動の思い出 秋谷大輔 (100 A)	105
児童学科の思い出 稲葉令子 (旧姓 清水) (92 C)	107
日本文化学科の思い出 磯田 梓 (旧姓 武藤) (98 J)	108
人間福祉学科の思い出 浅野早百合 (112 W)	109

第3部 資料編

教員等	113
学生	
1. 学生数の推移	125
2. ヴェリタス祭	126
3. スポーツ DAY/ ジュベナリス祭	127
4. 緑聖賞	128
5. 学内奨学金	129
6. 卒業生進路	132
7. 国際交流	134
8. 海外研修	135
9. 入学前準備学習	139
地域連携・地域貢献のあゆみ	
1. NPO 法人コミュニティ活動支援センター	141
2. ボランティア活動支援センター	141
3. 本学の地域連携	145
4. 大学によるリカレント教育	145
5. 公開講座	146
6. 司書講習・学校図書館司書教諭講習	147
7. 教員免許状更新講習	148
8. 小学校英語指導者養成講座	149
9. 聖学院大学グローバルキャンプ	149
10. ひらめきときめきサイエンス	150
学生支援のあゆみ	
1. 総合図書館	151
2. 教職支援センター	151
3. ラーニングセンター	152
4. キャリアサポートセンター	153
5. 保健室	154
6. 学生相談室	154
7. オリーブデスク	155
刊行物	157
キャンパスマップの変遷	162
あとがきに代えて	165

第 1 部 キリスト教教育

聖学院大学の理念

- 第1条 本大学は、プロテスタント・キリスト教の精神に基づき、自由と敬虔の学風によって、真理を探究し、霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成に努め、人類世界の進展に寄与せんとする者の学術研究と教育の文化共同体である。
- 第2条 本大学は、プロテスタント・キリスト教の伝統に即してなされる礼拝を生命的な源泉とする。礼拝においては、聖書と宗教改革者が証する福音が語られ、そこから大学共同体にとっての生命である研究と教育のための自由と責任、および伝道への活力、さらに本大学の伝統を継承し新たに創造する喜びと熱意とが与えられる。
- 第3条 プロテスタント・キリスト教は、特に近代世界の成立と展開に独特な貢献を果たしてきたが、それゆえまた、現代社会において固有な責任を負っている。本大学は真剣な学術研究と生きた教育、霊的強化とを通して、このプロテスタント・キリスト教の現代文化に対する責任という世界史的課題を大学形成において遂行し、希望ある世界の形成に寄与せんとする。
- 第4条 本大学は、日本におけるプロテスタント・キリスト教の伝統及びその信仰的、文化的、教育的貢献に連なるとともに、その労苦と苦心の経験に虚心に学び、その信仰、文化、教育活動の新しい進展のために努力し、日本社会に対し新たな指標を打ち立てようとする。そのため、福音的プロテスタント諸教会の協力を仰ぐとともに、とりわけ、かつての聖学院神学校が合流している東京神学大学との協力関係を密にする。また、広く内外のプロテスタント諸大学と相互協力の関係も樹立する。
- 第5条 本大学は、「現代文化の諸問題とキリスト教の課題」等の問題を研究する機会を提供し、開かれた大学として、プロテスタント・キリスト教の精神をもって国際化した時代と激動する社会、および地域の問題にも積極的に取組み、創造的な活動をすることによって、そのキリスト教的、文化的特色を発揮することを期する。

第6条 本大学は、学校法人聖学院の設立による諸学校との精神的、財政的な一体性の中にある。また教育的にそれぞれ独自の位置と課題を尊重しつつ、それらとの密接な関連、協力の関係を持ち、聖学院全体の一貫教育の高等教育段階を担う。

第7条 以上の理想のために、本大学に働くすべての教職員は、互いの人格を尊重し、各自の持ち場においてそれぞれにふさわしい責任を自発的かつ積極的に遂行するとともに、キリスト教的な愛と謙遜と熱意とをもって互いに協力し合うことが期待される。

第8条 教授は、福音的自由と真理への畏敬の念を持って、学問的探究に鋭意努力し、その研究と教育を通して、時代の課題に積極的に応えつつ、新しい世代の知的、実践的、霊的次元での育成に努め、本大学の精神、学問、伝統の確立と継承、および新たな創造に努めることが期待される。

第9条 学生は、知的、実践のみならず霊的次元において成熟し、かつ専門の学問の研鑽とその応用力の修得に努め、現代社会の課題に取組み、明日の社会を担い得る教養と良識とを身につけ、豊かで個性的な人格形成に努めることが期待される。

第10条 本大学は、以上の理念に基づくことによって、いかなる種類の組織体やイデオロギーの支配も介入も許さず、また私的並びに集団的な暴力による破壊や妨害を許さない。

附則 この理念は、1988年4月1日から施行する。

Pietas et Scientia 「敬虔と学問」

ヘー・アレーセイア・エリユーセローセイ・ヒューマース

「真理はあなたがたに自由を得させるであろう」

聖学院大学の歌

ミレニアム希望の賛歌
(混声四部合唱)

詞：浅原 六朗
曲：小林 秀雄

Piano

$\text{♩} = 48$

mf

mp cresc.

mf

く れ な り い の い ひ の か り ひ う が た う し - よ ん り か -
み ど の の の の - り ち ひ う が た う し - よ ん り か -

mp cresc.

mf

は く あ き の 母 校 - あ た い か に き ほ - こ む り -
き よ あ き こ こ 母 校 - あ た い か に き ほ - こ む り -

mf cresc.

f

ゆ り す み れ は か と お お る む お - さ し の ら -
の り す と り れ は か と お お る む お - さ し の ら -

mf
せ い しゅん わ れ ら 手 手 と こ 手 手 を つ な な
あ す を も と め み て い い に こ ま じ など こ
cresc.
と し な え の も の を と し し な え の も の を
f *mf*
と し な え の も の を
ten. *f*
と し な え の も の を
ten.

Detailed description: This is a musical score for voice and piano. It consists of four systems of music. Each system has a vocal line (treble clef) and a piano accompaniment (grand staff). The key signature has two flats (B-flat and E-flat), and the time signature is 4/4. The first system is marked *mf*. The second system is marked *cresc.*. The third system starts with *f* and *mf*. The fourth system has *ten.* (tenor) markings above the vocal line and *f* and *ten.* markings below the piano accompaniment. The lyrics are in Japanese and appear to be a poem or a song about hands and connection.

聖学院大学の歌ノミネート作品 I

(1990年度学生部委員会・学友会参事会承認)

作詞 山本 鏡造

作曲 村山 順吉



1. て んち あい あ う む さ し の ち へ い よ う
 2. み どり おり な す い こ い の ま き よ し の
 3. か み と へい わ は わ れ ら の か が み せ か



こー う か がー や く わー が ま な び や に つ ど
 か げ の たー にー も わ れ ら を き たー う ま な た
 いー の は てー ま で き よ さ か か げー て た た



い し わ こ う ど ち か ら を あ わ せ えい
 べ や は げ め や ち か ら を つ く し ゃ
 か い ま も ら ん い の ち の か ぎ り み く

1.2.



かー んと ら ば や わ れ ら せ い が く いん
 の ま も り を み よ わ れ ら せ い が く いん
 に きー た る ま で わ れ ら せ い が く



しやう り の ほ ま れ あ め よ り き た る わ れ
 ち じやう の おお じゃ も し じ に は ま さ ら ず わ れ

3.



ら の せ い し ゃ ん もー や し つ くー さ ん いん あ め
 ら の ち か ら の も と を み せ ばー や



の ち か ら は つ よ く た く ま し せ い ぎ の ゆ く



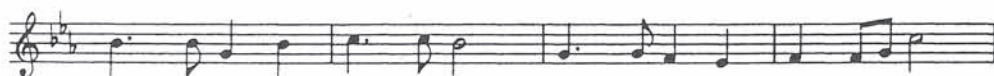
て は は ば む も の な し あ あ せ い が く いん

聖学院大学の歌ノミネート作品II

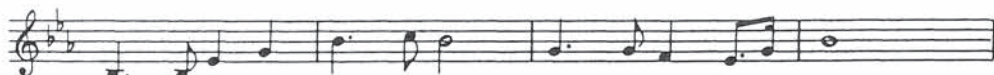
作詞・作曲 酒井 文夫



1. あ さ く も な が れ る ゆ た か な ー だ い ち
 2. い そ し み は け み て わ れ ら は ー ま な ぶ
 3. せ か い の ぶ ん か ー ば ん ほう の ー へ い わ
 4. し ん せい は に ー ご り こ の よ は ー く る し
 5. こ の ま な び や で ー ま な び し ー お し え



む さ し の は ら に そ び ゆ る ま な び や
 が ー く の ヴェ リ タ ス し ん せい の ま ー こ と
 わ れ ら き す か ん ま こ こ ろ つ ー く し
 さ れ と ー つ く さん よ ー の た め ー ー に
 し ょ う が い わ す れ ず い だ き て い き ー ん



か み の み む ね に た て る が く えん
 か み の み ひ か り あ お ぐ が く えん
 か み の さ と し に い き る が く えん
 あ い と き ほ う に い き る が く えん
 と わ に は え あ れ わ が ほ こ ー う



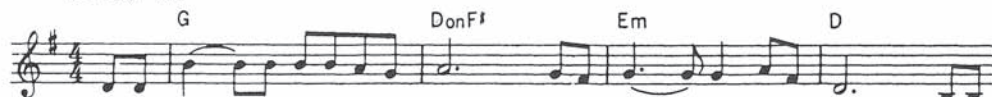
あ ー ー ー せい が く いん だ い が く
 あ ー ー ー せい が く いん だ い が く
 あ ー ー ー せい が く いん だ い が く
 あ ー ー ー せい が く いん だ い が く
 あ ー ー ー せい が く いん だ い が く

聖学院大学の歌ノミネート作品Ⅲ

作詞 丸山久美子

作曲 細田 武男

♩ = 106-112



1. つくら - れしいのちの せい き - に あふ れ ほこ
 2. ゆう きゅう の - そらのした はる か なる こた ま うた
 3. ひつじ は - よ - くや に の べ の - ほ とりに すこ



り ある まなび やに わかき われらは いま - きわめ
 こ えも さわ やかに わかき われらは いま - ここー
 や かに き - た えん わかき われらは いま - ともー



ゆく がくりを - かがや ける - - そのめ に うつし いの
 に - つどいて - しゅを あ おぎ - - よろこ びうたう いの
 に - てをと り - ちから の かぎりあゆみ ゆか - ん いの



り つつ もとめ - ーる しんり の - みちを せい
 り つつ もとめ - ーる ほうし の - わざを せい
 り つつ もとめ - ーる せかい のへいわを せい



が く いん の せい が く いん の
 が く いん の せい が く いん の
 が く いん の せい が く いん の



た か - き りそ うは と わ に つづ か ん
 あ い - と まこ とは と わ に つづ か ん
 き ほうの ひか りは と わ に つづ か ん

聖学院大学の歌（応援歌）ノミネート作品IV

(1990年度学生部委員会・学友会参事会承認)

作詞・作曲 山本 鏡造

Staccato e brillante

The image shows a musical score for a song. It consists of two systems of music. Each system has a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is written in the treble clef, and the accompaniment is in the bass clef. The tempo and style are indicated as 'Staccato e brillante'. The lyrics are written below the treble clef staff. The first system has four measures of lyrics: 'か て か て か て か て せい が く い ん の ゆ う し'. The second system also has four measures: 'か て か て か ち め け わ れ - ら の せ ん し ゅ'.

か て か て か て か て せい が く い ん の ゆ う し

か て か て か ち め け わ れ - ら の せ ん し ゅ

(アメフト、ラグビー等の時)

1. 押せ、押せ、押しまくれ、聖学院の勇士、
押せ、押せ、押しまくれ、我らの選手、
フレー、フレー、(選手の名前)

(野球などの時)

3. 打て、打て、かっ飛ばせ、聖学院の勇士、
打て、打て、打ちまくれ、我らの選手、
フレー、フレー、(選手の名前)

(ボールを取って走る時、ランニングなどの時)

2. 走れ、走れ、走り抜け、聖学院の勇士、
走れ、走れ、走り抜け、我らの選手、
フレー、フレー、(選手の名前)

(全ての時)

4. 勝て、勝て、勝て勝て、聖学院の勇士、
勝て、勝て、勝ち抜け、我らの選手、
フレー、フレー、(選手の名前)

聖学院大学 学生歌

詞・曲 小室 等

♩ = 88 C

1.きのうのあこがれが ころ ゆらぐとき きよ
 2.おもいをのせてくる かぜをうけとめて い

C G/B Am Am/G D9/F# Dm7/G C C/B

う プナのもりに みみをすませば
 ま このちきゅうの きしべにたてば

Am Em F Dm E

と一きめきも ためらいも
 よ一ろこびも かなしみも

F Dm C E^{dim} Dm7 D9/F# G9 Gaug

きたるべき あしたへの かけはしだ から ゆ
 つくるべき みらいへの みちびきだ から あ

C G/B Am7 Dm7/G G7

めをかたりあい よびかけあって
 いとむかいあい といかけあって

C G/B Am Am/G D9/F# Dm7/G C

さがしつづける せいがかくの みち
 あゆみつづける せいがかくの みち

聖学院大学のキリスト教教育の「これから」について



大学チャプレン 柳田 洋夫

はじめに

大学創立 30 周年記念誌の本編の最初に、本学のこれからのキリスト教教育のありかたについて申し述べる場を与えていただいたことにまず感謝申し上げます。特に「これから」について記してほしいという要望に従いつつ、思うところを記していきたい。若干個人的で独断的なところもあるかもしれないが、今後に向けての「心意気」の表明ということでご寛恕いただければ幸いです。

福音を宣べ伝えるイエス・キリストの公生涯が始められたのは 30 歳の頃とされていることを思い起こしてみても、大学 30 周年を覚えるこの機会は、単に過去を振り返るのではなく、新たな決意とともにさらなる一步を踏み出そうとするにふさわしい時でもあろう。その意味で、「一人を愛し、一人を育む。」という新たなタグラインが定められたのはまことに意義深いことである。期せずして、見失った一匹の羊を尋ね求める羊飼いの（ルカ 15 章）のたとえに、また、これから聖学院が取り組もうとしている国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」の「誰一人取り残さない」(Leave no one behind) という理念にも通ずる目標が示されたということにもなる。そうだとすれば、学生一人ひとりへの配慮を旨

として足元 (ローカル) を見据えつつ、経済的・政治的覇権主義的態度などとは一線を画す、真の共生的な「グローバル」のありかたを本学が社会に証しするという大目標が与えられているということにもなる。

それに先立って、周知のように、本学院は「神を仰ぎ 人に仕う」というモットーを掲げてきた。また、大学においては、プロテスタント・キリスト教の精神にもとづく「聖学院大学の理念 10 箇条」が、そして、「よき隣人となる」という目標が示されている。新たなタグラインとともに、これらの理念や目標をいかにして日々のキリスト教に関連する授業や活動において実質化していくかを真剣に模索していかなければならないことは言うまでもない。

以下、とりあえず「教育」と「活動」の二つの側面に分けて概略を述べていきたい。

キリスト教教育について

キリスト教教育またキリスト教学校において常に原理的に問題になるのは、「教育」と「伝道」との、また、「学校」と「教会」との関連如何ということである。聖学院はこれまで、キリスト教教育もまた伝道であるにとらえ、教会との緊密な関係を実現するために努力し

てきたが、今後もその基本姿勢は継承されるであろう。ただし、伝道の名のもとに、教育また大学の学問としての独自の側面やそのレベルが軽視されるということはあってはならないのはもちろんのことである。むしろ、キリスト教主義大学として建てられている本学においては、キリスト教教育が知的側面においても全学に対して積極的貢献をなし、さらには諸学また諸活動を貫く一つのエートスのごときものになるという志は持っていたいと考える。

それはより具体的には、リベラル・アーツ的な側面において果たすべき役割を考えるとということにもなるであろうが、それがただ底の浅いだけのものになってしまうのではないことは言うまでもない。ラインホルド・ニーバーは、その著作『人間の運命』において、宗教改革とルネサンスの総合という世界的課題を提示しているが、そのような挑戦の可能性を念頭に置きつつ、あえて言うならば、究極的なところにおいて目指されるべきものは、ヒューマニティ (humanity) とデイヴィニティ (divinity) との、もしくは、これまでしばしばなされてきた捉え方で言うならば、神と人との垂直次元と、隣人相互の水平次元との現代的・文化的総合、ということにもなる。さらに言うならば、水平次元がわかるためには、垂直次元を理解することが、言い換えれば、人が人であることがわかるためには、神が神であることがわかる必要がある。また、キリスト教的観点から見るならば、人文学もしくは人間学も、神学に支えられてこそ存立するところのものである。現在、キ

リスト教科目の履修証明プログラムを新たに構想しつつあるところでもあるが、以上のような理念をも念頭におきつつ、実践の歩みを進めていきたい。

一方、キリスト教教育は、他の教育の営み同様、何よりも学生一人一人に届くものでなければならない。そのためにも、アクティブ・ラーニングの要素などをいかにして授業に取り入れていくかを具体的に考えるなど、学生自身の実存的問いや課題に寄り添い訴えかける姿勢と工夫が常に必要であることはもちろんである。そのよりよい実践のために、教員共同での授業研究の機会を設けることなども考えられるだろう。

また、本学には学力的にも多様な学生が集められ、留学生をはじめとして様々な個別の対応の必要がある学生が多いが、キリスト教科目であるかどうかにかかわらず、その傾向はいっそう強まっていく可能性がある。そのような状況に対しては、単に教員個々の奉仕に依存するのではなく、チームとしての取り組みも必要となるだろう。

しかしまた一方で、人間は様々な意味において、神に問いかける前に、神から問いかけられている存在でもある。そうであるとき、学生個々の生き方あり方や実存的問いが、時にはラジカルかつトータルに超越的視点から投げかえされ、そこから新たなパースペクティブが拓けるということも起こりうるだろう。それは一方では時に、キリスト教教育の場面を通して、学生が自らの「コンフォート・ゾーン」から踏み出すことを促す機会となるかもしれない。いずれにせよ、そのようにし

て、究極的には、学生たちがイエス・キリストの神の愛に、また、霊的次元の深みに触れ、そこから生きる勇気を得ることができるならば、それ以上の「実学」はないだろう。

さらに、授業内外での主体的学びのために、学生の日頃の思いや問題意識に寄り添った、新たな現代のカテキズム（信仰問答）を作成するというのも考えてよいかもしれない。キリスト教思想ならびにキリスト教教育は、「自己実現」の先に、超越的存在に導かれる「自己超越」の道があることを示唆してきた。むしろ、深いところにおいて後者は前者に先立つと同時にそれを成就するものであると言ってもよいかもしれない。人間は、人間以上のものを恋慕う存在でもあり、アウグスティヌスの「私はあなた（神）に安らぐまでは、安らぐことはありません」という告白は、思いのほか人間存在に通底する真実でもある。そうだとすれば、まだ自らも明確には気づいていない最奥の願いに真正面から応えるべく、上述の新しいカテキズム作成の可能性も含めて、キリスト教教育ならではの行き方を臆することなく貫いていくことも重要であると考えらる。

キリスト教活動について

キリスト教活動に関して、まず、キリスト教センターは、本学にいくつかある「センター」をはじめとする各部署のいわば精神的センターとしての役割を担うに足る信頼を得るために努力しなければならない。そして、これからはより自覚的に、「キリスト教センターのための大学」ではなく「大学のための

キリスト教センター」を目指していかなければならないと思う。さらに、キリスト教センターはそもそも法人全体の組織である。すでに広報センターが、学院全体としての広報への取り組みを始めているが、キリスト教センターも遅ればせながら、学院全体のキリスト教を中心とした一致の実質化、諸教会との連携強化、また、外部への効果的な広報のために一層努力していきたい。SNSの有効な活用についても考えていきたい。

そのためにも、まず、全学礼拝が、学生ならびに教職員の共なる歩みの拠り所となるべく、その守り方について検討と改善を重ねていきたい。チャペルを礼拝時間以外にも週に一度開放し、祈りの場とすることを新たに始めることにしている。また、パイプオルガンの設置計画が本格的に動き出しているが、大学と教会の礼拝はもちろんのこと、コンサートなど、外部との連携による企画にも積極的に活用し、チャペルが地域の文化センターの役割を担いつつ、本学の広報にも資するようなかたちで、チャペルがいつそう開かれた場になるためにパイプオルガンを生かしていきたいと考える。

また、これまで、春と秋のキリスト教週間における音楽会や講演会、リトリートやクリスマスツリー点火祭などが全学行事として持たれてきた。新入生を迎えるNSO（New Student Orientation）についても、学科のそれに加えて、在学生在が新入生を歓迎し、その後の大学生活やクラブ活動につなげる学生NSOも開催されるようになって今に至る。さらに、ボランティア活動支援センターを中

心とする、東日本大震災の被災地への訪問をはじめとするボランティア活動にも本学は力を入れており、キリスト教センターも現地での礼拝などに関わってきた。これらの行事や活動については、今後も、さらによいものとするために工夫を重ねていきたい。

このような、学部・学科・学年を超えた活動は、比較的小規模で、また、キリスト教という拠りどころが明確に与えられている本学ならではの取り組みとして少なからぬ意義を持つものであると思われる。さらに言えば、たとえばリトリートにおいては、多様な背景と状況の中にある学生たちが一同に介して語り合いと交わりに参加するが、それは、若干大袈裟ではあるが、アクティブ・ラーニングやイエナ・プラン的实践への早くからの取り組みであったと捉えることも、手前味噌ながら許されるのではないかと思う。それはまた、老若男女はじめ様々な人々が神によって集められ、心をつにして礼拝を献げる、多様性と一致とを総合した教会そのものありかたを一面において反映するものであるという意味においても重要なものである。このような取り組みをさらによいものとし、また、キリスト教教育と諸領域における教育との連携を実質的に形成していくためにも、教職員の積極的な参加と協力をぜひお願いしたい。

また、離学者問題が大きな課題となっているが、以上のような諸行事・活動を通して学びの「共同体」に自分もその一員として関わっているという実感を学生が持つことができるならば、聖学院大学が学生にとっての単なる通過点ではなく、新たな一つの「ホーム」と

なりうるだろう。そのようなコミュニティ感の醸成も、目下の課題に関連する重要な事柄であると思われる。

また、近年、礼拝や行事またクラブ活動などのキリスト教関連活動（キリスト教関連に限ったことではないが）への学生の参加意欲が若干薄れつつあるようにも見受けられ、心配なところでもある。そのような公共的もしくは協働的場へと学生たちが目を向けてくれるようになるために、何をなすべきかについて、キリスト者であるかどうかに関わらず、アイデアや要望などがあれば、遠慮なく提案をいただきたいところでもある。

おわりに

新渡戸稲造は、‘to do’（何をなすか）の基底をなすものとしての‘to be’（いかにあるか）の重要性を説いた。本学におけるキリスト教教育ならびに活動のありかたについて考えるにあたって、まず、大学に連なるキリスト者たちが、その生き方あり方によって神の愛と義を証する器たるべく努める必要がある。それは「不可能の可能性」に属する目標であるかもしれない。しかし、少なくともそのような役割をキリスト者は期待されていることを心に覚えておく必要はある。

いずれにせよ、そのような「キリストの証人」というありかたを根本にしたキリスト者教職員の積極的な働きがまず必要であり、また、その証しの務めのために聖学院大学に導かれ招かれているということを、改めて念頭におくべきであると思う。そして、その務めをなすために、一方ではチャプレンをも有効

に用いていただきたい。これまでチャプレンは、ともすれば「上から目線」で十分な配慮もないままにモノを言う、というような印象を持たれることもなきにしもあらずであったが、そのようなことがないよう、仕える者としての自覚をしっかり持っていきたい。ただ、キリスト教主義大学としてのあり方を堅持していくことこそが本学の「サスティナブル」な歩みを支えるものであるとも考えるゆえに、譲れない一線もまたあるだろうということは付け加えておきたい。もう一つ、本学に限ったことではないが、キリスト者は、外側のみをとりつくろった「偽善者」の「白く塗った墓」(マタイ 23 章)のごとき姿をさらしてはいないかということも、常に自ら問うてい

かなければならないだろう。

楽観を許さない昨今の厳しい状況の中で、まだまだ発展途上にある本学がこれからも前進し続けるためにも、とりわけキリスト教職員には、この機会に、先に述べた「キリストの証人」としての自らの使命をしっかり心に覚えていただきたいと思う。また、そのようなキリスト者たちの自覚と働きがあっはじめて、全教職員また関係者の十全な理解と協力を得られるものであると考える。そしてまた、本学が今後さらに発展し、社会そして世界への貢献をなしていくためにも、聖学院大学に連なるすべての同労者に、キリスト教教育ならびに活動へのいっそうの理解と協力を重ねてお願いしたい。



かつては卒業式前日に行なわれていた卒業礼拝 (2010 年)

コラム

聖学院 90 + 110 周年記念 一万人のクリスマス in 武道館

1993 年 11 月 24 日 (水)

2 : 30pm ~ 4 : 00p.m

構成・演出：松岡勸子

ナレーション：長岡輝子・岸田今日子・
松井範雄

1993 年 11 月 24 日 (水)、聖学院学校創立 90 周年とディサイプルス派伝道開始 110 周年を記念して、「一万人のクリスマス in 武道館」を開催した。このイベントは「オール聖学院」として、聖学院各校が協力する中で実現の運びとなったのだが、当時、女子聖学院短期大学の教員として故井上伸子先生とともに演出補助、運営メンバーとして関わった者として、この催しは私の中で色々な意味で忘れ得ぬ鮮烈な記憶として今でも心の中に刻まれている。

具体的には、「クリスマス・ページェント」の中の聖学院大学と短期大学共同で担当したシーンにおける準備、とりわけ体育館で行われた「演技」練習には、当時の大井恵子職員をはじめとする職員と多くの学生キャスト・スタッフとの激烈ともいえる交流があり、今では「よくそんなことが出来たものだ！」という深い感慨をもって思い出される。

当時作成されたチラシには次のように記されている。

聖学院は今年、学校創立 90 周年・ディサイプルス派伝道開始 110 周年を迎え、数々の

記念事業を計画しています。武道館におけるクリスマス・ページェントはそのクライマックスとも言えるもので、在校生・教職員、同窓生・ご父母・ご家族が一堂に会して、聖学院の一体感を味わいつつ、クリスマスを祝う一大行事です。

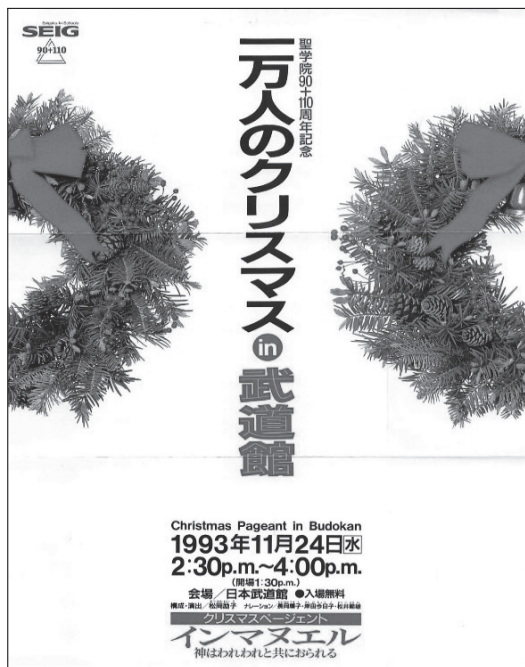
ディサイプルス派の宣教師たちが日本の地に足を踏み入れてから 110 年が経ちました。さらに彼らが聖学院を設立してから 90 年。現在の私たちの繁栄は、これらの宣教師たちの苦闘の上に築かれているといっても過言ではありません。この記念の年に私たちはもう一度このことを確認したいと思います。

私たちの学院が 21 世紀に向けてさらに大きく発展を遂げるための力は、伝統を学び直すことによって得られるものです。この 90 年間に聖学院が作り上げてきた財産は人的にも物的にも多大であるといえます。これを機にそれらすべての力を結集し、新しい時代にふさわしい学院へと成長させていきたいものです。

11 月 24 日 (水)、日本武道館で、私たちの聖学院と創造者なる神につながる喜びを分かち合いましょう。みなさま、ぜひおいでください。

なお、当日の様子は幸いにもビデオ録画され、現在では DVD に保存されている。この映像は 2018 年 12 月 8 日 (土) に開催された「聖学院大学創立 30 周年記念ホームカミングデー」において一部上映された。

(清水均)



(チラシ 表面)

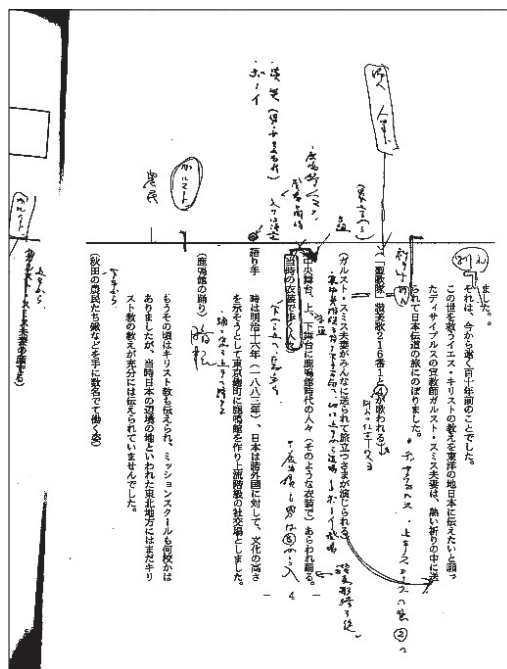


(パンフレット表紙)

「90+110」CAST (一部)

司会	石川 功雄 (司会)	トレンジャー (トレンジャー)
演出	松岡 隆子 (演出)	「アムレ」 「リジー」
音楽	松岡 隆子 (音楽)	松岡 隆子 (音楽)
照明	松岡 隆子 (照明)	松岡 隆子 (照明)
音響	松岡 隆子 (音響)	松岡 隆子 (音響)
衣装	松岡 隆子 (衣装)	松岡 隆子 (衣装)
美術	松岡 隆子 (美術)	松岡 隆子 (美術)
交通	松岡 隆子 (交通)	松岡 隆子 (交通)
宣伝	松岡 隆子 (宣伝)	松岡 隆子 (宣伝)
その他	松岡 隆子 (その他)	松岡 隆子 (その他)

(キャスト表の一部)



(脚本の一部)

キリスト教教育・関係資料

(1) 創立記念礼拝および特別講演

年度	講演者 / 公演者・タイトル	会場
1988	《開学記念礼拝》 ・北森嘉蔵「人間形成の課題」	体育館
	《開学記念講演と音楽会》 ・京極純一「現代における政治の課題」 ・東京メトロポリタン室内管弦楽団	大宮ソニックシティ
1989	・大木英夫「我ここに立つ」	体育館
1990	・近藤勝彦「キリストの十字架による自由」 ・河上民雄「東欧の民主化と社会主義の変貌」 ・隅谷三喜男「アジアの社会情勢とキリスト教」	上尾市福祉会館
1991	・福田歓一「国際社会における日本の役割とキリスト教」 ・カンタータ 80 番 (パッサカントークラブ・聖歌隊)	大宮ソニックシティ
1992	・大江健三郎「まなぶ・おぼえる・さとのる」 ・ユーオーディア・アンサンブル	大宮ソニックシティ
1993	・保谷六郎「ガルスとその生涯」 ・ハレルヤ・コーラス	学内 大宮ソニックシティ
1994	・加賀乙彦「キリスト教とわたし」	川口リリア
1995	・日野原重明「若者と老人との生と死に対する考え方と生き方」	大宮ソニックシティ
1996	・池明観「現代のみことばと大学」	川口リリア
1997	・市川森一「何処へ」 ・ロシア国立モスクワ合唱団	大宮ソニックシティ
1998	・阿部志郎「21 世紀の福祉をめざして 一生きる意味を問うー」 ・石川 静／大嶋義実 (ヴァイオリン・フルート)	大宮ソニックシティ
1999	・斎藤眞「見知らぬ人々とその結びつき ーアメリカ社会の形成ー」 ・ライブツィヒ弦楽四重奏団	大宮ソニックシティ
2000	・飯坂良明「政治と愛」 ・ブラシシモ・ウィーン	大宮ソニックシティ
2001	・ラリー・ラージ「知識への投資 ー明るい未来のためにー」 ・スーク室内オーケストラ (秋：米国同時多発テロのため中止)	大宮ソニックシティ
2002	・香山壽夫「かたち といのち 一人は何によって建てるのかー」 ・津堅直弘プラスアンサンブル	大宮ソニックシティ
2003	・大木英夫「自由とは未来への選択」 ・山形由美 (フルート)・松井久子 (ハーブ)	大宮ソニックシティ
2004	・阿久戸光晴「人間の尊厳への問いかけ」(礼拝のみ) ・NHK 交響楽団メンバー	大宮ソニックシティ

年度	講演者 / 公演者・タイトル	会場
2005	<キリスト教講演会> ・金子晴勇「ルターと現代 一生と死について」 <創立記念講演会> ・クリストフ・シュヴェーベル「宗教改革の遺産 ―それは未来への約束なのか?―」 <創立記念音楽会> ・ウィーン・ザイフェルト弦楽四重奏団	大学チャペル (以降は大学チャペルで開催)
2006	・北城格太郎「21世紀の世界に生きる皆さんへ」 ・柏木昭「「QOL (生活の質)」を高める」	
2007	・小倉義明「一心二葉 ―わたしの大学一年時代―」 ・柏木哲夫「生命といのちを支えるケア」 <創立記念音楽会> ・ウィーン・ザイフェルト弦楽四重奏団、小林秀雄 (指揮・作曲家)	
2008	・有賀貞「アメリカ民主主義のゆくえ」 ・阿部志郎「人生 ―愛し愛されて―」 <創立記念音楽会> ・ウィーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団	
2009	・日野原重明「光を受けて生きる生き方」 ・窪寺俊之「スピリチュアルなものへの魂の叫び」 <創立記念音楽会> ・ウィーン・ザイフェルト弦楽四重奏団	
2010	<創立 22 周年記念講演会> ・姜尚中「生きる意味と教養 ―大学は何のためにあるのか―」 ・片柳榮一「大人であること、子供であること」 <創立記念音楽会> ・ウィーン・フーゴ・ヴォルフ・デュオ	
2011	・菊地順「ジャパニーズ・ドリーム ―勇気、希望、そして夢―」 ・牛津信忠「人格存在に参与し合って生きる ―福祉文化の広がり求めて―」 <創立記念音楽会> ・ゲーデ四重奏団	
2012	・標宣男「エネルギー問題の源流 ―鯨と黒船―」 ・山崎美貴子「被災地支援からみえたもの ―命の尊厳とボランティア―」 <創立記念音楽会> ・ウィーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団	
2013	・姜尚中「〈復初〉の志をともに」 ・芳賀力「未来に種を蒔け」 <創立記念音楽会> ・ウィーン三重奏団 TRIO WIEN	
2014	・姜尚中「聖学院大学が目指すもの」 ・高橋義文「『あるがまま』と『あるべき』のあいだ ―ラインホルド・ニーバーに学ぶ―」 <創立記念音楽会> ・ゲーデ弦楽四重奏団 Gaede Quartet	

年度	講演者 / 公演者・タイトル	会場
2015	・月本昭男「『われここに立つ』 —良心について考える—」	
2016	・関根清三「聖書の『真実』 —研究の何がおもしろいか?—」 <創立記念音楽会> ・ウィーン・フーゴ・ヴォルフ五重奏団 Hugo Wolf Quintet Wien	
2017	・江藤直純「何を頼りに生きるのか —宗教改革の精神が現代日本に語りかけること—」 <創立記念音楽会> ・ゲーデ・ピアノ五重奏団&ギュンター・ザイフェルト Gaede Piano Quintet & Günter Seifert	

(2) キリスト教週間

1995年までは春の開催をキリスト教強調週間、秋の開催をキリスト教文化週間とよんでいた。1996年以降は、春のキリスト教週間、秋のキリスト教週間とよんでいる。

1992年度以降の秋のキリスト教週間の講演会は創立記念講演会に合流するので、春のキリスト教週間をメインに記した。

年度	講演者 / 公演者・タイトル	会場
1988	春：隅谷三喜男「あなたはどこにいるか」 秋：青木優「生きること・愛すること」、青木道代「幼な子に学ぶ」	一号館講堂 一号館講堂
1989	春：隅谷三喜男「転換点に立つ日本」 ：ドナルド・S・スタントン「アメリカにおける大学と社会」 秋：阿部志郎「喜びと望みを運ぶ」	大宮ソニックシティ 体育館
1990	春：市川恭二「神は本当に愛なのか —十字架を仰ぎ—」	体育館
1991	春：加藤常昭「祝福に生きる」 秋：土肥隆一「政治と宗教 —二足のワラジで赤ジュウタンを踏む—」 ：田中文雄「20世紀のキリスト教美術」	川口リリア 1号館講堂 4号館4階合同教室
1992	春：渡辺和子「人を生かすもの」	川口リリア
1993	春：谷昌恒「誰かがしなければならないことを」	川口リリア
1994	春：新屋徳治「“ガダルカナルからの道” —人間の死と生—」 秋：キリスト教講演会 加藤和彦「人生の愛し方」	川口リリア 4号館4階合同教室
1995	・新垣勉「出会いの喜び」	大宮ソニックシティ
1996	・李仁夏「自己愛と隣人愛」	大宮ソニックシティ
1997	・小坂忠「POWER OF LOVE」	大宮ソニックシティ
1998	・柳瀬洋「喜びの賛歌を知ってから」	川口リリア
1999	・森祐理「ありのままの姿で」	大宮ソニックシティ
2000	・千葉茂樹「ローソクの光とは何か —マザー・テレサとブラザー・ゼノー—」	大宮ソニックシティ

年度	講演者 / 公演者・タイトル	会場
2001	・大宮溥「心が燃える」	大宮ソニックシティ
2002	・森祐理「ありがとうを賛美にのせて」	大宮ソニックシティ
2003	・船戸良隆「人はパンのみにて生きず —若者よ、21世紀をどう生きるか—」	大宮ソニックシティ
2004	・池田守男「与える喜びをわが喜びに —これからの社会と人間像—」	大宮ソニックシティ
2005	・山北宣久「ください ください —真に求むべきものは何か—」	大学チャペル (以降は大学チャペルで開催)
2006	・賀来周一「サンタクロースに聞いた話 —現代社会の忘れ物—」	
2007	・阿久戸光晴「日本国憲法施行 60 年の現代的意義 —福音の広がり新しい国家・社会体制の定着の課題—」	
2008	・三浦光世「三浦綾子と生きた 40 年」	
2009	(講演会なし)	
2010	・張永日「有神論と理想的民主主義」	
2011	・桃井和馬「神にゆだねる —地球規模の破壊を前に—」	
2012	・岩渕まこと・由美子 ゴスペルコンサート「生きているから」	
2013	・石橋秀雄「思いがけない平安 —弱いときにこそ強い—」	
2014	・清水正之「愛より以前 —関係性の倫理学—」	
2015	・森祐理 キリスト教音楽会	
2016	・国友淑弘 キリスト教音楽会「ゴスペルを叫ぼう！」	
2017	・松谷友香・吉田恵 キリスト教音楽会	

(3) リトリート (修養会)

※スプリングキャンプはテーマをつけていない。

年度	概要	会場
1988	(短大学生宗教委員会主催) ・スプリングキャンプ (5月13日～14日) : 短大16 大学3 教職員 8 合計27名 ・リトリートイン軽井沢 (8月18日～20日) : 学生28 教職員12 合計40名 「新しい自分を見つけよう」	短大付属幼稚園 女子聖学院セミナー・ハウス

年度	概要	会場
1989	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月19日～20日）：学生21短大22教職員7合計50名 ・リトリートイン清里（7月20日～22日）：学生31教職員20合計51名 「弱虫からの脱出 一本当の自分って何だろうー」 ・キリスト教諸グループ春の合宿（大学・短大合同）（2月5日～7日）：学生12短大9教職員5合計26名 	短大付属幼稚園 青山学院大学八ヶ岳寮 大学セミナー・ハウス（八王子）
1990	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月18日～19日）：学生25短大48教職員7合計80名 ・リトリートイン清里（7月19日～21日）：学生29教職員21合計50名 「あきらめないで逃げないで… 一求めれば今、扉が開くから…」 ・春の合宿（2月18日～20日）：学生22短大25教職員9合計56名 	短大付属幼稚園 青山学院大学八ヶ岳寮 大学セミナー・ハウス（八王子）
1991	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月17日～18日）：学生41短大42教職員7合計90名 ・リトリートイン清里（7月17日～19日）：学生44教職員19合計63名 「この友と共に生きる “Love God & Serve His People”」 	短大付属幼稚園 青山学院大学八ヶ岳寮
1992	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月15日～16日）：学生42短大31教職員8他大学3合計90名 ・リトリートイン清里（7月16日～18日）：学生38教職員24合計62名 「たとえば君がいるだけで」 ・春の合宿（2月18日～20日）：学生30短大15教職員16合計61名 	4号館4階合同教室 青山学院大学八ヶ岳寮 大学セミナー・ハウス（八王子）
1993	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月15日～16日）：学生47短大27教職員9合計83名 ・リトリートイン小諸（7月15日～17日）：学生38卒1教職員24合計63名 「さがしものは何ですか」 ・春の合宿（2月17日～19日）：学生20卒4短大19教職員15合計58名 「今を見つめなおす」 	4号館4階合同教室 聖学院山荘小諸・湯の丸高原 大学セミナー・ハウス（八王子）
1994	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月20日～21日）：学生45短大44卒10教職員10他大学6合計115名 ・リトリートイン小諸（7月18日～20日）：学生23教職員16卒2合計41名 「“Starting Over” 一翼をひろげ、飛びたとうー」 ・春の合宿（2/16～18）：学生12卒3短大8教職員18合計41名 「“Who am I ?” 『自分らしさ』」 	4号館4階合同教室 聖学院山荘 小諸・湯の丸高原 大学セミナー・ハウス（八王子）

年度	概要	会場
1995	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（6月2日～3日）：学生18短大20卒3教職員11合計52名 ・リトリートイン小諸（7月18日～20日）：学生19卒2教職員24合計45名 「“Voluntarism” —他者と共に生きる自分— 〈ひとりの世界から世界のひとりへ〉」 ・キリスト教八王子合宿（2月8日～10日）：学生15卒2短大7教職員18合計42名 「愛したことがありますか」 	<p>4号館ほか 聖学院山荘 小諸・湯の丸高原</p> <p>大学セミナー・ハウス（八王子）</p>
1996	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月31日～6月1日）：学生30卒3短大16短大卒2教職員11合計62名 「あなたの大切なものは何ですか —Dreams come true—」 ・リトリートイン小諸（7月29日～31日）：学生19卒3教職員22合計44名 「『はじめの一步』 出会いを通して…」 ・八王子合宿（2月20日～22日）：学生23卒2短大5教職員18合計48名 「今を生きる —過ぎゆく瞬間（とき）の中で…—」 	<p>4号館、みどり幼稚園、すみれ館</p> <p>聖学院山荘 小諸・湯の丸高原 大学セミナー・ハウス（八王子）</p>
1997	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月30日～31日）：学生42大卒4短大11短卒4教職員12合計73名 ・リトリートイン小諸（7月29日～31日）：学生25卒4教職員21合計50名 「あなたとわたし、わかりあえますか？ —共歎共苦—」 ・八王子合宿（2月19日～21日）：学生19卒5短大4教職員21合計49名 「あなたは誰？」 	<p>4号館ほか</p> <p>聖学院山荘 小諸・湯の丸高原 大学セミナー・ハウス（八王子）</p>
1998	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（6月5日～6日）：大学55短大3卒2教職員8合計68名 ・リトリートイン御殿場（7月28日～30日）：学生34卒1教職員28合計63名 「あなたの愛は本物ですか？ —人を愛するとは—」 ・八王子合宿（2月18日～20日）：学生32短大4教職員25合計61名 「ともだち —うそじゃないともだちのレシピ—」 	<p>4号館4階会議室、みどり幼稚園、すみれ館</p> <p>YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）</p>
1999	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（6月4日～5日）：大学59教職員19合計78名 ・リトリートイン御殿場（7月28日～30日）：学生51教職員36合計87名 「強い人間ってなあに？ —自分の弱さをみつめて—」 ・八王子合宿（2月17日～19日）：学生35教職員20合計55名 「生きる喜び —苦しみに出会ったとき—」 	<p>4号館4階会議室、みどり幼稚園、すみれ館</p> <p>YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）</p>

年度	概要	会場
2000	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（6月2日～3日）：学生66教職員13その他2合計81名 ・リトリートイン御殿場（7月26日～28日）：学生41教職員29合計70名 「自信と謙虚さ」 ・八王子合宿（2月15日～17日）：学生39教職員28合計67名 「希望—今、わたしたちにできること—」 	4号館4階会議室、 みどり幼稚園、すみれ館 YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）
2001	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月25日～26日）：学生104教職員15その他3合計122名 ・リトリートイン御殿場（7月25日～27日）：学生67教職員29合計96名 「学生—学ぶこと、生きること—」 ・八王子合宿（2月14日～16日）：学生44教職員26合計70名 「幸福論」 	4号館4階会議室、 みどり幼稚園、すみれ館 YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）
2002	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月17日～18日）：学生109教職員12その他3合計124名 ・リトリート（7月24日～26日）：学生57教職員29合計86名 「大切なこと—何のために生きるのか？—」 ・八王子合宿（2月13日～15日）：学生39教職員25合計64名 「チカラ—生きる力—」 	4号館4階会議室、 みどり幼稚園、すみれ館 YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）
2003	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリングキャンプ（5月16日～17日）：学生91教職員9その他3合計103名 ・リトリート（7月23日～25日）：学生40教職員32合計72名 「よい大人の条件とは？」 ・八王子合宿（2月12日～14日）：学生34教職員21合計55名 「死とその先にあるもの—死はマイナスイメージか—」 	4号館4階会議室、 聖学院みどり幼稚園、すみれ館 YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）
2004	<ul style="list-style-type: none"> ・夏のリトリート（7月28日～30日）：学生62教職員28合計90名 「「フツウ」という名のボーダーライン」 ・冬のリトリート（2月17日～19日）：学生35教職員22合計57名 「結婚—人と共に生きる—」 	YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）
2005	<ul style="list-style-type: none"> ・夏のリトリート（7月25日～27日）：学生57教職員33合計90名 「出会い—かけがえのない宝モノ—」 ・冬のリトリート（2月16日～18日）：学生43教職員26合計69名 「豊かな人生—何によって得られるか？—」 	YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）
2006	<ul style="list-style-type: none"> ・夏のリトリート（7月31日～8月2日）：学生53教職員36合計89名 「本当に必要なものとは？」 ・冬のリトリート（2月15日～17日）：学生47教職員29合計76名 「他者と生きるには」 	大学セミナー・ハウス（八王子） 大学セミナー・ハウス（八王子）

年度	概要	会場
2007	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（8月1日～3日）：学生70教職員28合計98名 「仲間は何を得るもの？得られるもの？—共に生きる—」 冬のリトリート（2月12日～14日）：学生69教職員23合計92名 「人と人との関係—ことばとところ—」 	YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）
2008	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（8月7日～9日）：学生52教職員25合計77名 「ライフパートナー—共に歩む—」 冬のリトリート（2月11日～13日）：学生70教職員21合計91名 「心のよりどころとは？—自分の居場所はどこか—」 	YMCA 東山荘 御殿場 大学セミナー・ハウス（八王子）
2009	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（7月30日～8月1日）：学生57教職員25合計82名 「絆—人と人との繋がり—」 冬のリトリート（2月8日～10日）：学生61教職員17合計78名 「それぞれの終着点—memento mori—」 	ホテルグリーンプラザ上越 大学セミナー・ハウス（八王子）
2010	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（7月29日～31日）：学生34教職員22合計56名 「生まれるもの、無くなるもの—移り行く時代—」 冬のリトリート（2月15日～17日）：学生42教職員21合計63名 「Gift 愛のプレゼント—もう一度手をつなぐために—」 	ホテルグリーンプラザ上越 大学セミナー・ハウス（八王子）
2011	<ul style="list-style-type: none"> 冬のリトリート（2月16日～17日）：学生45教職員18合計63名 「この場所からのチャレンジ—今を乗り越えるためには—」 	ホテルヘリテージ
2012	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（8月10日～11日）：学生28教職員24合計52名 「人の中で生きる—わかりあうとはどういうことか—」 冬のリトリート（2月12日）：学生31教職員26合計57名 「何を大切に生きていくか—あなたの優先順位とは—」 	ホテルヘリテージ 聖学院大学エルピスホール他
2013	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（8月9日～10日）：学生17教職員24その他2合計43名 「I am I—ありのままにいきるとは—」 冬のリトリート（2月10日～11日）：学生41教職員19合計60名 「人生いろいろ～それは神様からのお・も・て・な・し？」 	ホテルヘリテージ ホテルヘリテージ
2014	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（8月5日～6日）：学生28教職員25合計53名 「ありのままの私で」 冬のリトリート（2月11日～12日）：学生59教職員21合計80名 「大学生活でたいせつなこと、たいせつにしていること」 	ホテルヘリテージ ホテルヘリテージ
2015	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（8月10日～11日）：学生28教職員25合計53名 「強さと弱さとはなにか—ポジティブに生きる—」 冬のリトリート（2月11日～12日）：学生47教職員26合計73名 「平和を実現するには」 	ホテルヘリテージ ホテルヘリテージ
2016	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（8月10日～11日）：学生39教職員21合計60名 「それぞれに与えられた賜物をどう活かすか？」 冬のリトリート（2月9日～10日）：学生36教職員17合計53名 「より良い社会をつくるために—私にできることは？—」 	ホテルヘリテージ ホテルヘリテージ
2017	<ul style="list-style-type: none"> 夏のリトリート（8月10日～11日）：学生32教職員17合計49名 「試練は何のためにあるのか？—乗り越えるべき壁—」 冬のリトリート（2月8日～9日）：学生28教職員19合計47名 「What is Love?—愛するということ—」 	ホテルヘリテージ ホテルヘリテージ

(4) キリスト教と諸学の会

日付	講演者	講演題
1985年5月29日	沓掛 義男	再生への軌跡 —人格教育への提言—
1985年6月26日	W.G. クレーラ	一般教育における人間教育
1985年10月23日	福田ソノ子	教えるとき 教えられること
1986年5月28日	藤樫 道也	大学教育の国際化への道 —「開放性」への意識の変革を求めて—
1986年7月9日	西谷 幸介	人は何によって人となるか
1986年11月5日	竹野 一雄	文学研究とキリスト教 —キリスト教教義と文学の理論—
1987年5月27日	内藤淳一郎	「時」について
1987年9月30日	岩崎 摂子	国際化時代におけるキリスト教学校の「言語教育」 —本質とその展開—
1987年11月25日	杉本 栄司	シェークスピア悲劇とキリスト教
1988年6月29日	志田 俊郎	キリスト教と自然科学
1988年10月6日	西谷 幸介	宗教の文化的・言語的理解とキリスト教学校教育
1989年1月18日	黒木 章	北村透谷とキリスト教
1989年6月21日	酒井 文夫	信教自由・政教分離を問う —欧米・日本における「国家と宗教」—
1989年10月4日	石津 靖大	キリスト教と日本教育史
1989年12月14日	土方 透	パラドクスを超えて —相対という絶対と絶対という相対—
1990年5月9日	金丸 平八	天保7年に発生した所謂“甲州騒動”について
1990年10月3日	西谷 博之	島尾敏雄『死の棘』をめぐって
1991年5月9日	隅谷三喜男	日本のキリスト教を考える
1991年10月23日	濱田 辰雄	日本伝道の可能性 —八木重吉の自然感を手がかりとして—
1992年5月14日	鶴沼 裕子	日本思想史学としてのキリスト教史研究 —その方法と意義をめぐって—
1992年10月28日	清水 均	近代詩人におけるキリスト教との〈距離〉 —透谷・藤村にみる入信後のゆくえ—
1993年5月20日	村上 公久	「国際的貢献」が直面する現実 —大国家と小国家のはなし・対フィリピン共和国 ODA 事業を通じて私が体験したこと—
1993年10月27日	村山 順吉	音楽的“TENSION”の中で
1994年5月19日	原 一子	「哲学的信仰」とキリスト教
1994年10月26日	氏家 理恵	T.S. エリオットにおける愛
1995年5月18日	西村 虔	プラトンの対話：ユウテュプロン —原書講読のすすめ—

日付	講演者	講演題
1995年10月26日	渡邊 守道	ニコラス・クザーヌス研究の新動向 — “最初の近世的思想家” か中世後期の神秘主義者か—
1996年5月23日	澁谷 浩	内村鑑三と『種の論理』
1996年10月23日	山本 昂	「日本におけるロバート・ブラウニング受容の三つの流れ」について
1997年5月21日	荒木 忠男	体験的キリスト教序説 —外交官と宗教—
1997年10月29日	松川 成夫	キリスト教と教育の接点
1998年6月18日	熊澤 義宣	ディアコニア学としての人間福祉学 —キリスト教と人間福祉学—
1998年10月28日	梅津 順一	アダム・スミスとスコットランド教会
1999年5月27日	飯坂 良明	政治学とキリスト教
1999年10月27日	須山 静夫	アメリカ文学と日本文学の一つの接点 —フラナリー・オコナーと大江健三郎—
2000年6月21日	本田 和子	20世紀「児童中心主義」と「優生学」
2000年10月25日	R.D. バーガー	最近のアメリカと日本の讃美歌と聖書訳における言語の動向
2001年6月20日	富沢 賢治	聖学院を基盤とする NPO —社会的経済の理論と実践—
2001年10月24日	柏木 昭	福祉実践を考える
2002年5月29日	吉田 博司	平和文化の使者 —吉野作造—
2002年10月23日	安酸 敏真	もう一つの「レッシングが事を記す」
2003年5月28日	有賀 貞	高木八尺におけるアメリカと日本 —アメリカ研究の過去と現在—
2003年10月29日	森下みさ子	手遊び物から玩具へ —おもちゃの近代—
2004年5月26日	渡邊 正人	人間の軌跡を追う —チャペル建設予定地の発掘調査から—
2004年10月27日	土方 透	パラドクスを超えて (Part2) —神のパラドクスと宗教対話のアポリアー
2005年5月25日	佐野 正子	17世紀オックスフォード大学におけるピューリタンの革命
2005年10月26日	増田 公香	加齢する肢体不自由障害者の‘参加’ —幼児期から高齢期までを視野に入れたトータルな援助の実現に向けて—
2006年5月24日	近藤 存志	内的信仰の表現としてのゴシック・リヴァイヴァル
2006年10月25日	大木 雅夫	EUにおける国家と宗教
2007年5月23日	永井理恵子	明治後期竣工の幼稚園舎二棟の建築と教育に見る地域力 —愛珠幼稚園 (大阪市) と旭東幼稚園 (岡山市) —
2007年10月24日	村松 晋	教育者としての三谷隆正

日付	講演者	講演題
2008年5月21日	小池 茂子	キリスト教系中学校及び高等学校に在籍する生徒の道徳意識の現状とその背景（生育歴・親との関係・キリスト教学校教育等）—2005年に実施したアンケート調査結果を中心に—
2009年5月27日	高橋 愛子	〈合法性〉と〈状況適合的擬似合法性〉の間 —ワイマール期を手がかりとして—
2009年10月21日	瀬名 浩一	コミュニティを創る社会起業家達
2010年6月23日	K.O. アンダスン	Christianity in the Poetry of Stevie Smith
2010年10月20日	川崎 司	若き高木壬太郎 —静岡での日々—
2011年5月25日	寺崎 恵子	学校の閑暇 —ルソーにならい 身の感覚をたよりにして—
2011年10月19日	相川 章子	精神保健福祉領域におけるプロシューマー研究
2012年5月30日	松尾 秀哉	ベルギーの政治空白を考える
2012年10月24日	河島 茂生	情報社会のなかで複雑化／一元化する自己
2013年5月29日	E.D. オズバーン	The Fate of the Unevangelized: No Hope? —伝道されていない人の運命は?—
2013年10月23日	菊池 有希	鳥崎藤村『新生』再考
2014年5月28日	松本 祐子	ヒロインはなぜ悪魔になったのか? —The Life and Loves of a She Devilに表象される《悪魔》を読み解く—
2014年10月22日	窪寺 俊之	『竹取物語』の死生観 —日本人の心の基層を探る—
2015年5月27日	木下 大生	罪を犯した知的障害者の支援の現状と課題
2015年10月21日	土方 透	イスラム国、シャルリーエブド、アウシュビッツ以後 —パラドクスの彼岸—
2016年5月25日	畠山 宗明	映画と「第二世界」 —アメリカ、ロシア、日本の映画
2016年10月19日	松井慎一郎	江原万里論 —憂国とキリスト教—
2017年5月24日	広瀬 歩美	青年期～中年期における体型と生活課題
2017年10月25日	藤掛 明	コラージュ療法で使う台紙のサイズについて —非行カウンセリングから牧師の心理的支援まで—

(5) 教職員研修会

日付	主題・講演題等	会場
1985年 1月16日	・主題：日本におけるキリスト教学校の意義 ・講演：現代日本におけるキリスト教学校の存在意義（古屋安雄）	2号館音楽室
1986年 1月9日-10日	・主題：よりよきキリスト教学校の建設に向けて —これからの聖学院の使命を考える— ・講演：聖学院の歴史（小倉義明） ・講演：日本におけるキリスト教教育の意義（大木英夫）	西武長瀬ホテル

日付	主題・講演題等	会場
1987年 1月7日-8日	・主題：聖学院の理念と使命 ・講演：聖学院の理念（近藤勝彦）	箱根高原ホテル
1988年 1月7日-8日	・主題：いま、なぜキリスト教か —キリスト教大学の形成課題— ・講演：キリスト教大学の形成課題（中川秀恭）	星野温泉ホテル
1989年 1月6日-7日	・主題：キリスト教信仰の基本 ・講演：イエスの証言（佐古純一郎）	熱海暖海荘
1990年 1月8日-9日	・主題：キリスト教学校で働く喜び ・講演：おそれるな —キリスト教学校で働く喜び—（早坂禮吾）	星野温泉ホテル
1991年 1月7日-8日	・主題：これからの日本とキリスト教教育 ・講演：これからの日本とキリスト教教育（倉松功）	星野温泉ホテル
1992年 1月6日-7日	・主題：主は一つ、信仰は一つ —同じキャンパスの営みの中で— ・講演：現代社会の忘れもの（隅谷三喜男）	熱海後樂園ホテル
1993年 1月8日-9日	・主題：キリスト教学校の歩みを顧みて ・講演：キリスト教学校の歩みを顧みて（深町正信）	熱海後樂園ホテル
1994年 1月7日-8日	・主題：私立大学の明日をめざして ・講演：私立大学の明日をめざして —キリスト者学長の立場から—（衛藤藩吉）	上尾東武ホテル 伊奈県民活動センター
1995年 1月7日	・主題：キリスト教文化としての大学・短大 ・講演：キリスト教文化としての大学・短大（赤城泰） ・講演：戦後50年（大木英夫）	伊奈県民活動センター 大宮パレスホテル
1996年 1月8日-9日	・主題：キリスト教大学の未来像 ・講演：人間観、世界観の確立をめざして（山本襄治） ・挨拶：戦後50年（大木英夫）	上尾東武サロン 上尾第一ホテル
1997年 1月7日-8日	・主題：キリスト教大学の未来像 ・講演：世界におけるキリスト教学校の意義（古屋安雄）	星野温泉ホテル
1998年 1月7日-8日	・主題：聖学院大学の新しい形成 ・講演：ModernizationとGlobalizationの文脈における聖学院大学（大木英夫）	星野温泉ホテル
1999年 1月8日-9日	・主題：聖学院大学の形成理念と教育課題 ・講演・挨拶：聖学院大学のアイデンティティ —20世紀末にあって第三ミレニアムを展望しつつ—（大木英夫）	星野温泉ホテル
2000年 1月7日-8日	・主題：聖学院大学の形成と挑戦 —第三ミレニアムを迎えて— ・講演：聖学院大学の形成と挑戦 —第三ミレニアムを迎えて—（大木英夫） ・発題：これからの大学を目指して —ICUの「ファカルティ・ディヴェロプメント(FD)」の課題（絹川正吉）	大磯プリンスホテル

日付	主題・講演題等	会場
2001年 1月9日-10日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：新しい事態に対する教育力の向上 一個人として、大学全体として― ・シンポジウム：山田麻有美、牛津信忠、山本昂、寺田正義 	大磯プリンスホテル
2002年 1月7日-8日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：学生と教職員 ―新しい関係の創造― ・講演：心の教育（平山正実） ・シンポジウム：学生と教職員 ―新しい関係の創造― 中村磐男、菊地順、森下みさ子 	大磯プリンスホテル
2003年 1月7日-8日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：聖学院教育憲章と大学形成 ―21世紀の聖学院大学― ・挨拶：大木英夫 ・シンポジウム：教育会議総括と大学形成への対応 阿久戸光晴、菊地順、西本憲弘、阿部洋治、標宣男、須山名保子、江川美知子、大森達也、柴田武男、遠山益、奥山正彦 	大磯プリンスホテル
2004年 1月7日-8日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：聖学院100年の歴史と大学の将来 ・挨拶：大木英夫、速水優 ・特別講演：聖学院100年の歴史と展望 ―聖学院大学に期待すること―（小倉義明） 	大磯プリンスホテル
2005年 1月7日-8日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：大学形成 ―チャペル完成の恵みを受けて― ・挨拶：聖なるものの現象（大木英夫） ・特別講演：作ることと教えること（香山壽夫） ・発題：大森達也、清水均、森下みさ子 	大磯プリンスホテル
2006年 1月6日-7日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：大学形成 ―学生の基礎学力向上を目指して― ・年頭挨拶・大木英夫 ・発題 <ul style="list-style-type: none"> ①ゆとり教育の功罪（小川洋） ②学生の精神的課題（牟田隆郎、竹渕香織） ③英語の学力向上の諸方策（M.サベット、メイスみよ子） 	大磯プリンスホテル
2007年 1月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：大学改革の現状と本学のミッション ・年頭挨拶：大木英夫 ・講演：国公立大学の改革と私学への期待 ―法人化移行の経験をふまえて―（本田和子） 	聖学院大学 （以降は聖学院大学で開催）
2008年 1月5日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：現代における聖学院大学の使命 ・年頭挨拶：阿久戸光晴 ・講演：超越の言語と教育（小倉義明） 	
2009年 1月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：教育の質の保証に向けて ―聖学院大学創立50周年を仰いで― ・年頭挨拶：大木英夫、小倉義明 ・基調講演：教育の質の保証に向けて ―聖学院大学創立50周年を仰いで―（阿久戸光晴） ・発題：これからの聖学院大学の歩みを展望して（柴田武男、R.D.バーガー、村山順吉） 	

日付	主題・講演題等	会場
2010年 1月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：キリスト教大学形成の課題 ―プロテスタント日本宣教 150 周年を顧みつつ― ・年頭挨拶：小倉義明 ・講演：キリスト教大学の今日的使命を問う ―東京女子大学初代学長新渡戸稲造の人格論を中心に―（湊晶子） 	
2011年 1月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：聖学院大学・聖学院みどり幼稚園の教育・保育の実をあげるために ・年頭挨拶：小倉義明 ・基調講演：聖学院大学・聖学院みどり幼稚園の教育・保育の実をあげるために（阿久戸光晴） ・発題：土方透、清水正之、田澤薫 	
2012年 1月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：大震災後の日本社会の希望を探し求めて ―聖学院に託された教育・保育の使命― ・年頭挨拶：阿久戸光晴 ・基調講演：大震災復興の現状と課題 ―聖学院大学に託された教育の使命―（小林良彰） ・発題：大高研道、窪寺俊之、永井理恵子、大井恵子 	
2013年 1月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：大震災後の日本社会の希望を探し求めて ―聖学院に託された教育・保育の使命―part2 ・年頭挨拶：阿久戸光晴 ・基調講演：復旧・復興拠点としての大学（坂田隆） 	
2014年 1月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：聖学院大学の使命と教育 ・挨拶：阿久戸光晴 ・講演：キリスト教大学の使命 ―学生相談から見える今日の学生の課題―（町田健一） 	
2015年 1月12日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：キリスト教大学の進むべき道 ・年頭挨拶：姜尚中 ・講演：キリスト教大学の進むべき道（阿久戸光晴） ・発題：教場は聖堂（戸邊治朗） ・発題：女子聖学院と聖学院大学との今後の関わり方（田部井道子） 	
2016年 1月11日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：聖学院教育の明日を考える ・挨拶：阿久戸光晴 ・講演：大学の未来像―俯瞰するまなざしと日々の営み―（清水正之） 	
2017年 1月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：聖学院大学の教育を考える ―ブランド力の向上を目指して― ・挨拶：阿久戸光晴 ・講話：清水正之 ・講演：聖学院大学の学士力育成（西澤陽介） ・発題：清水均 	
2018年 1月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・主題：建学の精神と教育 ―創立 30 周年を前に― ・挨拶・講話：清水正之 ・講演：聖学院の歴史と精神 ―大学創立 30 周年を前に―（菊地順） ・講演：大学における障害学生の支援 ―障害者差別解消法と合理的配慮について―（武田一則） 	

(6) キリスト教センター役職者一覧

	1988	1989	1990	1991	1992	1993
大学宗教主任	西谷 幸介	西谷 幸介	西谷 幸介	西谷 幸介	西谷 幸介	西谷 幸介
政治経済学部宗教主任	—	—	—	—	西谷 幸介	西谷 幸介
人文学部宗教主任	—	—	—	—	菊地 順	菊地 順
宗教センター所長	—	—	—	—	近藤 勝彦	近藤 勝彦

	1994	1995	1996	1997	1998	1999
大学宗教主任	西谷 幸介	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴
政治経済学部宗教主任	西谷 幸介	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴
人文学部宗教主任	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順 阿部 洋治	菊地 順
宗教センター所長	近藤 勝彦	近藤 勝彦	近藤 勝彦	近藤 勝彦	近藤 勝彦	近藤 勝彦

	2000	2001	2002	2003	2004	2005
大学宗教主任	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴	—	—
大学チャプレン	—	—	—	—	—	—
政治経済学部宗教主任	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴	阿久戸光晴	—
政治経済学部チャプレン	—	—	—	—	—	佐野 正子
政治経済学部宗教副主任	佐野 正子	佐野 正子	佐野 正子	佐野 正子	—	—
政治経済学部副チャプレン	—	—	—	—	佐野 正子 相澤 一	相澤 一
政治経済学部チャプレン代行	—	—	—	—	相澤 一	—
人文学部宗教主任	阿部 洋治 菊地 順	阿部 洋治 菊地 順	阿部 洋治 菊地 順	阿部 洋治 菊地 順	—	—
人文学部チャプレン	—	—	—	—	菊地 順	菊地 順
人文学部副チャプレン	—	—	—	—	—	柳田 洋夫
人間福祉学部チャプレン	—	—	—	—	阿部 洋治	阿部 洋治
宗教センター所長	近藤 勝彦	近藤 勝彦	近藤 勝彦	近藤 勝彦	—	—
キリスト教センター所長	—	—	—	—	小倉 義明	小倉 義明

	2006	2007	2008	2009	2010	2011
大学チャプレン	—	阿部 洋治	阿部 洋治	阿部 洋治	菊地 順	菊地 順
政治経済学部チャプレン	佐野 正子	佐野 正子	佐野 正子	佐野 正子	佐野 正子	佐野 正子
政治経済学部副チャプレン	相澤 一	相澤 一	相澤 一	相澤 一	相澤 一	相澤 一
政治経済学部チャプレン代行	相澤 一	阿部 洋治	阿部 洋治	—	—	—
人文学部チャプレン	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順 E.D.オズバーン
人文学部副チャプレン	柳田 洋夫	柳田 洋夫	柳田 洋夫	柳田 洋夫	柳田 洋夫	柳田 洋夫
人間福祉学部チャプレン	阿部 洋治	阿部 洋治	阿部 洋治	阿部 洋治	—	—
人間福祉学部副チャプレン	—	左近 豊	左近 豊	左近 豊	左近 豊	左近 豊
キリスト教センター所長	小倉 義明	小倉 義明	小倉 義明	小倉 義明	小倉 義明	小倉 義明

	2012	2013	2014	2015	2016	2017
大学チャプレン	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順
政治経済学部チャプレン	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順	菊地 順
人文学部チャプレン	E.D.オズバーン	E.D.オズバーン	E.D.オズバーン 柳田 洋夫	E.D.オズバーン 柳田 洋夫	E.D.オズバーン 柳田 洋夫	E.D.オズバーン 柳田 洋夫
人文学部副チャプレン	柳田 洋夫	柳田 洋夫	—	—	—	—
人間福祉学部チャプレン	佐野 正子	佐野 正子	山口 博 佐野 正子 阿部 洋治	山口 博 阿部 洋治	山口 博 阿部 洋治	五十嵐成見
人間福祉学部副チャプレン	左近 豊	左近 豊	—	—	—	—
キリスト教センター所長	山口 博	山口 博	山口 博	山口 博	山口 博	菊地 順

	2018
大学チャプレン	柳田 洋夫
政治経済学部チャプレン	菊地 順
人文学部チャプレン	柳田 洋夫
人間福祉学部チャプレン	五十嵐成見
心理福祉学部チャプレン	五十嵐成見
キリスト教センター所長	菊地 順

第2部 大学の教育

聖学院大学の教育 ——魅力の基底、そして、新たな魅力の 創造に向けて——



人文学部長 清水 均

聖学院大学の魅力とは何であろうか。あるいは、聖学院大学らしさとはどのように言い表すことができるだろうか—

2016年秋に発足した本学「ブランド力向上委員会」は、聖学院大学の「魅力」「らしさ」を再発見し、発信する、更にはそれを通じて新たな「魅力」「らしさ」を創造していく方

法を探求することを主な目的として活動を続けている。

そうした活動を通じて2017年夏、本学創立30周年を翌年に控え、これを機にそれまでの「面倒見のよい大学。入って伸びる大学。」に代わる新たなタグライン、「一人を愛し、一人を育む。」を制作した。当時のプレスリリースには次のように語られている。

プレスリリース 概要

2017年11月3日（金・祝）

聖学院大学（埼玉県上尾市／学長：清水正之）は2018年の創立30周年を迎えるにあたり、学生・教員・職員が協働して刷新に取り組んできた新たなタグラインを発表します。

開学当初から徹底した少人数制教育を行い、「面倒見のよい大学」として評価をいただいた聖学院大学。「面倒見のよさ」をより深化し見つめ直すことで、建学の精神である「神を仰ぎ 人に仕う」人材を育成する、あるべき姿・進化した姿を明確にしました。

タグラインの思い

今後何十年経っても揺らぐことのない、聖学院大学らしさを新たなタグラインで表現しました。学生一人ひとりとの距離感を大切に、近すぎず、遠すぎず、見守りながら、一人ひとりの可能性を育む大学であり続けるというプロミスでもあります。

聖学院大学は開学からキリスト教の精神に基づく人格教育を行っています。それは、神によって創造されたかけがえのない存在である学生を愛し、その魂の豊かな可能性を支えつつ、リベラルアーツを基盤とする専門教育をとおして各人の個性と能力を引き出すこと。それは、「一人の個性」が他者に仕える人になり、他者とともに生きる人となる、現代の市民社会の各分野で貢献できる人物を育成することにほかなりません。

この文章からもわかる通り、新タグライン「一人を愛し、一人を育む。」は「聖学院らしさ」を表現したものであり、それはまた、本学の社会における存在意義を示したものである。即ち、聖学院大学は「開学からキリスト教の精神に基づく人格教育を行って」おり、そのような人格教育を通じて「一人の個性」が他者に仕える人になり、他者とともに生きる人となる、現代の市民社会の各分野で貢献できる人物を育成すること」を目的として創設された大学である、ということである。

「伝統」という言葉は軽々に用いることは出来ないが、「開学から変わらずに存在意義としてあるもの」を仮にいわゆる「伝統」と呼ぶならば、聖学院大学の「伝統」の核には「キリスト教の精神に基づく人格教育」というものがあるだろう。

しかし、「伝統」という言葉を後世の者たちが用いる時、「DNAに刻まれている」といったような楽天的な意識によって、あるいは、現実というものを見ずに、「言葉」に寄りかかってしまう安易な姿勢によって、その実体が当初持ち得ていた意義と乖離してしまっている危険性は常にある。

つまりは、「キリスト教の精神に基づく人格教育」というものが今でも効力を発揮しているのかということは、絶えず確認され続けなければならない。更に言えば、後世の者たちは当初目指されていた「キリスト教精神に基づく人格教育」とは何だったのか、そして、それはどのような経緯をもって目指されることとなったのか、という事実を知らなければ

ならない。そうすることによって私たちは初めて「一人を愛し、一人を育む。」という新たなタグラインの有する価値と意義を認識でき、現在の聖学院大学における教育の方向性を見定めて、真の意味で「今を生きる」ことをなしえるだろう。

その意味で、この「聖学院大学創立30周年記念誌」が、本学が根底的に持つ教育目標というものを、将来にわたって絶えず確認し続けるための縁（よすが）、あるいは楔（くさび）としての役割を担うものとなることを期待する。

はじめ

ここでひとたび聖学院大学が誕生する時代に回帰することにしたい。

以下に、「聖学院大学 開学記念文集」(1988年11月5日発行)に載せられた文章を引用することとする。「後世の者たち」は、それらの文章から、本学創設当初の理想の実相に触れ、聖学院大学が「今あること」の意義を確認することになるだろう。



一九八八年四月十一日、聖学院大学は開学し、志願者二、八一七名の中から選ばれた第

一期生二七三名を迎えて、最初の入学式を挙
行いたしました。その日は、快晴の春の一日
で、キャンパスは感動と生気にみちておりま
した。

「開学記念文集」は当時の大木英夫理事長
のこのような記述を冒頭に載せている。「志
願者二、八一七名」という数字は、今となっ

ては時代を感じさせるが、思えば開学からし
ばらくの間、入学試験は本学体育館のみなら
ず、大宮の予備校でも実施され、短期大学の
教員も駆り出されていたものであった。

では、「最初の入学式」はどのようなもの
であったのか。「開学記念文集」は初代学長
であった金井信一郎先生の「式辞」を次のよ
うに伝えている。以下はその抜粋である。

聖学院大学入学式式辞

学長 金井信一郎

唯今は、学校法人聖学院理事会を代表する大木理事長により、私は聖学院大学学長に任命さ
れました。光栄の至りであると共に、責任の重さに身の引き緊まる思いであります。また新調
の立派な校旗を理事長先生より手渡され、感激に堪えません。私はこの校旗を携えつつ、謹ん
で学長としてこの重責を果たしたく、ここに皆さんの御協力を切に御願ひ致します。

御列席の御父母・御家族の皆様、御子弟の本学への御入学、御同慶の至りであります。

(中略)

この度、本学が開学することにより、聖学院はその永年にわたる一貫教育体制確立のヴィジ
ョンを達成することになったのであり、本年は聖学院の歴史にとり、二十一世紀に向う新しい出
発の年となるのであります。

さて、聖学院大学の特色は何でありましょうか。

先ず本学は既存の数ある有力なキリスト教大学と併列されるもう一つの大学ではなく、新しい
大学、ユニークな大学、であります。多くの新設大学が、便宜主義や御都合主義、さらには
経営の論理だけで大学設置を考える傾向のみられるとき、本学は、現代文明に対してなすべき
使命を自覚し、それを実現したいとの高い理想と哲学を掲げました。それは本学の理念として
印刷されていますので後で見てくださいたいのですが、その冒頭に掲げられている文言は次の
如くであります。「本学はプロテスタント・キリスト教の精神に基づき、自由と敬虔の学風によっ
て真理を探究し、霊的次元の成熟を柱とした全体的人間形成に努め、人類世界の進展に寄与せ
んとする者の学術研究と教育の文化共同体である」。その殆どの部分は学則第一条に本学の目
的として掲げられています。

では何故、今更、プロテスタント・キリスト教を掲げるのでしょうか。それは、近代世界の
成立と展開に独特の貢献を果たしてきたプロテスタント・キリスト教は、現代世界と今後の文

化形成にも固有な歴史的責任を負っていると信じるからであります。今日、人類の共有する文化価値となっている、自由、人権、平和、福祉等が、すべて、根源的にはプロテスタント・キリスト教の原理に支えられて形成されてきたという認識がそこにはあるのです。それ故「本学は、真剣な学術研究と生きた教育、霊的強化を通して、このプロテスタント・キリスト教の現代文化に対する責任という世界史的課題を大学形成において遂行し、希望ある世界の形成に寄与せんとする」のであります。

(中略)

最後に、諸君はこのような高い理念と教育目標をもってスタートする本学の第一期生でありますので、特に御願ひしたいのは、諸君の在り方によって聖学院大学の将来の運命が大きく左右されることを覚えていただきたいのです。よき伝統の基礎を作っていく創造の喜びと共に責任を、諸君も、われわれ教職員も相共に担っているのです。

どうか今、この時点で、もう一度志を高く持ち、本学での大学生活が、諸君の人生にとって、かけ替えのない価値あるものとしていこうとする決意を新たにしていきたい。

先程西谷宗教主任に読んでいただいた聖書の箇所は、イエス・キリストが有名な「山上の説教」で語られた言葉の一部であります。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすだろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるだろう…。」ここには凡そ、人間が真に求めることは必ず与えられるのだという保証が示されています。諸君は真に、懸命に神に求めたことがありますか。神は、求めよ、とわれわれに求めていられます。神は、諸君が、よい願ひをもつこと、真剣に求めることを待ち構えていたもうのです。自由に何でも求めてよい、但し、自由には規律と責任の裏付が必要であります。「神よ、どうか、私をあなたと人のために、よき奉仕ができる人物にして下さい」と祈り続けてごらん下さい。それは必ず聴かれる祈り、実現される祈りです。何となれば、そのような祈りは神に届く祈りであり、神が最も喜ばれる祈りだからです。

いよいよ明日から始まる大学生活の第一歩を大切にしよう。諸君が一年生、私共教職員も一年生。お互いに楽しいキャンパスライフを歩み出そうではありませんか。

(一九八八年四月十一日 入学式)

聖学院大学が「既存の数ある有力なキリスト教大学と併列されるもう一つの大学ではなく、新しい大学、ユニークな大学」として設立された大学であること、そして、それは本学が「現代文明に対してなすべき使命を自覚し、それを実現したいとの高い理想と哲学を

掲げ」ているからである、とされる。

では、そうした「高い理想と哲学」を掲げ、「希望ある世界の形成」に寄与する責を担う「学術研究と教育の文化共同体」としての本学の教育は、どのような学生「一人ひとり」を育成することになるのか。それは「神よ、



(開学当初の入学式の様子)

どうか、私をあなたと人のために、よき奉仕ができる人物にして下さい」と祈り続けてごらん下さい。」と第一期生に呼びかける金井の言葉の中に示唆されているだろう。「あなたと人のために、よき奉仕が出来る人物」、このことは、30年という年月を経た今、「一人を愛し、一人を育む。」という「タグラインの思い」、即ち、「一人の個性」が他者に仕える人になり、他者とともに生きる人となる、現代の市民社会の各分野で貢献できる人物を育成すること」と、遠く響き合うものである。

「愛された一人」「育まれた一人」が、やがては「一人を愛する」「一人を育む」人になること。現在の聖学院大学が目指す教育は、やはり開学当時にあった理想を、この点において脈々と受け継いでいるということができるだろう。

現在、そして未来へ

「聖学院大学創立30周年記念事業実行委員会」は、「ブランド力向上委員会」をベースに卒業生職員を中心に結成されたが、一方で、「ブランド力向上委員会」は(株)ロフトワークと共同(共創)で「& Seigプロジェクト」

を展開している。新タグラインの制作もその一環として行われたものであるが、このプロジェクトの活動は多岐にわたっている。

一人を愛し、一人を育む

他の誰でもない、
かけがえのない存在である
あなたと共に。

夢や希望だけでなく、
時には、その旨に抱く
悩みや不安も分かち合いながら。

4年間という限られた日々の中で、
一人ひとりのかがやく可能性を見つけ、
学びや人との出会いを通して、
その芽を豊かに伸ばしていく。

それが、キリスト教の精神に基づいた
聖学院大学の教育です。

一人を愛し、一人を育む。

すべては、人を愛し、
人に愛される人を育てるために。

これは、ロフトワーク制作の「タグラインボディコピー」である。このように、「& Seigプロジェクト」は、「今すでにある聖学院大学の魅力とは何か？」を発見し、発信するための仕組みを構築し、それを「新たな魅力の創造と発信」に繋げていく、更には、そ

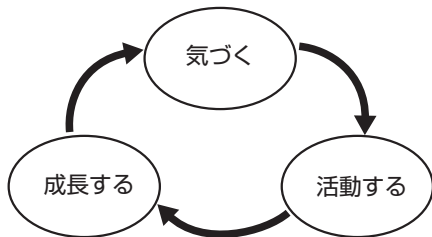
うしたプロセスを経て聖学院大学の「ブランド力」を高めていくことを目指すプロジェクトである。

では、このプロジェクトによって「発見」された聖学院大学の魅力とは何か。「2018年度 & Seig プロジェクトレポート」には次のように記されている。

これまでの活動を通して、聖学院生に共通するひとつの発見がありました。それは、聖学院生は大学でのひととの関わり合いのなかで「気づく→活動する→成長する」というプロセスをたどって成長しているということです。

一人と向き合う大学の姿勢が、成長の循環を促しているといえます。我々がプロジェクトを通して向き合った30名の学生と同じ「気づく→活動する→成長する」の成長の循環が、今この瞬間も大学内で同時多発的に発生しているのかもしれません。

- ・学生同士・教職員
- ・ボランティア先
- ・受験生



- ・できることが増える
- ・新たな課題を見つける
- ・想いを受け継ぐ
- ・ボランティア活動
- ・学生スタッフ
- ・日常生活

「一人と向き合い」、「対話」することによ

て生まれる「気づき」、それが「活動」へと繋がり、それが新たな「成長」に結びつく。そして、そのプロセスが更なる循環を生成していく。この循環は学生のみならず教職員においても生成されていて、そのような「対話」を基盤とする「成長のプロセス」を持っていることが、聖学院大学の大きな魅力となっているのである。

一見当たり前のことを言っているようにみえるが、振り返ってみて、これほど「対話」が発動されやすい「仕組み」や「契機」を持っている大学は珍しいだろうし、そのことが「活動」を活性化させ、「成長」をもたらすものとして機能しているとすれば、それは聖学院大学の現在の魅力の一つを形成していると言えるだろう。



(現在の入学式の様子)

創立30周年を迎えた聖学院大学。「学術研究と教育の文化共同体」を形成すべく誕生した本学は、そうした「文化共同体」としての存在意義を、まずは「40周年」「50周年」に向けて、今後どのように進化（深化）させていくことが出来るだろうか。あるいは、いまだ成熟していない部分があるとすれば、どのようにそれを克服していけるだろうか。

換言すれば、「キリスト教の精神に基づく人格教育」が醸成する「文化共同体」としての聖学院大学は、これから「人類世界の進展に寄与」するどのような「一人」を生み出していけるのか。「ユニークな大学」たる大学

を理想として創立された聖学院大学は、その理想ゆえに、実に「ユニークな課題」を常に突きつけられている大学であると言うことができよう。



図書館での風景



調整池での風景

聖学院大学 主要年表

年度	学長	学部・学科の動き	出来事	キャンパスの様子
1988	金井信一郎	聖学院大学政治経済学部政治経済学科を設立(定員 200 名)		短大寮を 6 号館に改築、7 号館を建設
1989				
1990				
1991				
1992		人文学部欧米文化学科、児童学科を増設(定員各 50 名)	女子聖学院短期大学児童教育学科を廃止	
1993			聖学院 90+110 周年記念「1 万人のクリスマス in 武道館」	
1994	安倍北夫			8 号館を建設し、6 号館を食堂部分のみ残して取り壊し
1995				
1996			大学院政治政策学研究科(修士課程)を設立	
1997				
1998		人文学部に日本文化学科、人間福祉学科を増設(4 学科とも定員各 100 名)	女子聖学院短期大学英文科、国文科を廃止	
1999	松川成夫		大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科(博士前期課程)を設立	
2000	飯坂良明	政治経済学部コミュニティ政策学科を増設(定員は政治経済学科、コミュニティ政策学科ともに各 100 名)	宮原駅、日進駅へスクールバスを運行 AO 入試を開始	
2001			大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科に博士後期課程を増設	
2002				
2003	阿久戸光晴			チャペル、ヴェリタス館、エルピス館、緑聖ホールを建設し北キャンパスを整備 6 号館食堂を改修し、学生相談室、保健室を移設(シャローム館) 正門を南キャンパスから南北のキャンパス間に移す(現 SEIG サークル) 本館(現図書館棟)を改修し、1F 部分を図書館に増設
2004		人間福祉学部を増設し、人文学部より児童学科、人間福祉学科を移設		
2005				

年度	学長	学部・学科の動き	出来事	キャンパスの様子
2006 2007 2008 2009 2010	阿久戸光晴	人間福祉学部に、こども心理学科を増設（定員 80 名）、コミュニティ政策学科、欧米文化学科、日本文化学科、人間福祉学科の定員を 80 名に変更	大学院人間福祉学研究所（修士課程）を設立	シャローム館を解体し、新築
2011 2012			ディプロマ・カリキュラム・アドミッションそれぞれのポリシーを制定	
2013			FO を NSO へ名称変更し、学外（宿泊）から学内開催へ	
2014	姜尚中	政治経済学部コミュニティ政策学科、政治経済学科と一体化して再編		4 号館 1F にコンビニエンスストア、SEIG ブックセンターを設置
2015 2016 2017 2018	清水正之	こども心理学科、人間福祉学科を統合し心理福祉学部心理福祉学科を設立（定員 120 名、編入定員 20 名）、児童学科を人間福祉学部より人文学部へ移設	30 周年記念事業としてホームカミング、記念誌発行、グッズ製作、寄付募集等を企画	1 号館 A 棟部分を取り壊し 1 号館食堂を 1cafe に改修

理念から始まる創設と形成



阿久戸光晴

1986年9月13日（土）、日本基督教団滝野川教会の教会学校教師会後、当時教会学校の小学部主任を務めていた私は、大木英夫同教会牧師（当時）に牧師室に呼ばれた。そのお話は「学校法人聖学院は今積年の課題の四年制大学を創ろうとしていて自分は先日その理事長に就任しその課題を果たさねばならない。しかし今年もその申請に失敗した。ついては自分の秘書となり力を貸してほしい。また私は神学者としてこの大学創設の課題を果たしたいので、君も献身して来年4月東京神学大学で学んでほしい。したがって来年3月までには文部省（当時）との設置交渉を終えてほしい」とのことであった。私にはあの聖句「神の力に支えられて、福音のために、私と苦しみを共にしてほしい」（テモテへの第二の手紙1章8節、口語訳）が心中響いていた。日頃ひそかに私は、より直接的な献身の門が開かれる日の来ることを神に祈り求めてきたが、いよいよその時が来たと感じた。私は「前向きに考えますが、少々祈る時間をください」とだけ応えて辞去した。帰宅後私はひたすら祈った。異変に気付いた家内は私をそのままにしてくれ、私から話を聴いて背中を押してくれた。実は家内は私と最後まで苦楽を共にしてくれるとの確信があったが、小

さな二人の子どもたちのことが心にあった。しかし私にはやがて「子どもは親の背中を見て歩む、親は子どもに振り返るのではなく、背中を見せてひたすら前進すれば良いのだ」との確信が与えられた。翌主日、大木先生に「お受けします。しかし残務処理がありますので2カ月ほどお待ちください」とお応えした。当時住友化学株式会社の社員であった私はアルミニウム製錬事業の構造転換作業チームの小リーダーとして区切りを付けねばならなかったし大切な部下も数名抱えていた。また同社の年末のボーナス支給日は12月1日であったのでその前日に退職すべく、あと2カ月余で書類を書き上げる等すべての作業を完成させる必要があった。先生は「分かった。ただ隔週の平日夜、拙宅で進んでいる『聖学院大学理念検討委員会』には出席して議事録を作成してほしい」と言われた。

住友化学の重役への退職の申し出や父母妹への説明のことはさておき、同理念検討委員会の出席メンバーは、大木先生・近藤勝彦東神大教授（当時。後に東神大学長）・小倉義明女子聖学院中高校長（当時）・故金井信一郎聖学院大学初代学長（就任予定）・故安倍北夫聖学院大学教授（就任予定）・故 W.G. クレーラ女子聖学院短期大学学長（当時）・西

谷幸介同大学宗教主任（就任予定）・木俣努同短大事務長（当時）であった。自由で活発な議論がなされていたが、出席メンバーには議論の前提にこれまでの日本の諸大学（特にキリスト教大学）の諸制度面での問題を克服しようとの使命感に満ちていた。すなわち「明治のころ欧米からキリスト教宣教師が来日して、日本の子女に福音の種をまくべく諸学校を設立しながら結局その志が貫徹されないで見られる現況の原因はどこにあるのか？」である。主に四つの原因があげられた。①すべてに先例が優先するほどの「法の意識の欠如」、②非兼任理事の多くが非常勤で大学の日々の運営を学長と教授会に「丸投げ」する体制、③いったん広範囲の運営権限を委託された学長と主導的教授が自分の利害を優先させていく弊害、④大学の存在意義は神からのミッションのためであり具体的には学生と社会のためであるところアカデミズムに頹落していると思われる実情、などである。これを克服すべく「聖学院大学の理念」は以下のとおり 10 カ条にまとめられた。

聖学院大学の理念

第1条 本大学は、プロテスタント・キリスト教の精神に基づき、自由と敬虔の学風によって、真理を探究し、霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成に努め、人類世界の進展に寄与せんとする者の学術研究と教育の文化共同体である。

第2条 本大学は、プロテスタント・キリスト教の伝統に即してなされる礼拝を生命的な源泉とする。礼拝においては、聖書と宗

教改革者が証する福音が語られ、そこから大学共同体にとっての生命である研究と教育のための自由と責任、および伝道への活力、さらに本大学の伝統を継承し新たに創造する喜びと熱意とが与えられる。

第3条 プロテスタント・キリスト教は、特に近代世界の成立と展開に独特な貢献を果してきたが、それゆえまた、現代社会において固有な責任を負っている。本大学は真剣な学術研究と生きた教育、霊的強化とを通して、このプロテスタント・キリスト教の現代文化に対する責任という世界史的課題を大学形成において遂行し、希望ある世界の形成に寄与せんとする。

第4条 本大学は、日本におけるプロテスタント・キリスト教の伝統及びその信仰的、文化的、教育的貢献に連なるとともに、その労苦と苦心の経験に虚心に学び、その信仰、文化、教育活動の新しい進展のために努力し、日本社会に対し新たな指標を打ち立てようとする。そのため、福音的プロテスタント諸教会の協力を仰ぐとともに、とりわけ、かつての聖学院神学校が合流している東京神学大学との協力関係を密にする。また、広く内外のプロテスタント諸大学と相互協力の関係も樹立する。

第5条 本大学は、「現代文化の諸問題とキリスト教の課題」等の問題を研究する機会を提供し、開かれた大学として、プロテスタント・キリスト教の精神をもって国際化した時代と激動する社会、及び地域の問題にも積極的に取り組み、創造的な活動を行うことによって、そのキリスト教的、文化的

特色を発揮することを期する。

第6条 本大学は、学校法人聖学院の設立による諸学校との精神的、財政的な一体性の中にある。また教育的にそれぞれ独自の位置と課題を尊重しつつ、それらとの密接な関連、協力の関係を持ち、聖学院全体の一貫教育の高等教育段階を担う。

第7条 以上の理想のために、本大学に働くすべての教職員は、互いの人格を尊重し、各自の持ち場においてそれぞれにふさわしい責任を自発的かつ積極的に遂行するとともに、キリスト教的な愛と謙遜と熱意をもって互いに協力し合うことが期待される。

第8条 教授は、福音的自由と真理への畏敬の念を持って、学問的探究に鋭意努力し、その研究と教育を通して、時代の課題に積極的に応えつつ、新しい世代の知的、実践的、霊的次元での育成に努め、本大学の精神、学問、伝統の確立と継承、および新たな創造に努めることが期待される。

第9条 学生は、知的、実践的のみならず霊的次元において成熟し、かつ専門の学問の研鑽とその応用力の修得に努め、現代社会の課題に取り組み、明日の社会を担い得る教養と良識とを身につけ、豊かで個性的な人格形成に努めることが期待される。

第10条 本大学は、以上の理念に基づくことによって、いかなる種類の組織体やイデオロギーの支配も介入も許さず、また私的並びに集団的な暴力による破壊や妨害を許さない。

この「理念」の制定日は公には大学開学の

1988年4月1日であるが、規範力はすでに1985年冬には事実上持っていた。その証拠にこの「理念」に即して、カリキュラムや人事や規程案などが作られ、実行されて行ったからである。この「理念」の主張する本質は一言で言い表せないが、①知的教育とは別に霊性教育を目的とすること、②一貫教育の最終段階を担うものであること、③礼拝を中軸とする教育・研究共同体であること、④教派色（聖学院の場合ディサイプルス教会『基督教会』派であったが）を持ち込まずプロテスタント全体教会の担い手を育成する東京神学大学との連携を展望すること、⑤現代世界への貢献者の育成教育として政治学・経済学等を統合する視点から「現代の文明の諸問題とキリスト教の課題」（仮称）との必修科目を置くことへ発展したこと、などが挙げられる。

私立大学の創設は国家（文部省）が仕切る認可制度であった。設置理念のもとに創設へ走り出したとしても認可を受けねばならず、問題は実務にあった。まずハード面であった。「失敗は成功のもと」と言われるが、前年度の申請失敗の原因がどこにあったかの分析から学校法人聖学院本部で検討が始められた。申請時に用意された「創設費」の当方の解釈に文部省がクレームをつけていた。要約すれば、第一に、従来維持会費の問題が問われており、①女子聖学院中高・女子聖学院短大・聖学院小学校の維持会費のみの旧教育振興会入会金でなぜ同じ法人の男子聖学院中高や女子聖学院短大附属みどり幼稚園が加わっていないのか？②そもそもこの維持会入会金は入学者の応募率100%（！）である以上寄付金

なのか学納金なのか？すなわち、寄付金ならば寄付者の自由意志が保障されているか？学納金ならば募金を呼びかけた学校への助成金の算定方法が変わって来る(!)と。第二に、創設費の算定に問題があった。毎年度消費収支(当時)が赤字基調なのに何故多額の創設費を捻出できるのか、また会計基準に照らしいくつか解釈に誤りが散見されると。

以上に対して、第一に総コストの面では、創設費について聖学院大学は女子聖学院短期大学としばらく共存することになるゆえ、共有資産算定方法に工夫の余地があり、ギリギリまでコストを圧縮した。また人件費についても招聘に悪影響が出ない範囲で可能な限り圧縮した。第二に総収入の面では、まず新しい装いで「教育振興会」を男子聖学院・みどり幼稚園を含む全法人に発足させた。すなわち、女子聖学院グループの維持会を発展的に解消して「学校法人聖学院教育振興会」を全学院の現旧父母会役員を中心に結成し、その規程も制定させた(この点については、小倉義明女子聖学院校長【以下いずれも当時】・故林田秀彦男子聖学院校長・故 W.G. クレーラ女子聖学院短大学長兼同附属みどり幼稚園長・そして木俣努女子聖学院短大事務長の貢献が大きかった)。これは後に ASF 結成へとさらに発展していくこととなった(この点については、故畑中若雄男子聖学院元校長・故小花綾子女子聖学院元院長・稲永修男子聖学院同窓会会員・米山文雄女子聖学院父母会会長【当時】の貢献が大きかった)。続いて、不要資産の処分益(これには故都築宗政男子聖学院同窓会会員の絶大な貢献があった)と

社団法人「基督教会伝道者団」からの寄付受け入れ交渉成立、そして1カ月での1億5千万円の緊急募金の呼びかけを全学院関係者に行った。回顧して、最後の課題は文部省の高官も明らかに厳しいと見ていたし、私たちも実現にはまったく自信がなかった。ところが男子聖学院中高関係者と聖学院小学校関係者を中心に短期間で達成してしまったのである。これで対文部省との交渉の流れが一挙に変わった。さらに大学設置は学校財政が黒字基調の学校法人のみ相手にすると文部省からの要求に応え、1986年限りで6月末閉めの臨時決算をすることを決め、その時点での黒字幅をすべて大学創設費に充てた(これによって募金等上記のすべての資金を投入できたわけである)。

ところがこれで問題は終わらなかったのである。次に障害が起きたのは、ソフト面であった。教員の就任予定をギリギリまで遅らせることで人件費を抑えたと記したが、申請の当日(!)に文部省より、初年度に総予定教員の5割・次年度と次々年度に各2.5割の就任をすべしと指摘された。また政治経済学部政治経済学科は複合学科で複合率80%ゆえ、専門教員数が1名不足しているとやはり当日指摘された(私たちは一般教養課程に13名・政治系経済系各11名、計35名で各1名多く申請していたつもりであったが、文部省は一般教養課程12名・政治系経済系各14名で複合率8割で専門課程が $14 \times 2 \times 0.8 = 22.4 \rightarrow 23$ 、計35名を要求した)。しかし私たちはこれらの難題をすべて丁寧解決した。すなわち、先生方の着任を早め、また一

般教養課程での着任を予定していた教員1名を専門へ移したことで交渉を成功させたのであった。

さらに文部省はその後総定員200名(申請当時)の1割カットを要求してきた。しかし私たちは5号館を新設して教育条件を向上させることで、その要求を拒んだ。これには幸いや収入を多目に申請していた資金収支が5号館の新設費を吸収でき、結果として生かされることになった。

なお、申請直前に着任予定の先生の1名が辞退され私たちをあわてさせたが、故金井信一郎先生のご努力ですぐ埋め合わせることができた。また着任予定の先生方の審査は1名を除くほぼ全員が合格となり、私たちは胸をなでおろした。

どうも文部省は申請当日に無理難題を「指導」するなど、申請認可に不安を感じさせられたため、「抑え」として松永光元衆議院議員に「万一の時はよろしく」との挨拶を行った。ただくれぐれも文字どおりの挨拶であって、それ以上のことは何もしなかったことを断っておきたい。

さて、新生の大学には競争力ある特色づけが必須であった。第一はキリスト教を媒介とした交換留学制度、第二は優れた教員の招聘、そして第三は開学時からの就職対策である。第一の点は1985年の開学前年に、金井・クレラ・近藤の各先生をアメリカ・バイブルベルト地域へ、聖学院大学との提携に相応しい大学の発掘のため視察に派遣した。その結果、たまたま東京神学大学に客員教授として滞在しておられた西村虔先生のお導きもあ

り、アメリカ合衆国ジョージア州アトランタ市のオグルソープ大学との教育・研究提携が決まった。すなわちその内容は、毎年同大学と聖学院大学および女子聖学院短期大学間で各30名ずつの1カ月交換留学制度である。なお、オグルソープ大学との提携を長期化する方針のもと、在アトランタ日本国総領事館のお勧めもあり、「聖学院アトランタ国際学校(幼稚部・小学部。後に中学部まで)」も開校した(1990年)。初代校長には故小林哲夫聖学院小学校長が兼務就任された。第二の点は、著名な隅谷三喜男先生の‘University Professor’(全学教授)としての招聘であった。同先生が文部省からの委嘱を受けて設置審委員として聖学院大学のソフト面の審査をご担当くださったことと、ご令室が女子聖学院の卒業生であることなどがご縁となった。第三の点は、就職指導室の設置である。室長には河合達夫『エコノミスト』誌元編集長にご就任いただき、後に開学後の新入生に初年度から早速就職指導に着手していただいた(就職指導室は後に就職センターへ発展した)。

大学の開学審査は開学前2年間を要する。初年度は上述のとおり辛酸をなめたが、何とか通すことができ、次年度は比較的円滑に手続が進んだ。むしろ、課題は学院内の体制整備であった。学院の財政を黒字基調にせよとの指導が文部省から続き、筋の通った人件費を制度上確立する必要があった。また学院の事務組織の整備であった。というのは、大学設置申請以前では、学院事務組織はきわめてフラットで前述のとおり規程も整備されておらず権限もあいまいであり、何よりも先例

が規範となっていた。これでは激変する時代の要請には到底応えられないことであった。根本規範としての「設置理念」、「事務分掌」、「権限委任」、「公印管理」等にかかる規程を順次制定して行った。また聖学院大学は女子聖学院短期大学としばらく共生するために、事前に協議できる機関が必要であった。それが「高等教育協議会」の誕生となった。双方の学長・チャプレン・教務部長・学生部長らの正委員による協議を、理事長・院長が調整するというものである。また特筆すべきこととして大学開学と同時に聖学院大学総合研究所および出版会を設置したことである。その設置理由は、そもそも大学は教育機関であるとともに、研究機関であり、また研究成果の発信基地としての役割を担うべきであると構想されたからである。総合研究所および出版会会長は大木理事長・院長が兼務することとし、その総合研究所事務部長兼出版会部長は山本俊明氏をヨルダン社（当時、有数のキリスト教書店）より招聘した。

以上の大学開学までの苦労を担われたのは、何といても大木英夫理事長・院長であり、付記すれば事務局として総務面で木俣努局長および岡村紀夫次長、経理面で里子有三郎次長、また大学設置に直接かかわる担当者として鈴木嘉顕氏および故大野木恒夫氏、その他関良二氏、吉田耕也氏、京田由香氏ら、また開学前より大学長秘書として招聘された山川秀人氏らの名をあげられよう。

聖学院大学は開学以降種々の難関にぶつかりながらも、学部学科増（人文学部欧米文化学科および児童学科）をなしとげるなど、比

較的順調に発展してきたと思われる。しかし大きな宿題が残されていた。それは大学院の開設であった。幼稚園から大学学部まで、聖学院は4～5千名規模の比較的小じんまりとしながらも一貫教育を標榜する学院であるだけに、その教育面における最終完成段階としての大学院の開設はきわめて大きな意味を持っていたからである。ここでは先行して活発な活動を行っていた総合研究所の存在が大学院申請の「核」となった。一般に大学院は広義の大学の一機関として学部相当の位置づけが与えられている。しかし聖学院大学大学院は、「相対的独立性」を持つ機関として、対外的には大学の一翼を担い、対内的には大学学部と並存する機関として位置づけられ、大学院長を別途置くものとされた。当初は政治経済学部の上級機関として政治政策学研究科で申請した。「政治政策学」とは、他学の研究科に多く見られた政策学にデモクラシー・人権政策という特殊政治学に大きい比重を持たせることにより方向付けを加えたものである。この構想には、トレルチ神学を背景にした「理念」第3条の思想が濃厚に込められている。また同研究科は、中学高校の社会科教師のさらなる学習ができるようにカリキュラムを工夫し入学しやすくした。政治政策学研究科（略称・政策研）【入学定員20名】は1996年に開設されたが、それは修士課程までであった。1999年に人文学部欧米文化学科の上級機関であるアメリカ・ヨーロッパ文化学研究科（略称・文化研）【入学定員博士課程前後期とも各5名】が増設されたが、それが博士課程前期・後期を擁するものであ

り、ここに一貫教育は制度上完成されたのである。「アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科」とは、通常の欧米文化（学科名がまさに該当する）の呼び名を逆転させているが、それはアメリカで成立した諸文化価値（立憲主義・公民権概念・地方自治制度と連邦構想・地域福祉など）の観点から世界を牽引する西欧文化の根源を探究する理念を表現している。その後人間福祉学研究科（略称・福祉研）が発足して、すべての学部が大学院研究科を持つことになった。なお、大学院創設費に関しては、時代も変わり、また定員規模も小さく、学部収支で十分まかなえたのである。また、入学した大学院生のために、手厚い奨学金制度がつけられたが、男子聖学院同窓会員の稲永修氏と故都築宗政氏のご尽力があった。

聖学院大学が開学 30 周年を迎えられることを心から慶びたい。中国の格言に「飲水思

源」との言葉があるように、大学開設に関わった上記の方々（すべてを書き留め切れなかったことをお詫びする）の血のにじむようなご尽力を想起しておいてほしい。その方々の多くが故人となっておられるか退任している（私もその一人であるが）。それらのすべての方は、それぞれ神を讃える器としての聖学院大学の産みの苦しみをされ、その象徴として「聖学院大学の理念 10 カ条」を制定し、その理念に即して大学形成を図ってきた。今後時代の大きな荒波があろうと、この設置理念のもとに大学の運営をさせていただきたいことが切なる願いである。国（現文部科学省）は明らかに人口減少時代に即した小規模大学の整理統合を図っているように思えてならない。固有の理念の発揮が、大きな組織に呑み込まれるのを防ぐ杭の役割を果たすからである。

開学の頃の思い出



標 宣男

はじめに

記念誌編集実行委員会より、聖学院大学(以下大学と略称)の開学のころの歴史を書く様にとの依頼があった。然し、私が多少なりとも大学全体の動きが分かる様になったのは、大学の完成年度を過ぎた5年目からであったので、開学時のことを書くには不適切とは思ったが、「思い出」でよいということなので、引き受けることにした。

とは言ったものの、開学の頃の大学はどんな雰囲気だったかと古い記憶を辿ろうと様々思いを巡らせて見たが、30年と言う歳月が多くの記憶を覆い隠してしまった。例えば、一人のキリスト者としてキリスト教大学に奉職する意義と喜びをもって参列したはずの、第一回目の入学式の記憶がないのである。女子聖学院短期大学(以下短大と略称)が長い間使って来た体育館で執り行われたと思うのであるが、その具体的な事は思い出せない。しかし、あれこれ考えるうちに中年の新米教員として経験した教育上の困惑や、異なった環境における戸惑い等、開学の頃の気持ちを少しずつだが思い出した。以下では、まず此の事から書き出そうと思う。次いで、手元に残されていた当時の「手帳」を頼りに、キャンパス内で身の回りに起こった「出来事」を

幾つか紹介しつつ、開学の頃の大学の様子を思い出してみたい。最後に今は無い短大に就いて少し触れたいと思う。

尚、ここでは「開学の頃」を多少拡大解釈し、いわゆる完成年度までの4年間とした。

新米教員として

30年前、私は開学したばかりの聖学院大学で、「自然」「社会」「文化」の内「自然」の分野を教える一般教養課程の教員として初めて教壇に立った。教えてみて初めて分かった事は、45歳まで研究者としてのキャリアしか積んでこなかった理系の新米教員が、自分の子供くらい若い政治経済学部(以下政経学部と略称)の学生に、「自然科学概論」や「教養の物理学」を教えるなどと言うことは、戸惑い以外の何物でも無いということであった。しかし、それ以上に、理系科目に殆ど興味を持たない社会科学系の学生にとって、理系の新米教師の下手な講義はどんなものであったのだろうか。専門科目でもない科目の単位を取れない事が、卒業の妨げになるなど理不尽だと、学生から抗議を受けた事もあった。儘ならない授業に悩んだ末、当時、短大国文科で教えていた妻の宮子に、先輩教員としての意見を聞いたのも、開学から一年が過

ぎたころであったか。しかし、妻のアドバイスが成功したかどうか記憶にない。何年か後、大学設置基準の改訂に伴い、「般教」と言われ制度的にも硬直化を批判された一般教養課程は廃止され、勿論「教養の物理学」なども無くなった。だが、大学教育における教養教育そのものの必要性は再評価され、本学でも総合科目として位置づけられ今日に至っている。ところで、このような教養科目の授業こそ、幅広い知識を持ち教育に経験を積んだベテランの専任教員が担当するべきであると云うのが、教養科目の授業に苦闘した新米教師の感想であり、この思いは現在でも変わっていない。

教えることに四苦八苦した新米教師ではあったが、一方で開学後の4年間は私にとって、中々快適で懐かしい4年間でもあった。先ず、5号館（現在のディスプレイ館）の2階に個人研究室が与えられた。5号館は、現在の位置よりすこし2号館寄りにあった。当時、学内にはエアコンなど常設していなかったので、夏は西日が差して暑かった。そこで、窓の外に生長の早いメタセコイヤが植えられ、今は無いが4年の間にずいぶん大きくなった。（私は個人的にウインドファンを付けた。）当時、私は学内行政上の多少の役目を持ってはいたが、研究員としての研究所生活と比べ多くの自由な時間があり、お蔭でそれまでとほぼ同じ研究を外部の研究仲間と続けることが出来た。ただ、文系の大学の研究費ではとても間に合わず、その調達には苦勞したが、他の大学の研究者や外部の研究団体との共同研究を行い、なんとか研究費を得る

ことが出来た。然し、私の研究に使うという目的を持った研究費が、外部の研究団体から大学宛て送られて来た時、当時の事務の責任者が何を勘違いしたのか、お金をもって「今後こうゆうことをしてくれては困ります」と深刻な顔をして言ってきたのには、面食らうと同時に文系の短大の経験しかない者と、理系の研究者の環境の違いを改めて知らされた思いだった。

開学から5年目、初代の教務部長であった黒木章先生の後をついで、二代目の教務部長になってからは、最早こういう生活は許されず、ほとんどの時期を大学行政に深くかかわったまま定年を迎えた。はて何のために大学に奉職したのかしらと時に思うこともないではなかった。それにつけても、懐かしい4年間であった。

「手帳」から

以下に述べる4つの話題は、「手帳」に記された出来事の中から、年度ごとに一つずつ選んだものである。但し、そこに述べられている出来事は、個人的に印象深かったという理由だけで選ばれたものであり、聖学院大学の歴史として、必ずしも重要なものではないかもしれないことを断っておく。

1988年度

先に「手帳」に記された思い出を書くと言ったのであるが、実は開学初年である1988年の手帳が無いのである。その為、入学式を含め、学内で初年度に起こった多くの事を思い出す事は出来なかった。そんなわけで、手帳

の記録は1989年1月から始まる。

・1989年1月6日（金）、7日（土）教職員
研修会（熱海 ホテル暖海荘）

教職員研修会は、毎年一回この時期に上尾キャンパスに勤務する教職員が一堂に集まり、キリスト教教育に携わる者としての心構えの涵養と相互の親睦を目的にもたれて来た。短大時代の1985年から始まり、此の年、第4回（大学としては第1回）を迎えた。6日の講演者は二松学舎大学学長（当時）の佐古純一郎先生で、講演題は「キリスト教信仰の基本—イエスの証言—」であった。講演の内容ははっきり覚えてはいないが、講演の中に旧約聖書の英語表記の一節 ‘I am ; that Is who I am.’ について講義があった事だけは不思議に記憶の片隅にある。

次の日、1月7日の朝の事であったと思うが、研修会場に「天皇崩御」のニュースが飛び込んで来た。後に、2月24日（金）に大葬の礼が行われ、国公立の学校では休日となった。他のキリスト教主義学校でも問題になった様であるが、聖学院でもこの日をどの様に過ごすか議論があり、確か休日にせずに礼拝を持つことになったと思う。私は出校日ではなかったせいか、その礼拝に出席した記憶はない。天皇の戦争責任論は別にして、戦前の教育を受けた方々にとって、昭和天皇の存在は特別なものであったらしく、金井信一郎学長など年配の先生の中には、特別な感慨をもって天皇崩御の知らせを聞いた者がおり、戦後育ちの我々との差を感じたものだ。

ともあれ、聖学院大学は、昭和の最後の年に開学し、平成の最初の年に一歩二歩と歩み

始め、そして、平成が終わる直前の3月に丁度30周年になる。

1989年度

・1989年6月22日（木）第1回グッズ小委員会

大学を訪れた方々に、或は他の大学を訪問した際に何か記念になる大学グッズをお土産として差し上げたい。そのような思いから、グッズ小委員会が出来た。委員長は女性のM教授。私も何故かその一員となった。と言うより開学当時は、誰でも複数の委員会に所属せざるを得ず、グッズ小委員会はその一つに過ぎなかったと言った方が良い。政経学部の教授会を構成する教員の内、専門課程の先生方は、専門の講義が始まる年に順次着任し、4年後の完成年次に全て揃うことになっていた。それ故、開学直後の教授会構成メンバーは、学長、大学宗教主任、国際政経および社会政経の両課程委員長を別にすれば、1、2年次生の授業を担当する語学、体育と一般教養課程の先生により構成され、当然少数数であった。然し、教員と学生の数が少ないからと言って大学運営上必要な事柄も少なくないというわけではない。従って、教員は一人で幾つかの委員会に属さねばならないことになる。開学から1、2年は、教授会を月に2回（当時は木曜日）開くといった事すらあった。それ故、当時の私は、このグッズ小委員会の他、宗教（現在は無い）、教務、広報（2年目から4年まで初代部長）の3つの委員会に所属していたのである。

さて、グッズ小委員会を立ち上げたが、そ

の為の予算が計上されていたわけではない。そこで、誰の発案か分からないが、短大の同窓会に頼めないかということから、短大の同窓会「緑朋会」の小林みどり会長にこの第1回委員会に出席を要請したらしい。「らしい」と書いたのは、出席要請が大学として正式なものであったのか不明であったことによる。年を越した1990年1月11日(木)のグッズ小委員会の記録に、ネクタイ、クリスマスカード、エンブレムなどと言う記載があったが、それらの制作に、「緑朋会」からの資金の提供があったと言う記載はない。むしろ、「費用が問題」というメモが後の記録に残っている。又、予算の計上のないまま、グッズ小委員会名で大学名入りの原稿用紙、便箋などを大量に発注してしまい、暫くの間格好の話題となった。結局、費用は事務の方で処理してくれたと言うことであった。此の年度のことかどうか思い出せないが、グッズとして作った聖学院大学のロゴ入りネクタイを私も買った憶えがある。

この時から十年近く後の事と思うが、短大関係者との何らかの会の席上で、小林短大同窓会長とお会いした時、この時のことが話題になり、「あの女性の委員長の後をちょこちょこ付いて来た若い(?)男の先生がいたが、それが先生だったのですね」と言われた。急に呼び出されたあの会に何か奇異なものを感じていたらしかった。全く汗顔の至りであった。

グッズ小委員会の活動など、大学の動きとすれば大きなものではないかもしれない。然し、この活動の背後には、何もない大学を大

学らしくしよう云う、教員の想いが存在した。お土産としての大学グッズは、此の年から始まった、アメリカ・アトランタのオグルソープ大学との交流計画と無関係ではない。また、大学名入りの原稿用紙の作成も、前年開学直後に決まった「聖学院大学論叢」の発行や、開学と同時に併設された聖学院大学総合研究所の出版会活動と無関係とは言えないのである。

1990年度

・1991年2月7日(木) 教授会 最大の受験者数

この教授会で、此の年の受験申し込みが3,699名であると言う報告があった。政経学部の定員が200名であったので、倍率は18倍を超えたことになる。そこで受験会場の確保が急務となった。キャンパス内の使える部屋は勿論、大宮の予備校・代々木ゼミナールの教室をも借りた。試験会場の中で最も大きかったのは体育館で、449名を収容した。通常一つの試験会場の受験生は多くとも100人位であり、2人あるいは3人の試験監督が付いた。然し、体育館では人数が多い為、全体を4つのグループに分け、各グループごと2人ないし3人計9人の試験監督を配した。加えて会場全体の責任者1人を置いた。その1人が(比較的)若造の私であった。そこに、449組の机といすを持ち込み、8列に並べた。此の体育館を受験会場とするためには、二つの問題があった。一つは、暖房である。体育館は広く天井も高く暖まりにくい。更に体育館の暖房装置は音がうるさかった。そこで、

朝早くから暖房をつけ、試験開始直前に止めることにし、後は449名の人間ボイラーに委ねた。結果は問題なし。もう一つは照明で、天気が良くても体育館の明かりでは手元の用をなさないため、一つずつ机の上から蛍光灯で照らせるようにした。配線で多少会場はごちゃごちゃしたがこれも問題はなかった。事務方は苦労したと思う。

試験当日(2月11日(月))の、受験率は96%に上り体育館も一杯になった、一列ほぼ60人8列の受験生が体育館全体に広がり受験する様を、試験会場前方の少し高い壇の上から総監督として眺めたが、一寸した壮観であった。試験が終わり、最後に各列担当の試験監督が、解答用紙を下から上に積み重ねつつ、後ろからほぼ一斉に回収して来るのである。60枚の解答用紙を、きちんと揃えて回収した理系のK老教授とは対照的に、きちんと揃えず積み重ねた為に、最後には落としてそうになって両手で抱えるようによたよたと持って来た壮年のK氏に少しひやひやした事もあった。こんな事でも性格が表れるものだと思ったことを憶えている。又、この後の試験の採点も大変であった。然し、今から考えると夢の様な話である。

1991年度

・1991年4月25日(木) 教授会 学生活動への支援

完成年度を迎え、政経学部の専門科目担当の教員も全て揃い、また1年生から4年生まで居る学生で大学キャンパスは、急に賑やかになった。それと同時に、特に学生活動への

支援が急務となった。開学以来この方面への配慮は十分と云えず、各部やサークルに顧問や指導補助を置くことが決まったが、最大の問題は、クラブ活動の拠点となる場がないことであった。そこで、この教授会には石部公男学生部長から次の提案がなされた。一つは、使われなくなってきた「大型バス」を複数台譲ってもらい、運動部の緊急の部室代わりにすることであった。この案は実行されたが、夏暑く冬寒いこのバスの部室は使いにくかったと思う。何台かのバスが、暫くキャンパスにその奇妙な姿をさらしていた。もう一つの文化部の部室に対しては、1号館4階の幾つかの部屋を割り当てた。然し、これとても安泰ではなかった、政経学部の完成年次と新学部(人文学部)の開設年次が続き、教員の研究室が足りなくなり、その結果1号館4階の個室の幾つかを研究室に転用せざるを得なくなった。1992年2月26日(水)の運営委員会のメモに、1号館にはエレベーターがなかったため、5号館にいた政経学部の若手教員3名(I、O、S専任講師)に1号館4階に移って貰う、とあった。急な事であったが、西日の厳しい研究室への配慮として、研究室としては初めて大学負担でエアコンをつけることにより、若手教員の了解を取り付けたと記憶している。なお、一般の研究室や教室へのエアコンの設置は、研究棟である8号館建設や学期制の導入を機に実施された。

一方、部室を追い出された学生に対しては、「プレハブを作る」というメモが有り、応急的にプレハブの部室を作った様に思う。然し、その後も学生活動に十分な施設は出来なかつ

た。心残りの一つである。

短大の事

最後に開学時の思い出として、短大に纏わる事に就いて幾つか触れておきたい。1988年4月の聖学院大学の開設は、短大の先生方の心に複雑な思いを引き起こしたに違いない。事実、初対面の大学の先生から失礼な事を言われた短大教員もいた。然し、大学として感謝すべきは、当時のクレーラー学長はじめ短大の主だった方々が、上尾キャンパスにおける大学との共存を認めて下さり、大きな混乱もなく大学はその歴史をスタートすることが出来たことである。その後まもなくして、全国的に短期大学の経営不振が取りざたされ、短大の四年制大学への改組があちこちで行われるようになったが、その受け入れの際、四年制大学の教授会との軋轢を起こした学校法人があると噂された。一方、大学設置時の女子聖学院短期大学の好意的対応は、後年特に1999年の短大の大学への全面的改組転換に当たり、「短大の先生を一人も辞めさせない」という理事会の決意を促し、円滑な改組転換へと繋がって行ったと考えられている。

さて、聖学院大学は、キャンパス自体を始め施設の多くを短大から受け継いだが、受け継いだものは単に施設だけではなかったと思う。その内で忘れてはならないものは、キリスト教教育の伝統とその体制であったと言ってもよいのではなからうか。現在大学で採られているキリスト教教育体制及び行事のほとんどは、小倉義明先生が宗教主任として短大に着任されて以降に整えられたものである

う。チャペルの建設は大学開設後ではあるが、その計画のスタートは短大時代にある。然し、言う迄もなく、大学がキリスト教教育の伝統に何も付け加え無かったというわけではない。その最大のものは「理念十カ条」と言われる大学の理念の明文化であろう。ここでは、これ以上のキリスト教教育について述べることは差し控え他の相応しい方々に譲るが、一言だけ聖学院大学の宗教主任制度について付け加えたい。聖学院大学における宗教主任(現チャプレン)制度そのものも、矢張り小倉先生より始まる。本学の宗教主任は、学長を補佐しキリスト教教育に責任を持つ教員として、理事会において任命される特別な職位である。加えて、大学においてはその制度上の位置が、教授会の正式構成メンバーとして、学則上学長の次に明確に定められている。当時(或は今も)このような学則が、日本のキリスト教大学にあったであろうか。一般の大学にはない「宗教主任」と言う職位を学則上に明記するなど、よくも当時の文部科学省が許可したものだ、開学の頃思ったものである。なお、短大の学則に宗教主任の位置が明記されたのは大学開設から何年かたった後のことであった。

勿論、大学開設以降に失われた短大の伝統もある。その一つは短大の「寮」の存在であった。寮が廃止されたのは、1992年4月の人文学部の開設に伴い、その部屋を新任大学教員の研究室へ転用する為であった。20年以上の間使い古した建物を新学部、特に欧米文化学科の新任の先生の研究室とするのは少し気の毒な様に思った。案の定、使い始めてや

はり不具合を感じた事も多かった様である。新任の先生の着任時（多分3月）の事であるが、或先生が研究室に入った所、林の中であり且つ締め切っていたため、じめじめした暗く冷たい一階の部屋の中に、本来ならばあるべき机も本箱も蛍光スタンドもなく、片隅の床の上にただ電話が一つぽつんと置いてあるだけであったという、笑えないエピソードを思い出した。然し、そんな対応の不手際も、牧歌的な短大だけの頃から、大学設置、学部の増設と目まぐるしく変る環境と、急増する仕事の種類とその量に事務の体制整備が追いつかず、注意が行き渡らなかった事が原因したのであると思うている。

尚、短大の寮は福田ソノ子寮監のもとキリスト教教育の一端を担っていたと聞いている。その福田先生は寮が閉じられて間もなく天に召された。何か摂理の様なものを感じる。又、私にとっても、短大の寮、特にその食堂は思い出深いものであった。私は大学に勤務する以前から、短大国文科の教員をしていた妻の案内で、この上尾キャンパスの学園祭（緑聖祭）をしばしば訪れ、福田先生にもお会いし寮の食堂で切りたんぼを何回もいただいた。美味しかったそのきりたんぼの味を思い出すと、大学開学の頃の上尾キャンパス全体の雰囲気が懐かしく浮かんで来る。



現在のクラブハウス（部室）

大学創立への思い



黒木 章

『聖学院大学創立 30 年史』のために寄稿せよと指示されたが、それがどういう形のものになるのか想定できなかった。大学史といえは予め編纂所を作って客観的な多くの基礎資料によって記述するものと考えるので、再度照会したところ「私的な感想でよい」との返事もらった。その指示に従ってここでは私が関わることになった大学創立前後のことをまったく個人的な形で記す。このことを予めお断りする。

*

1986 年の夏前である。地方の公立大学文学部国文学科に奉職していた私は翌年度に文科省などから約 300 万円と県の補助金を得られる約 1 年間の在外研究を認められて既にフィラデルフィアのハヴァフォード大学クエーカーコレクションやロンドンのフレンドライブラリーなどと連絡しながら準備をしていた。そこに学校法人聖学院が新しいプロテスタントキリスト教大学を創るので協力せよ、ついては教養科目の「文学」を担当できる人を紹介せよとの電話があった。青年期の私が育てられた日本キリスト教団滝野川教会の主任牧師で学校法人聖学院理事長でもある大木英夫先生からの要請で、私は出身大学に紹介を頼んで著名な文学雑誌編集者として活

躍していた人を斡旋してもらったのだが、聖学院はその人をお断りしたのでお前が来いという話になった。

私は幾人かの希望者の中から在外研究を認められて関係機関の受入れもほぼ決まっていた時で大変困った。在外研究後に退職することは出来ないものかと考えたが、そんな虫のいい話を教授会や私に先を越された人が許すはずはない。悩んだ末の 12 月に在外研究の辞退と 1988 年 3 月に退職して新設の聖学院大学に移ることを学部長に告げたが、案の定ごうごうたる非難が起こった。私の後に在外研究を想定されていた人に繰り上げ適用されることになったのはまだしも、この件は学部長の不手際だとの批判になって学部長が辞任するまでになった。私は最後の一年を針の筵に坐る罪人として過ごした。1987 年夏に聖学院大学の初代学長に予定されていた金井信一郎先生がわざわざ私の割譲願いのために学長に挨拶に来てくださって一連のゴタゴタは片付いたのである。

この間に私は新しいキリスト教大学作りに参加する者として自分の果たすべき役割は何かを考えた。公立大学ゆえに文学作品講読の中心にキリスト教の問題を置くことを控えていたので、キリスト教大学なら正面から扱え

るのではないかと期待するところがあり、またその頃 NHK が 1 年間の連続番組で「世界の大学」を紹介していたのでそれを視ながら学問の自由とか大学が担うべき歴史的・文化的使命や具体的な学生指導をどうするかなどのことを考えた。聖学院大学の定年は 70 歳、私大協ではなく私大連に加盟する予定だという。私に与えられる残された時間は 25 年である。また日本の所謂老舗の私立大学からなる私大連加盟にふさわしい大学、庇を貸して母屋を取られている状態の日本の新しいキリスト教大学を作るには最低 20 年はかかるはずだから与えられる最初の 20 年間で大学基礎作りに徹し残りの 5 年間でその検証に当てる——これは残る人生で遣り甲斐のある仕事だと決意して聖学院大学の創立に参加させてもらったのである。

*

1987 年冬に入試の国語問題作成を指示されて何度か聖学院本部に伺った。カソリックの上智大学とは違う新しいプロテスタント大学を作るために法人では「理念検討委員会」を設けて高度の議論が終っていた。法人が文科省に提出した大学設置認可申請書も拝見した。それを見ると私の担当科目が「国語」となっていることに驚いて「私に担当できるのは近現代文学とキリスト教文学で、国語ではない」と「文学」に変更してもらった。この時にこの法人は大学がどういうものか分かっていないのではないかと、カリキュラムの内実と展開法なども詰めていないのではないかと懸念から国際政治経済と地域政治経済の二専攻からなる政治経済学部のカリキュラムを

どう展開するか、キリスト教教育の中で全学礼拝をどう位置付けるかなどのが気になった。入試科目とそれぞれの時間や点数配分を尋ねると、科目は英語と現代国語の 2 科目、試験時間は各 60 分・配点は各 100 点と言われた。政治経済学部なのだから世界史か日本史も加えるべきだと主張したが認められなかった。また当時は多くのキリスト教大学で全学礼拝が成り立っていないことを仄聞していたので、全学礼拝は登校する学生たちの頭が冴えて前向きな気持ちの午前つまり毎日の 1・2 時間目の間に置くことを門外漢の私が僭越にも口出ししてこれは認められた。

最初の国語問題は女子聖学院短期大学の内藤淳一郎教授と一緒に作成したが、問題文には受験生になじむはずの社会科学の評論文——中学や高校の或る段階で勉強に挫折したとの思いを抱えていても資質としては能力と可能性を持つ人も多いはずだからせめてそういう人を選出するために論理的な把握力を調べるのに適した問題文を使い、また本文から少し発展させて世界史や日本史の基本的な知識を問うこととし、殊に当時の大学入試共通一次試験の択一マークシート方式の欠陥を克服するために事柄を論理的に把握し整理して表現できるかを調べる幾つかの記述式の解答を求めた。このような試験形式にしたのは私がおのれ時までの約 6 年間大手予備校の東大など所謂難関大学の受験生のための模擬試験国語問題と解答を検証・協議するアルバイトをしていてそこから学ぶことが多かったこと、特に最初の教務部長に任じられると聞いたので、受験生と合格者の客観的な学力と資質を

知ったうえで学生指導と教育法を考える教員の共通基盤を作ること、卒業生が国家公務員実務者として国の政策作りに関わる人材を育成することを意図したからである。

私は学生指導の一環としてケンブリッジ大学をまねて専任教員が交替で1年間授業担当はせず学生の勉学相談・指導に当たるチューター制度を提案したが、そういう体制にするには教員の人数不足で不可能だということで既に殆どの大学が実施しているクラス担任とかアドバイザーの形にすり替えられてしまった。

入試日は2月11日の「建国の日」にした。なぜこの日か？直前に国会でこの日を建国記念日（国民の休日）にすることを決めていた。私には国による教育支配に抗いたい、大学の学問の自由を表現したいとの思いがあり、例えば（これは私にとって主たる問題ではなかったが）法人は共通一次試験に参加すれば12月の土・日曜日の試験日は前日と当日は殆どの教職員が動員され、キャンパス内の緑聖教会（現在の聖学院教会）の日曜礼拝が守れないから共通一次試験に参加しないと決めていた（法人各校も建国記念日を休日にしないと決めていた）。また1960年代後半の大学学費値上げ反対運動を受けて国が私立大学経常費の半分を補助する制度を作った反面で補助金を私立大学の支配・管理の手法にしている現実、さらに悪いことに補助金を得るために大学経営を考えることで「学の独立」を歪める大学が現れるだろうとの危機感があった。さらに私大協加盟の大学の多くが私大連加盟の大学の入試日より早い2月上旬

に入試日を設定していたので私大連に加わる聖学院大学が所謂老舗大学の一つであることを世間に認知させる策として私大連加盟大学の入試日に食い込ませる必要がある。初期の入試日設定にはこういう意図があったのである。

一学部200人定員ながら聖学院大学は期待と注目を集めて実に多く（2,000？3,000？）の受験生があつて国語の記述問題の採点には大変苦勞した。7、8人の教員で2日以上かかり切りだった。裏では苦情も出たと後で聞いたが、30,000円もの受験料に見合う労力は使うべきだとの思いもあり、何より全教職員が大学創設の希望と意欲に溢れる楽しい苦勞であった。合格者の学力平均偏差値は予想に近い45程度であったから数年後には50を越えて大学の体をなす基礎が作れるとの希望が湧いた（直後に大学設置許可の基準が弛んで日本の大学数は約400から700超となって事情は一変した）。

当時は教育や学生指導の内容より受験産業の出す合格偏差値で大学を序列化する風潮が強くこれを破るには大変な努力を要した。私は全国のキリスト教高校と近隣の高校を細かく訪ねて聖学院大学の目指すところを説明し、賛同を得て受験生を送ってもらうように教員が働くことを提案した（前述の予備校がそれで成功しているのを見ていたからである）。

また全国のキリスト教高校に学校推薦の受験生を送ってくれるように頼むとともに私は日本キリスト教文学会九州支部に参加していたので最初の数年間四国・九州のキリスト教

高校を中心に廻った。多くは快く受け止められたが、何度目かの訪問の際に関東の未だ実績のない新設大学にアパート代を払って進学するより家から就職の面倒見もよい地元大学に進ませる方が負担は少ない核家族で子供を手放したがない親は地元大学に進ませたがっていると説明された。大学観の変化を知るとともに新しいキリスト教大学を作るといっても必ずしもキリスト教教育界が一枚岩ではない現実を知った。さらに近隣の一般高校を訪ねて進路指導の担当者に面談する際にこちらがとかく上から目線で話を（所謂「教師病」である）反発されたことも耳に入った。教員の高校訪問が立消えになり専ら職員だけでこの過剰な仕事を引き継ぐことになったのである。

*

大学は女子聖学院短期大学のキャンパスを共用する形で発足したが、設置認可のためか短期大学は主に2号館を利用し敷地の大半は大学用に当てられていた。急遽作られた3階建てプレハブ研究室棟（現在のディスプレイ館）の1階奥が私の研究室だった。北側の小窓からは葦が密集する沼地（現在のヴェリタス館前の遊水地から山田記念陸上競技場）が見えて雉やコジュケイなどの鳴き声が聞こえ、戸崎の尾根は葡萄や野菜の畑、その北側奥には樺やクヌギの林が広がる実に長閑で心和む風景であった。

大学は風景も活動も文化の発信地でなければならない。女子聖学院短期大学は花や緑を大事にする上品な雰囲気と充実したカリキュラムで地域では高く評価されていた。そこに

多くのむさくるしい男どもが割り込むのは誠に申し訳なく、私は学生たちに笑いながら「花園を荒らすのは誰だ」と言い続けることにした。ただ短期大学の教員研究室（現在の3号館）の裏に新築住宅の壁面がむき出しで見えるのは大学キャンパスの風景としても日本人の伝統的美観としてもお粗末だったので、住宅を隠すように植樹しようと近くの林で小さな樺を引抜いてきては地境に植えていた（途中で気付いた事務局が業者による本格的植樹をしてくれた）。

私はキャンパス入り口の新大宮バイパス（17号線）を車椅子で渡れる歩道橋を設置してくれるように近くの国交省道路管理事務所に掛合った。管理事務所も予定していたらしくすぐ設置してくれたのはよいが、土地取得の関係か障害者が車椅子に乗って自力で渡るには勾配が大きすぎるものになった。前述の葦の繁る沼地等が埋立てられた時に鴨川の堤防を桜並木にして対岸の三貫清水緑地と組み合わせる遊歩道を作ろうと考えた。これもケンブリッジ大学を真似てのもので、鴨川でボート遊びはできないまでも先ず汚い鴨川を浄化しなければならない。川がどこに発してどこを流れてくるかを調べると、上尾市街を通りそこで暗渠つまり生活排水が垂流しにされていること、この生活排水を止めると鴨川の流れが涸れることが分かった。これでは無理と堤防を桜並木の遊歩道にすることを諦めた。

私立大学の充実は卒業生の母校愛に依るところが大きい。学生部長に転じたのを機に私は学友会・同窓会との協力体制を作ることを心掛けた。例えば学友会で7号館南側に葡萄

棚を作りベンチを置いてもらった。ハヴァフォード大学の入口並木道のように卒業年次ごとに毎年1本の植樹をしてもらうとかあるいはベンチを寄贈してもらって、全てに刻字したプレートを付ける（近年ICUがこれを実行している）とホームカミングデーが楽しくそれによって母校愛も育つはずである。ところが学友会と同窓会に根回しが終わりかけた時に実に思わぬ事態が生じて同窓会の信頼を失うことになり、この夢も飛んでしまった。

学生の関心事を広げ地域住民と一緒に色々な問題を学際的に学ぶ或いはスポーツや古典芸能に触れて知見を深める場としてアセンブリーアワーを発議し大学発足時から実施した。水曜日の2時間目に設定したプログラムはその都度地域の新聞社に行事案内欄に載せてもらったりしたが時間帯設定が悪かった。この時間帯では地域住民は参加し難く、学生たちは全学礼拝に続く時間帯だったので当日

の午前中は休みだと思ふようになった。全学礼拝もアセンブリーアワーもその前後に必修科目を置くことを教務部に協力を求めたが非常勤の先生が希望する時間帯を優先する時間割作りではうまくいかないのである。

*

書いてきたことは余りに個人的で一人よがりの話で『聖学院大学創立30年記念誌』の記事にはふさわしくないと不快に思われた方が多いはずである。だが小さな一例として私個人の経緯と思いを敢えてこういう風にしたのは大学創立の前後の事務局や学長・運営委員の方々の苦労はもちろん、色々の事情を乗り越えて夢と使命感をもって馳せ参じた方々がすべてを神の恵みとして喜んで大学形成に取り組んできたことは理解してもらえらう。ただ大学組織としては眼高手低の弊があり、私個人には知恵がなかったとの反省がある。ご寛恕を乞いたい。

コミュニティ政策学科と NPO



富沢 賢治

まえがき

私は2000年4月から2006年3月までコミュニティ政策学科の学科長を務め、2001年からNPO「コミュニティ活動支援センター」の事務局長を務めた。本稿は、確立期のコミュニティ政策学科とコミュニティ活動支援センターとの連携の記録である。

1. コミュニティ政策学科の創設

2000年、本学は政治経済学部コミュニティ政策学科を増設することによって、地域の問題に積極的に取り組み、創造的な活動を行うことを内外に表明した。1999年に文部科学省に提出した文書、コミュニティ政策学科の「設置の趣旨及び特に設置を必要とする理由」には、つぎのように記されている。

「『コミュニティ政策学科』は、今や本格的に始まろうとする地方分権の時代への聖学院大学の新しい積極的な対応として構想されたものである。」「来るべき地方の時代において、地方自治の明確な理念をもち、その理念の実現と展開への知識と技能をもつ新時代の担い手の養成は、緊急に取り組まねばならない課題となっている。『コミュニティ政策学科』は、この必要に応じて設立されるものである。」「『コミュニティ政策学科』は……新しい地方

自治の指導者を養成するために設置される。」

2. コミュニティ政策学科の特色

2005年1月、コミュニティ政策学科の教員会議は、学科創設以降の5年間を総点検し、将来に向けての学科形成の展望をつぎのよう

(1) コミュニティ政策学科の理念

「神を仰ぎ 人に仕う」という大学のモットーから導き出されるコミュニティ政策学科の理念は、「神を仰ぎ、コミュニティに役立つ研究・教育を行う」ことである。

(2) 学科のモットー

glocalization (globalization と localization の同時進行) という時代背景に即して、Think globally, act locally. をコミュニティ政策学科のモットーとする。そのさい、community、communication、care という3つのキーワード (3C) を重視する。

(3) コミュニティ政策学科の教育の特色

(i) どのような人を育てるか

①「新しい地方自治の指導者を養成する」(「設置の趣旨」)

②世界的な視野を持ち、地域社会を担う人(まちづくりに貢献できる人)を育てる。そのために、とりわけコミュニケーション能力(英語、パソコンなど)を向上させる。

(ii) 教育の方法

①ゼミ中心の教育

「面倒見のよい大学」「少人数教育」という大学の教育方針を受けて、ゼミ中心の教育を行い、教員と学生、学生同士の密接な人間関係(コミュニティ)をつくる。そのために1年生から3年生までの通年ゼミを必修とする。一つのゼミに所属する学生数は10名程度とする。

②教育内容の改善

学科は、行政系、経営系、情報系という3つのコースをもっている。地方公務員志望者の教育という従来の志向性(行政系)を維持するとともに、民間で活躍しうる人材の育成を図るために、あわせて経営系と情報系を強化する。

3つの系の有機的連携を図り、地域社会の担い手づくりという志向性を打ち出す。「まちづくり」を基本的コンセプトとしてカリキュラムを再編成する。

(iii) NPO との連携

学生の全人格的な成長のために座学と社会的実践活動との結合を図る。学科を「まちづくり」の研究・教育センターとして組織するとともに、NPO「コミュニティ活動支援センター」(2001年創設)を学科の研究・教育成果を実践に移すための組織として位置づけ、両者の連携を強化する。

3. 「地域とアソシエーション研究会」との連携

聖学院大学総合研究所の研究プロジェクトとして「地域とアソシエーション」をテーマとする研究会が、1999年度から2004年度までの6年間開催された。初年度の1999年度に大学とNPOとの連携についての研究が開始された。コミュニティ政策学科が創設された2000年度になると、聖学院大学を基盤として大学と地域社会を結ぶNPOを創設する構想が検討され、2001年度に特定非営利活動法人「コミュニティ活動支援センター」が創設された。

翌2002年4月には地域通貨にかんする研究会が開かれ、同年7月にNPO「コミュニティ活動支援センター」を担い手とする地域通貨「デナリ」の発行と学内流通が開始された。

2002年度には、また、行政と市民との協働についての研究が開始された。研究と並行して、NPOが、さいたま市の主催する「まちづくりセミナー」の企画・運営の事業を委託され、地方自治体との協働を実践することになった。同年には、上尾市主催の「あげおふるさと学園・まちづくりコース」の企画・運営にも参加し始めた。

2003年度になると「地域とアソシエーション」研究会は、まちづくりの具体案の作成に取り掛かった。

同年4月にコミュニティ活動支援センターと宮原駅商工会などが中心になって「宮原駅西口まちづくり協議会」が創設された。

2004年2月の研究会で「地域と地域をつ

なぐ」というテーマで、「上尾市戸崎地区まちづくり協議会」の会長と「宮原駅西口まちづくり協議会」の会長を報告者として、両地域のまちづくりの現状と課題について検討した。両協議会は、隣接地域でありながら、驚くべきことにそれまで互いの存在を知らず、会長同士もこの研究会ではじめて顔をあわせるという状況であった。大学は、両地域にまたがっているために、大学周辺のまちづくりのためには「地域と地域をつなぐ」ことが必要であった。この研究会を契機として「上尾市戸崎地区まちづくり協議会」と「宮原駅西口まちづくり協議会」の連携関係が始まり、大学としても、大学を拠点とする生活区としてのまちづくりの必要性を自覚するに至った。

2004年3月の研究会は、「宮原駅西口地域のまちづくりの問題点を明らかにして、解決策を探る」をテーマにして開かれた。

2004年7月の研究会では、まちづくりの問題点を環境・景観の問題に絞り込み、事例として宮原駅西口にある逆川をとりあげた。この研究会で阿久戸学長はつぎのように述べた。

「日本社会の再建は、基本的には地域から始まる。地域住民と大学の共存共栄は、聖学院大学の基本的な政策である。まちづくりのためには大学も応分の役割を担っていく。最近では、地元の人たちの熱い要望に応じて、大学内にビオトープをつくりホテルの再生を試みている。日本の急速な近代化のなかで自然の生態系が大きく変えられていることを考えると、人間が傷つけた自然を少しでも再生させるということは非常に大きな意味を持つ

ている。一世代ではできなくても、若い世代が継承していけば、すばらしい地域がつけると信じている。」

2004年12月の研究会では、これまでの研究会の成果をふまえて東内勝美(一級建築士)が作成した「宮原駅西口地域のまちづくりマップ」に即しながら、大学周辺のまちづくりの問題が具体的に検討された。

上記のように、2004年の研究会において、まちづくりのプランがかなり煮詰められてきた。つぎの課題は、市民プランをどのように実現するかという方法の問題であった。そこで、2005年1月の研究会は、「協働によるまちづくりの手法」をテーマとして開催され、市民と行政の協働によるまちづくりをどのようにして実現するかという問題を検討した。

「地域とアソシエーション」研究会のメンバーである富沢賢治は、コミュニティ政策学科の学科長およびコミュニティ活動支援センターの事務局長という立場から、①さいたま市総合振興計画審議会・教育市民部の部会長(2001 - 3年度)として、さいたま市総合振興計画の『基本構想』(2002年12月)と『基本計画』(2004年2月)の作成に参加し、②「上尾市NPO協働まちづくり推進委員会」の委員長(2002 - 3年度)として『上尾市市民活動調査書』(2003年3月)と『上尾市NPO協働まちづくり推進計画書』(2004年3月)の作成に参加し、③2003年度には埼玉県NPO活動情報サポート検討委員会委員として県の情報サポートのあり方を検討し、④2004年度以降は上尾市生涯学習推進市民会議の会長として市民と上尾市教育委員会との

協働の発展に努めた。

このようにして、学科設立期においては、大学の研究活動と地方自治体との協働が相互に支えあう関係となって発展していった。

4. NPO との連携

(1) NPO の設立経緯

コミュニティ政策学科の有志は、大学と地域社会との連携を図る組織として2001年にNPO「コミュニティ活動支援センター」を設立した。設立者の一人である富沢賢治は、設立経緯についておよそつぎのように述べている。

「NPOは、なによりもミッションにもとづく組織である。すなわち、なんらかの社会的使命にもとづいて運営される組織である。聖学院もキリスト教の理念の実現を図るというミッションにもとづく組織である。聖学院は、法的には学校法人であるが、本質的にはNPO（非営利組織）である。NPOは、コミュニティが抱える社会的問題を解決しようとして組織されることが多いため、CBO（Community - based Organization）と称されることがある。日本の学校は、どの程度CBOとしての性格を有するのであろうか。現状においては、多くの学校は地域社会から乖離する傾向にある。聖学院は、地域社会との連携を図るNPOをつくる必要がある」（『聖学院を基盤とするNPO』（『キリスト教と諸学』17号、2001年、65 - 70ページ、参照）。

(2) 宮原駅西口地域まちづくり協議会の創設

「コミュニティ活動支援センター」は、聖学院大学をはじめとして地域諸団体（日進町3丁目自治会、日進町3丁目子供会育成会、宮原町3丁目自治会、宮原駅西口商工会、みやはら福祉会）に働きかけて、2003年4月に「宮原駅西口地域まちづくり協議会」を設立した。

協議会規約の第3条には、「本協議会は、……次の活動を行う。（1）本地域のまちづくりに関する計画づくりと提言。（2）本地域のまちづくりに関する諸活動の実施。（3）まちづくりに関する学習・調査・研究。（4）さいたま市の事業への提言・意見等の提出。（5）その他協議会の目的を達成するために必要な活動」と記されている。

協議会の活動対象エリアである宮原駅西口地域は、東は高崎線、南は川越線、西は花の丘農林公苑、北は公団大宮奈良町団地で囲まれた地域である。

(3) 設立初年度（2003年度）の活動

① 「ゴミ拾いキャンペーン」（6月）

宮原駅西口広場から聖学院大学までを、住民と学生たちが交流しながらゴミを拾い、草を抜きながら進んだ。

② コミュニティ政策学科主催によるシンポジウム「まちづくりを考える」（7月）の企画と運営に参加した。

③ 「小学生絵画展」（10月31日 - 11月9日）

子どもたちの目線からまちの将来図を描いてもらうという意図で、「みんなが住みやす

いまち【日進・宮原】の将来図」をテーマとして小学生の絵画を募集した。宮原小学校、日進北小学校、別所小学校の児童から100枚の絵が寄せられた。それらの絵を宮原駅コンコースに「第3回ふれあいフェスタ in 宮原」当日まで約1週間展示した。フェスタ当日には優秀な絵を描いた20名の児童を表彰した。

④第3回「ふれあいフェスタ in 宮原」(宮原駅西口商工会主催、11月9日)に参加した。

多くの学生が、テントの設営、昼食の配布、イベントの手伝いなどを行い、このまちの祭りを支えた。フェスタ主催者は、大学メンバーの積極的な活動を高く評価して、住民と大学との連携がますます強められた。

(4) 2004年度の活動

①クリーンキャンペーン「ゴミ拾い」(6月12日、8月28日)

まちづくり協議会の主催するクリーンキャンペーンに聖学院大学・学友会が参加して、宮原駅西口駅前広場から聖学院大学までの道のゴミ拾い清掃・草取りを行った。

②逆川の整備

逆川の現状を調べ、逆川沿いの整備について検討した。

③小学生の絵画展(10月-11月)

宮原小学校、日進北小学校、別所小学校の小学生に、本地域が将来どのようなまちに

なっていきたいかを絵画とコメントにより表現してもらった。絵画を「ふれあいフェスタ in 宮原」の開催日までの1週間、宮原駅のコンコースに貼り出し、子供たちの希望を地域の人々に伝えた。フェスタ当日には校長先生たちも参加して表彰式を行った。

④ふれあいフェスタ in 宮原(11月14日)

参加者数は過去最高となり、終日にぎわった。

⑤タウン紙の発行

タウン紙を6回発行した。基本的な目的は、地域の情報を提供することにより、住民が地域の将来を考えるような機運を醸成することである。第1号は、聖学院大学の阿久戸光晴学長と宮原駅西口地域まちづくり協議会の須賀隆夫会長との対談を掲載し、5000部を配布した。

5. むすび

コミュニティ政策学科は、大学と地域社会との間に橋を架けることを目的として、2001年にコミュニティ活動支援センターを設立した。2003年には宮原駅西口地域まちづくり協議会が結成された。これらの組織の活動により聖学院大学と地元住民の協力関係は、一段と進展し、地域における文化センター、知的センターとしての大学の役割も明確になってきた。

欧米文化学科の設立の経緯と歴史



稲田 敦子

I 設立経緯

欧米文化学科は、人文学部に児童学科とともに、1992年に設置された。趣旨は、人文学部の「人文」(フマニタス)をその本来的な意味に深めて理解し「人間学」の伝統を継承しつつ、現代における文化総合を目指すものであった。

本大学の建学の理念には、「霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成」が研究と教育の課題として記されている。詩人テニスンが『イン・メモリアム』のなかで、「知性に光をあらしめよ、いよいよあかるく、心には経験の念を宿らせよ、いよいよ深く。知性と霊性とが諧調を奏でて、昔の通りに、そして一層響きも大きく和音をならすために」(入江直祐訳)との一節は、この課題を端的にあらわしているといえよう。

欧米文化学科設立には、聖学院の背景である文化的伝統と豊かな国際関係の経験が、研究・教育の場で深められ継承されることによって、その社会的な意味と価値を広く発揮しなければならないとの期待と要請があった。こうした要請をふまえ、欧米文化学科設置の必要性は以下の四点にみられる。

第一に、時代の趨勢である国際化に対応すること。第二に、この国際化の課題を本学に

相応しく限定し、伝統を継承しつつ学院の生命体を生かす研究・教育の場とする。第三に、「西側の文化価値」を正しく理解し国際社会の一員として責任をはたし、この課題を担う人材の育成を積極的に実現させること。第四に、これまで女子聖学院短期大学が大宮・上尾地区の国際性の必要性に応える様々な奉仕をしてきたが、本学科はその奉仕をさらに拡大するものである。近辺には類似の大学学部がないことも相俟って、設置への支持と要請がある。こうした経緯により、2学科が所属する人文学部が新設された。各学科の入学定員は50人で収容定員は200人であった。

II カリキュラム構成

「文化」とは何だろうか。文化人類学者のエドワード・ホールは、「文化」を「沈黙の言葉」(Silent Language)と簡潔に定義している。文化は、重層構造になっており、目に見える表層文化だけではなく、その奥にある深層文化(隠れた文化)の両側面があるということ、非常に端的に表している。すなわち、目に見えるものだけではなく、もう一方の人間や諸現象のその奥に踏み込んだ目に見えない深い部分に、偏見や先入観を排除して、自分自身で光をあてていくことが、真理を明

らかにすることであり、その重要性が示されている。これこそがまさに欧米文化学科で学ぶことの核になるものであろう。

本学科では、グローバルな視点をもつ世界市民の一人として歩みを進めるべくカリキュラムが構成されている。

第一に、キリスト教による国際的観点をもった人格教育。異文化間コミュニケーションの経験が豊富な教師陣による人格教育により、言語の背景であるエトスを理解できるようにする。第二に、語学教育の新生面をひらく。英語教育に力を入れ、基本的英語力の育成をはかり、生きた英語を身に着け、海外留学など異文化体験の可能性を広げる。第三に、歴史を縦軸とし、比較研究を横軸として国際文化関係、グローバリゼーションを視野におさめ、各文化を総合的に把握する力を養う。また座学のみならず、生活文化、所作など、異なった文化の中で生きる者にとって不案内な事柄を具体的な事例から学ぶようにすることも看過できないものである。

こうした多岐にわたる領域において是非とも必要とされる基礎知識を13の分野に分け、本学科の全教員が問題を作成して編纂し、巻末には欧米文化学科推薦図書載せて『欧米文化の基礎知識』として発刊し（2006年）、欧米文化入門のテキストとした。

Ⅲ 多様な活動・学び

1. 欧米文化学科 News Letter の発行

学生たちが、学科内サークルの活動として編集委員となり、第1号（A4判20ページ）を2002年3月に発行した。「21世紀という

新たな世紀のキーワードのひとつに〈多文化共生〉があげられます。このことを具体的にを行うには、多岐にわたる文化相互のコミュニケーションが欠かせないものとなり、欧米文化学科もまさにこのことを目指して、さまざまな活動を考えています。」との編集後記にあるように、企画、インタビュー、原稿依頼、執筆など学生たちが自主的に取り組み、読み応えのあるものとなっていった。

創刊号では最終講義が載せられた。女子聖学院短期大学の学長の重責を果たされたW.G. クレーラ先生、アメリカ文学、メルヴィル研究の第一人者の須山静夫先生、ルター研究を中心にヨーロッパ思想、人間学を深く考究され学士院賞を受賞された金子晴勇先生の講義録は、大切な歴史の1ページとなった。

2. 異文化体験

アメリカのアトランタで1ヶ月ホームステイの体験をした学生は、歴史的にさまざまな事柄が起きた町で暮らすことにより、マーチン・ルーサー・キング Jr. の活動を現地で知ることにより、彼の目指したもの、その障壁となった歴史的背景をより深く学びたいという思いを強くし、帰国後の学びの契機となった。

オーストラリアのアデレードで春期1ヶ月の海外研修に参加した学生は、入学当初からの希望がなかったが、初めての海外生活とホストファミリーでの生活は、まさにとまどいの連続ではあった。しかしともにボランティア活動にも参加することにより、言葉の壁をのりこえるコミュニケーションスキルの糸口

をつかんだことを記している。

タイでボランティア活動をするスタディ・ツアーには、数年前から実施されている聖学院高校のプログラムにインディペンデント・スタディとして学生たちが参加した。チェンライにある NGO 施設のメイコックファームに宿泊して、学校が遠く通うのが困難な山岳民族の子供たちの学びの支援や施設整備などを目的としている。参加した学生は、「目に見える情景や人々の美しさとは裏腹に、そのもっと奥の部分には努力や、苦勞、問題などが潜んでいると知った。」そして「志」をもって行動することの大切さを学んだと結んでいる。



『欧米文化の基礎知識』と「News Letter」

IV 基礎力の体系的養成 (GP 採択)

1. 概要

学科での教育の充実をめざすには、一年次からの基礎力の養成が課題となっていた。

この基礎教育を充実させる取り組みは、2009年から2011年の3年間、文部科学省の大学教育・学生支援推進事業の大学教育推進プログラム (GP) [テーマ A] に採択された。名称は「生きるための人文学に向けた学びの基礎力」である。概要は、初年次教育におい

て、「読む力」「考える力」「調べる力」「書く力」という学生の4つの学びの基礎力育成を目指すことを主眼とし、体系的な段階をふまえて実践するものである。取り組み責任者は佐藤啓介先生であった。

その育成に際しては、少人数のゼミ形式のもと、オリジナルテキストを用いたゼミ・個別指導・課題添削が中心となり、また e-ポートフォリオを導入し、学生の学習状況の把握につとめる。そうした指導を総合的に運営するためのターミナルとして、2010年1月に、取組主体を明確にするため、学科内に「GP推進室」が設けられ、意欲的な取組を迅速に進めていくこととなった。

本取組では、文章や統計・画像資料を正しく批判的に読解する能力の育成をめざし、そこから段階的に、考える力、課題を発見し調べる力、書く力を養成するという体系的な展開が肝要なものであった。

2. 学科オリジナルの教科書

この実現のために大きな役割を果たしたのが、佐藤啓介先生を中心に教員達が執筆した基礎ゼミ用のオリジナルの教科書である。『「はじめる」教科書—初年次のための欧米文化の学び方』を刊行した (2010年3月)。内容は、文章に読んだ足跡をつける⇒文章を段落ごとに要約⇒文章全体の要旨の作成、論説文の平易な翻訳⇒論理の基礎を学ぶ⇒論理のチェック、新聞の読み比べ、グラフ・画像を読む。さらに2年次科目にも対応するため、新たな章を追加した改訂版を刊行した。

3. 課題達成度 レポート作成

基礎力の育成のためには、学んだ記録を学生自身が残し、自己点検するポートフォリオが有効である。教員が学生の課題達成度を確認・評価し、学生が自分の成長を確認して新しい課題を発見できるe-ポートフォリオシステムを開発していった。

基礎ゼミ終了時には、各自が主体的に選択したテーマをめぐるレポート作成を目標とし、資料収集について、論理的な思考の訓練、レポートの構成についての助言などを行い、レポートとしての形式（論理構成、文体、参考文献の記載方法）を整えることをめざした。

学生たちが選んだテーマは、学科の学びに関連するものから現代社会の諸問題に関するものまで多岐にわたる。履修中の他の科目で芽生えた問題関心をレポートのテーマに選ぶ学生も多く、英語教員を目指す学生の多くが、教職関係の科目との連携で教育問題に取り組んでいるのもそうした傾向の現れであろう。学生が同時期にどのような科目を履修し、どのような問題に目を向けているかをさらに汲み取って指導につなげることができれば、学びを有機的に結合させることが可能となり、学習効果が上がるのではないと思われる。

V 児童英語教育

近年児童英語教育への要請は高まり、その経緯、近年の状況を東仁美先生が担当された。

1. 導入

欧米文化学科では2000年度に学科の専門科目として児童英語教育科目を新設した。学

習指導要領改訂により、総合的な学習の時間において国際理解教育の一環として英語活動が導入されることになる2002年を見据えての導入であった。中高英語科の教員養成課程で教員免許状を取得する学生も多く、児童英語教育への関心も高かったようである。

2003年には学科内サークルとして児童英語サークルが発足した。学科教員がアドバイザーとなり、学生たちが自主的に勉強会を開き、子どもに英語を教える指導法の研究に取り組んだ。サークルの学生たちは、さいたま市の公民館事業「ハローキッズ」のアシスタントとして小学生に英語を教える活動に積極的に参加した。「ハローキッズ」の活動に関わった主要メンバーは、卒業後中学校の英語科教師となり、各地で活躍している。

2. J-SHINE 小学校英語指導者資格

2002年に公立小学校で初めて英語活動が導入されたが、その指導体制を支えるため、2003年には英語教育指導者の資格認定を行うNPOとして「小学校英語指導者認定協議会」（以下J-SHINE）が設立された。聖学院大学は2004年にJ-SHINEの認定団体となり、その共通カリキュラムに沿った指導者養成プログラムを実施している。

J-SHINE資格取得には50時間以上の指導経験が求められるため、2007年度からさいたま市立桜木小学校に授業実習の場を提供していただいている。授業内での実習であるため、学生にとっては責任も重く、授業実習（インターンシップⅡ）を履修する学生は、事前事後指導のため指導教員の研究室に週3回は

ど通う日々が続く。この充実した指導者養成プログラムでは、過去15年間に90名のJ-SHINE資格取得者を輩出している。小学校教員や児童英語教師として小学校英語教育に携わっている卒業生も多い。

3. 小学校英語指導者養成講座

2001年度から大学主催の「児童英語指導者養成講座」を年1回開催してきた。初年度は聖学院小学校を、また2006年度までは池袋サンシャインシティや東京国際フォーラムを会場とし、全国からの受講者数が250名を超えた回もあった。2007年度からは地域への貢献をより重視し、会場を聖学院大学に移した。2009年度には小学校外国語活動の必

修化に向けて講座名を「小学校英語指導者養成講座」と変更した。その後2012年度まで、1日集中型の講座を毎年7月に開催したが、小学校英語教育界をリードする著名な講師陣が一堂に会する本学の講座は全国的にも注目されてきた。2014年度以降は、小学校外国語の教科化に対応すべく、年数回シリーズの講座へと形態を改め、地元の小学校教員をサポートする講座としての機能を果たしている。

VI おわりに

この学科で学んだ学生は、真にグローバルで責任的な個人として、他者とともに生きる国際人へのパスポートを手にする人材となることを希ってやまない。



欧米文化学科基礎ゼミで製作したジャック・オー・ランタン

日本文化学科設立のころ



鵜沼 裕子

日本文化学科は1998年4月、当時、主として大学の一般教養課程で日本文化系の科目を担当していた教員と、女子聖学院短期大学の国文学科を合併するという形で創設された。創設当初に在任した教員のひとりとして、当時から振り返って思い出すことどもの中から、ここでは特に、二つのことをしたためたいと思う。

第一は、学科創設当初の教員の陣容についてである。そのころ、四年制大学とそれに併設する短期大学を合併するという動きは、あちこちの大学で起こっていたが、多くの場合、そこにはさまざまな問題が生じ、事は決してスムーズには運ばなかったと聞いている。

ここでざっくりばらんに言うことをお許しいただければ、短大から入った教員の職階をどうするか、とか、同じ法人に属し、キャンパスを共有してきたとは言え、それぞれ別組織で働いてきた教員たちが、果たして望ましい協力関係でやっていけるのか、などといったことである。しかし本学の場合（背後に関係者の一方ならぬ労苦があったにせよ）、ことは極めて順調に進み、学科発足の後も、全教員が協調して新しい学科の育成に努めることができた。

それにはいろいろな理由があると思うが、

私は一つには、短大所属の教員方が、それぞれ学究としてご自身独自の研究領域を持ち、それぞれの分野で地道に研究活動を重ねてこられた方々であったということをお伝えしたいと思う。このことは、四年制大学の一学科として自他ともに認める学科を作り上げることができた、大きな要因であったと考えている。

ここに、学科の創設当初に専任として在任された先生方のお名前と、簡略ではあるがそれぞれの専門分野とを記しておく。（アイウエオ順）

故・荒木忠男先生

荒木先生についてはこの文章の後半で改めて詳しくご紹介するが、初年度に開講された「比較文化論」では、グローバルの時代における日本の位置づけや役割を問われる授業が行われた。国際舞台で活躍された方に相応しい、世界的視野の話題が数多く提示されたことと思う。

故・井上伸子先生

井上先生は、歌舞伎や狂言など、日本の伝統芸能を主な研究分野とされたが、ただに研究をされただけでなく、斯界の一流の演者たちと親交があり、彼らを招いて講演を聴いた

り、実際に学生たちにパフォーマンスを指導していただき披露させるなど、ユニークな授業で人気を集めた。若くして他界されたことは、日本文化学科のみならず、本学全体にとってまことに大きな損失であった。

鵜沼裕子

日本のキリスト教思想を主な研究テーマとし、内村鑑三、新渡戸稲造、植村正久など、近代日本においてキリスト教と出会った人々が、その信仰にもとづいてどのような生の軌跡を描いたかを探究し、その研究成果を学生諸姉姉と分かち合うことを目指した。教室という、自らの思想的立場をも対象化し客観視することなしには講義が成り立たない場所で、講義者を根本で支えるものがキリスト教の信仰であることを伝えることの難しさを実感した授業であった。

岡田 潔先生

岡田先生は、国語科教育と中古文学とを主な研究・教育テーマとされた。最終講義で、先生は、枕草子の有名な「雪のいと高う降りたるを」の段を取り上げて、簾をあげて中宮定子に雪を見せたという少納言の行為は、自らの才知・機転をひけらかす「われぼめ」であるという従来の定説を、テキストの入念な読みを通して退けられ、少納言は、彼女の機転に共感して喜んだ定子と「笑い」を共にしたのであることを示された。国語科と文学研究とが合体した、示唆に富む講義であった。

川崎 司先生

川崎先生は日本近代史を専門分野とされたが、先生の学風の真骨頂は、その徹底した史料中心主義にある。北村透谷やその周辺の人物を中心として、先生が収集された史料は、「川崎先生の史料」としてその道の研究者の間に知られているが、先生への信頼から、親族から直接に遺筆を託されることもあったという。また先生の研究室は、常に先生を慕う学生や卒業生たちの「たまり場」でもあった。

黒木 章先生

黒木先生の研究分野は、幅広く近現代文学全般に及び、深い思索に裏付けられた論文には筆者も多くを教えられているが、特に、クエーカー主義キリスト教の平和論に関心を寄せられ、研究休暇中に訪れられたロンドンのクエーカーライブラリーでは、その所蔵になる膨大かつ貴重な史料を点検・収集された。残念なことに、先生が在任期間の後半に得られた重篤な病が、その整理を妨げていると仄聞しているが、主の憐れみとその集成を果たさせて下さることを祈り願ってやまない。

佐藤克也先生

佐藤先生は、漢文の先生として学科の創設に加わられた。中国の古典が、「返り点」と「送り仮名」を用いる、日本人の発案になる「漢文訓読」によって、日本人の精神生活、言語生活をいかに豊かにしてきたかを説かれる講義であった。先生の飄々としたお姿が、趣味で研究室の片隅で栽培されていた野草とともに、今も脳裏に浮かんでくる。

島村 馨先生

島村先生は、イギリス文学を始め、広くヨーロッパの文化に精通され、比較文学論を講じられた。宮沢賢治、遠藤周作、川端康成など、海外で広く知られ評価されている作家の作品を題材に、比較文学の視点から、諸作品についての知識の習得や、批評能力の育成を目指された。ご在任期間は短かったが、物静かで温厚なお人柄が印象に残っている。

清水 均先生

清水先生の授業は、主としていわゆるサブカルチャーを主題とされ、マンガ、アニメ、メディア、スポーツ等、身近かつ多彩な文化領域を自在に横断しつつ「文化」の本質に迫ることを目指された。単に文化を客観的な研究主題とするだけでなく、学生各自が現に生きる文化を検証し、未来の文化創造に積極的に関わる姿勢を持つことを促す授業は、「今」を主体的に生きようとする若者たちの意欲をかき立てるものであったことと思う。

故・標宮子先生

故・標先生のご専門は、中世・近世文学であるが、そのご遺跡は、一年半に及ぶご闘病生活を抜きにして語ることはできない。先生は、中世日記文学の『とはずがたり』でお茶の水女子大学より博士号を取得されたのと前後して、第四期のすい臓癌の告知を受けられた。その後は、癌そのものの痛みに加え抗ガン剤の副作用によるお苦しみの壮絶な戦いの中で授業をこなされ、講演をされ、和歌を詠み、そしてそれらのすべてを根底で支えた

キリスト教信仰を貫かれた。ご夫君の編まれた記念誌『憐れみの器』を、私はいまも涙なしに読むことができない。このような方を教師として与えられた恵みを、聖学院はいつまでも感謝とともに記憶にとどめるべきであると思う。

須山名保子先生

須山先生は日本語学を専門分野とされる。語学と言えば、門外漢は文法体系などを扱う無味乾燥な学問を連想しがちであるが、須山先生の世界を支えるのは、文章表現とは、内面に自ずと湧き出る思いを他者に伝える方法であるというご認識であり、正しく読み、正しく伝えるという「人間に与えられたすばらしい能力」によって、好ましい自他関係を構築することを目指された。なお先生は、奄美大島の方言のご研究では、その方面の第一人者であると聞いている。

故・西谷博之先生

西谷先生も近代文学を専門分野とされたが、近代文学史の講義では、日本における近代小説に登場する「近代的自我」は、「宗教抜き」それであることを鋭く指摘され、「自我の目覚め」とは、単に新時代の到来がもたらすのではなく、宗教的な心の葛藤を経て初めて生ずるのであるとされた。プロテスタント主義を土台とする本学の日本文化学科に、まさに相応しい講義であったと言えよう。

デイビッド・バーガー先生

聖学院大学には、創設以来、英語を母国語

とされる宣教師が数名在職しておられたが、バーガー先生もそのお一人であった。筆者が、錆びついた英会話に油をさしていただきたいと英語で話しかけても、流暢な日本語が返ってくるのが常であった。授業では、文化と言語の影響関係を主題に、丁寧語、敬語等に現れる人間関係の特質など、言語が内包する社会的なアイデンティティが扱われた。バイリンガルの教師ならでは、グローバルな視点に立つ授業であった。

山下愛子先生

山下先生のご専門は自然科学であったが、創設以来、日本文化学科に所属され、「生活と科学」という主題の下に、科学の歴史や未来への展望を講じられた。レオナルド・ダヴィンチの思想やシュヴァイツァーの『生命への畏敬』なども題材に、自然の中でいかに生きるかを共に考える授業を目指された。また、生活の中で環境問題を考えるために、ケールを栽培して和紙を漉くなどの実習も行われた。

渡邊正人先生

渡邊先生のご専門分野は、民俗学、考古学である。「日本の民俗」と題する講義では、民俗とは社会の営みとともに絶えず新たに生み出されるものである、との認識に立ち、都市民俗など、現代の民俗の諸相に目配りをされつつ、日本の民俗に多様な側面から迫ることを目指された。また、現在チャペルの立っている土地が整地される時、遺跡が出土して作業が中断したことがあったが、上尾市に協力して発掘作業にあたられたのが渡邊先生

であった。

第二に語っておきたいことは、発足当時、新学科の「まとめ役」として、きわめてユニークな方を学科長としてお迎えできたことである。その方とは、元駐バチカン市国大使であった故・荒木忠男先生である。

日本文化にも造詣が深かった荒木先生は、大使としてのお働きの傍ら、俳句を通じてヨーロッパ諸国との交流を深めてこられたという文人でもあった。先生の比較文化の講義は、多くの第一期生の心に残っていることと思う。

大学教員の経験は初めてという先生を、故・標宮子先生と鶴沼が副学科長としてお支えしたが、どのような面倒な取り決め事にも寛大にゴーサインを出して下さるので、かえってこちらが拍子抜けするほどであった。長年にわたって厳しい国際舞台を歩んでこられた方とは思えない、少年のように無邪気で人懐こい先生の笑顔が、今も眼前に彷彿としてくる。個性の強い教員たちが、和やかに一致して事に当たってこられたのは、こうした荒木先生のおおらかさによるところが大きかったと思っている。

ところが予期せぬことに、そして極めて残念なことに、先生は就任後わずか半年で重篤な病を得られ、闘病生活に入られた。加えてドイツ人であられた奥様も、慣れない日本の生活に常に心身の不調を訴えておられたようであった。

荒木先生によれば、「家内の仕事はドレスアップしてパーティーに出ることで、家内は

台所に立ったことなどなかった」そうである。東京の手狭なマンションでの質素なご生活との落差は、余人の想像をはるかに越えた、厳しいものであったことであろう。先生が、自らがご病気に耐えながら奥様を労わられるご様子は、微笑ましいというよりも、痛々しさを感じさせるものであった。駒込の聖学院本部で会合のあった帰途に、駅の近くにあった「世界の食品店」で、ザウアークラウト(ドイツのポピュラーなキャベツの漬物)の瓶詰など、ドイツの食品を買い集めておられたお姿が、今もありありと思い出される。

そして2000年2月11日、奥様に先立って天父のみもとに旅立たれた。

ところで、「砂の足跡」という有名な英詩をご存知の方も多であろう。荒木先生はこの詩にご自分で訳をつけられ、1998年春学期のある日の全学礼拝で披露された。

この詩にはいくつかの訳があるようであるが、私はこの荒木訳が最も好きで、ほとんど暗唱しており、辛い時、苦しい時など、折に触れて口ずさみ、慰めを与えられている。今、ここにその全文を掲げて、荒木先生を偲ぶよすがとしたいと思う。

「砂の足跡」

或る夜わたしは夢を見た
主に従ひて海辺なる
砂浜をゆく夢なりし

狐火のごとまなかひに
来し方うつす走馬燈
終の場面つひの過ぎゆくを

振り返り見て戦あきぬ
わが生涯の最悪の
時の足跡ただひとつ

驚きまどひ主に問へり
思ひ起せば過ぎし日に
汝れを信じて汝れにつ躓き
持てるすべてを捧げしが
そのとき汝れは言ひたりき
如何なる時も吾を守ると
なぜ吾が生の最悪の
時にぞ吾れを見棄てたる

この手を取りて主は言へり
吾が子よ吾が子よさにあらず
かたときたりと棄てざりし
まして不安と苦しみの
極みのときは傍にみし

砂に刻みし足跡の
ただひとつなる処こそ
疑ふなかれ愛し子よ
吾れ汝をば担ひたり

荒木先生は、苦しいご闘病の床で、また最愛の奥様を残して旅立たれるとき、このご自身の訳詩を口ずさんでおられたのではなからうか。あるいは、主に担われて旅立たれたことと信じたい。

先生が教壇に立たれたのはわずか三か月であつたので、卒業生のほとんどは先生を存じ上げないはずである。そこで、このような先生が、日本文化学科の創設当初を共に担って

下さったことをぜひ知っていただきたいと思い、ここにその思い出の一端を記させていただいた次第である。

ちなみにこの文章は、2008年11月のヴェリタス祭期間中、日本文化学科のホームカミングデイで行ったスピーチの原稿に加筆修正したものである。忘れられないのは、ちょうど荒木先生に関することをほぼ語り終えたころ、当時の阿久戸光晴学長が会場に入ってくられ、先ほど、荒木夫人がドイツで逝去されたとの報が入ったと告げられたことである。あまりの偶然に、驚きを越えて一種の畏れを

感じたことが忘れられない。今は天上で、再会を喜び合っておられることと信じて、悲しみを喜びに変えたいと思ったことであった。

聖学院大学創立以来30年、日本文化学科創設からも20年以上が経過した現在、教師の陣容は言うまでもなく、教育内容も大きく変わっていることであろう。しかし、本学科が、プロテスタント主義の土台の上に立てられた日本文化の教育・研究機関として、他校の同系列の学科にはない貴重な特色を発揮していくことを祈り願ってやまない。



卒業式にて

「日本文化学会」の設立



日本文化学科 清水 均

聖学院大学人文学部日本文化学科は、学科が設立された1998年度当初より、前身の「女子聖学院短期大学国語・国文学会」の意思を引き継ぐ形で（それは、「国語・国文学会」の資産を引き継ぐことをも意味する）学会組織を構築することが目指されていた。しかしながら、学科設立にあたり、短期大学に所属していた教員の大学への移籍が1998年度と1999年度の2年間にわたってなされ、学会創設の基盤づくりに多少なりとも時間を要したこともあり、最終的には学科創設初年度に

入学してきた学生が卒業する2001年度を期限とする形で、漸く「聖学院大学日本文化学会」設立の目標を果たすことが出来た。

今ここに、学会設立の経緯とその後の展開を示すいくつかの文書を記録として留めておくことにするが、紙面の都合上、残念ながら限られた文書しか留めることが出来ない。そうした制約の中で、まずは、いかなる目標をもって本学会が設立に至ったのかを示す資料として、「趣意書」を以下に記載することとする。

「聖学院大学日本文化学会」設立についての趣意書

聖学院大学人文学部日本文化学科は、学科創設以来三年を経過し、二〇〇一年度終了時において初めての卒業生を送り出すこととなります。

本学科は「グローバリゼーションの文脈における日本文化」という共通理念のもと、カリキュラムを中心として様々な模索と創意工夫をおこないつつ学生の教育にあたってきましたが、完成年度を間近に控えた今、この共通理念のより一層の具現化を目指し、研究、教育活動の更なる充実を図るべく、学科としての方向性を再確認することが求められています。

そうした観点から、日本文化学科では、長期、短期それぞれの期間設定におけるいくつかの課題を見出すにいたりました。その一つとして、学科創設当初からの目標であった「学会設立」という問題が、早急に実現化が求められる事柄として浮上してきました。私たちはこの課題に対し、在学生の自発的な研究活動の推進を図ること、並びに、卒業生との継続的な交流を行うことを目指し、既存の学会形態を参考にしつつ、以下のような内容の学会を設立することになりました。

(1) 学会発足の時期

- ・二〇〇一年度秋学期

(2) 構成

- ・聖学院大学人文学部日本文化学科専任教員、在学生、卒業生、その他。

(3) 目的

- ・日本文化に関する研究活動を推進するとともに会員相互の親睦を図る。
- ・地域文化の保存と発展等に積極的に関わる。

(4) 事業内容

- ・講演会、研究会の開催。
- ・機関誌、会報、会員名簿などの刊行。
- ・親睦会その他学会の目的を達成するために必要な事業。

(中略)

以上の方針に基づき、この学会が教員、在学生、卒業生の良好な交流をもたらし、本学科の研究と教育のわがを推進するものとなることを強く願うものであります。

二〇〇〇年秋 起草

(清水均)

(注) 学会の運営にあたっては、上にも触れたように「女子聖学院短期大学国語・国文学会」の資産を引き継ぎ、これを基盤として学会設立の準備を進めることとなったが、後には、自動的に学会員を構成することになる学科学生から徴収された「年会費」を「通常会計」とし、短大から引き継いだ資産は「特別会計」として計上されることになった。

「特別会計」は後に設置された「永久会員」の費用と寄附を主な収入源とし、「通常会計」に余裕がある際にはこれを「特別会計」にプールし、逆に、「通常会計」が不足気味の際には「特別会計」からこれを補う形で学会の運営に工夫を凝らすこととした。

「日本文化学会」発足を記念する事業として、「日本文化学会創設記念講演会／総会」(2002年1月16日11:00～12:30)の開催、機関誌「緑聖文化」の刊行(2002年3月14日「創刊準備号」刊行)、「文化探訪ツアー」(飛鳥・京都ツアー)の実施があげられるが、このうち「緑聖文化」は、「女子聖学院短期大学国語・国文学会」が発行していた「緑聖文芸」を引き継ぐ形で創刊された機関誌であった。二つ目の文書として、この「緑聖文化」命名の由来を記した記事を発表しておく。(「緑聖文化・創刊準備号」より抜粋)

誌名『緑聖文化』について

聖学院大学では、現在、校歌に準じる歌として「ミレニアム讃歌」と名づけられた歌が歌われています。これは、1999年3月をもって聖学院大学に改組転換となり、その32年間の教育活動を終息した女子聖学院短期大学の校歌を継承したものです。

(中略)

1970年に当時女子聖学院大学の教授であった浅原六朗の作詞ですが、ここに歌われた「みどりのいのち」、そして「聖き心」は、「手と手をつなぎ」「とこしなえのものを」求めこのキャンパスに集う学生・教員すべてのものとして大切にされ、「緑聖」はこの聖学院上尾キャンパスを象徴する語として用いられて来ました。

女子聖学院短期大学国文科は1968年(開学2年目)に開設され、翌1969年に会員相互の研究と交わりを目的として「国文学会」(後に国語国文学会と改称)を発足させ、第一回の卒業生の巣立ちに合わせて学会誌『緑聖文芸』第一号を発刊しました。その「後書き」に卒業を前にした編集委員の学生の言葉として、「学問に捧げる時間としての二年間は、それは短いものである。我々第一回生はもう卒業を目の前にしている。しかし国文学に親しんだ国文科の卒業生にとって、それは終わりを意味するものではなく、出発を意味するものである。」と記されています。二年間という短い短大生活の中で培われた真摯な学問に対する熱意、そして「緑聖」の名のもとに繋がる誇りとが伺われます。

今、私たち聖学院大学日本文化学科に集う学生・教職員も、この心を生きた伝統として継承すべく、新しく発刊する学会誌を『緑聖文化』と名づけました。(岡田潔)

三つ目の文書としては、本学会における大きな変革を示す事象としての「学生会」の発足に関するものを記載する。本来、この学会は学科教員、在學生、卒業生における「交流の広場」となることを目指していたが、その活動の主体は学科所属の在學生が担うことが必然であった。そうした「必然性」を可視化

するために、「学生会」という組織を設立することになった。

以下は学会誌「緑聖文化第10号」(2012年3月)に記された代表者による文章である。この文章は「学生会」発足時の熱度が伝わってくるものとして貴重な資料となるであろう。

「日本文化学会学生会の発足」

2011年7月、日本文化学会総会において、同学会の学生組織として従来の「学生委員会」から「学生会」へと改編しました。規約も改訂され、従来よりも学生の主体的な活動を目的と

する組織としてリスタートを切った最初の年、わたしは執行部部長としてこの学生会に携わってきました。

学生会の発足に際して、「日本文化学科の学生が学年を越えた交流を楽しむことを第一義とし、従来よりも幅広く自主的に活動を行う」ことを念頭に活動目標を設定し、これを履行すべく、さまざまな活動を実施して参りました。

最初に取り組んだことは、組織編成の見直しでした。全体の調整役としての「執行部」、年間のさまざまな活動案を企画する「企画部」、会報の発行等の広報活動を行う「広報部」、ヴェリタス祭参加を計画する「ヴェリタス祭部」、そして「会計部」の計5つの部署を設け、各部署に長一人、副長二人を配置しました。そしてこれらの部署はまとめ役として機能させ、個々の行事については学生会全体で運営するようにしました。また、部署ごとの連携を図るため、執行部では週に一度定例会を開催し、各部署の連絡や報告を行いました。この定例会の導入により、相互の綿密な交流が実現できたと思います。定例会は秋学期からは隔週の開催とし、部署会議や学年合同会議を適宜設けることで、部署内及び学年間の連携強化に努めました。

(中略)

本年度の活動を振り返ると、学生会発足の年ということもあり、新しいことを取り入れていった一方まだまだ旧式の枠組みにとらわれていた部分があったことも否めません。しかし、来年度につながる新しい学生会の在り方を後輩達にみせることができたかと思います。来年度からの学生会がさらに発展することを期待しています。

(109J068 蕎麥田美穂)

学会の活動はこのほかにも「会報」「ニューズレター」の刊行、「一日探訪ツアー」「沖縄探訪ツアー」「観劇会」「狂言祭」の開催、ヴェリタス祭への参加等々多岐にわたっており、ここにその全てを記録することは到底出来ない。

ここでは、これまでに在籍されていた日本文化学科の専任の先生方のお名前を刻んでおく。これらの先生方は、様々な形で「日本文化学会」の設立から現在までの運営に、多大なる寄与をされてこられた方々であることは言うまでもない。

荒木忠男（初代学科長）、鷗沼裕子（第二代学科長）、標宮子（第三代学科長）、黒木章（第四代学科長）、須山名保子、山下愛子、島村馨、佐藤克哉、川崎司、渡邊正人、D・バーガー、岡田潔、西谷博之、井上伸子、清水均（第六代学科長後に人文学部長）、川口さち子、村松晋（第七代学科長）、東島誠、小林茂之、熊谷芳郎、濱田寛、若松昭子、小池茂子、河島茂生、柳田洋夫、清水正之（第五代学科長後に人文学部長、学長）、上野麻美、黒崎佐仁子、菊池有希、横山寿生理、木下綾子、松井慎一郎

【資料】日本文化学会主催 講演会 / 公演会 開催記録 (タイトル等不明のものを含む)

年度	講演者 / 公演者	タイトル
2001	日本文化学会創設記念講演会	
	鳥飼久美子 (立教大学教授)	多文化時代のことばと文化を考える (2002年1月16日)
2002	市川亀次郎 (歌舞伎役者)	不明 (5月1日)
	サイニミヤ太鼓	地域の和太鼓 (11月27日)
2003	平山 正美	日本人の死生観
	川田 禮子	琉球舞踊の世界
	渡邊 正人	聖学院大学チャペル建築用地の移籍発掘調査報告
2004	藤掛 明	裏返す・察する・折り合いをつける ―心理臨床家として体験した日本文化―
	鶴沼 裕子	鶴沼裕子先生最終講義「信仰者同士の共存を求めて ―日本キリスト教史における「寛容」のかたち―」(1月19日)
	岡田 潔	岡田潔先生最終講義「『枕草子』第二百八十四段「雪のいと高う降りたるを」を読む」(1月12日)
2005	扇田 昭彦	ミュージカルは世界を映す鏡
2006	北原 糸子	災害と社会 近代以前と以後 ―なにが変わったか― (12月6日)
2007	嶋本 静子 (香り仕事)	香りで読み解く源氏物語
	菅 聡子	樋口一葉の生 ―〈女性作家〉として生きるということ (5月16日)
2008	人文学部日本文化学科創立 10 周年記念事業	
	<p>○日本文化学科創設 10 周年記念講演</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本文化学科創設十周年に寄せて 鶴沼裕子 ・韓国の日本語研究におけるコーパスの利用について 韓国啓明大学校 張元哉 (2008年11月3日 聖学院大学日本文化学科ホームカミングデーの記念講演) ・キリスト教信仰と文学 ―西洋と日本― 山形和美 (2008年10月22日 日本文化学科主催本学創立 20 周年記念講演) <p>○日本文化学科創設 10 周年記念・大学創立 20 周年記念音楽会 「宮原発! 音楽文化」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元ミュージシャンによる JAZZ と沖縄三線 甲本奈保美・加藤清・宮城芳美・秋山祥克 (2008年11月3日 チャペル) ・地元ミュージシャンによる沖縄舞踊 小西睦子&うるま会メンバー (2008年11月4日 チャペル) 	
	なががわちひろ (絵本作家)	おいしい絵本のいただき方 (6月4日)
	片柳 榮一	魂のことをする (12月10日)
	和田光司・東島誠	ウィーン音楽紀行 (12月17日)

年度	講演者 / 公演者	タイトル
2009	染野 真樹 (学科一期生)	教師を目指した頃の私、教師となった今の私 (6月3日)
2010	相沢 沙呼 (作家)	自己表現の方法論 (6月2日)
	村松 晋	文学のふるさと、信仰のふるさと —近代日本精神史への一視角 (12月8日)
2011	東島 誠	吉宗の時代の災害ボランティア〈特別版〉(7月6日)
	熊谷 芳郎	戦艦大和の上で展開された討論から (1月11日)
2012	黒木 章	日清戦争をめぐる日本平和会の分裂 (6月6日)
	本郷 和人	清盛が目指した国づくり (10月3日)
2013	嶋本 静子	香りと文学と私 (6月5日)
2014	ヒダノ修一 (和太鼓奏者)	ヒダノ修一の世界 (6月4日)
	村松 晋	ある読書経験 —3冊の本との出会い— (10月8日)
	黒木 章	黒木章先生最終講義「大岡昇平の『野火』を読む」(1月14日)
2015	柳田 洋夫	小山鼎浦と『久遠の基督』 —〈自我〉と〈超越〉をめぐる—断章— (6月3日)
	濱田 寛	源為憲『世俗諺文』の世界 (6月17日)
	川崎 司	川崎司先生最終講義「透谷・愛山・明石・坎堂 —明治の青春—」 (1月13日)
2016	清水 均	大学教育と「文化」(6月1日)
2018	横山寿世理	日文学生のディズニーゼーション (6月13日)

ほっこりとした時の流れの中で



村山 順吉

聖学院大学人文学部児童学科（当時）は、大学の開学から4年後の1992年に、女子聖学院短期大学児童教育学科を引き継ぐ形で始まりました。それまで女子聖短大の教員だった私は、聖大開学以来一般教養の「音楽」も担当していましたが、1992年度は在外研修に出ているため、正式には1993年に着任しました。とは言いまでも、それまでの女子聖短大の活動に開学当初から合流する形で始まった聖歌隊と聖学院シンフォニックウィンドオーケストラ（略称SSWO：聖学院大学フィルハーモニー管弦楽団（SPO）の前身）の顧問と常任指揮者を務めていましたので、全学的に多くの学生たちと知り合えたことは、今思い出しても非常に幸いなことでした。

児童学科開設当時に設置されていたのは幼稚園教員養成課程だけで、保育士養成課程、小学校教員養成課程の設置はもう少し後のことでした。定員は1学年50名、他大学の同様の課程を有する学科に男子学生を受け入れるところが非常に少なかったことも影響してか、全体の割合では女子学生が多いものの、我々の予想を超えた多くの男子学生も入学してきました。出身も首都圏近郊だけでなく北は北海道、南は九州や沖縄からも入学してきました。

学生たちは男女を問わず個性的でバイタリティーに溢れ、誠実で愉快な人たちでした。総じて授業態度も非常に良く、学業においてもキャンパスライフにおいても積極的でした。当時は児童学の権威で、後にお茶の水女子大学の学長に就任された本田和子（ほんだますこ）先生を中心に、実に生き活きとした学科運営がなされ、学生も教員も共に学びを深める本質的な楽しさを味わっていました。

一方、学科の学生たちは学業以外の宗教委員会（現ボランティア・アソシエーション（グレイス））をはじめとする様々な委員会やクラブの活動にも積極的に参加し、リーダー的な役割も担っていました。大学の主催する行事も、彼らの大きな支えがあってこそ、スムーズに進行していました。

キャンパスにおける一日の学業や、委員会、クラブ等の活動が終わり校舎も闇に包まれた頃、それからがまた活気に満ちた時間となるのです。

かつてJR宮原駅西口にロータリーや広場が無かった頃、とても美味しいパスタやコーヒーが出てくる不思議なお店が、改札口に向かう階段の下にありました。キャンパスを後にした我々はそこに集結し、学生たちと共に閉店まで熱く語り合ったものでした。時には

聖大関係者で貸切状態になり、お店の営業にも差し障りが出ないか心配すると、マスターがこれまた良い人で、嘘か真か「お客さんが沢山入っても料理が追いつかないから居ていいよ」と言ってくださったものでした。学生たちはそれに甘え、聖歌隊などは自主練習までそこでさせていただいたこともありました。

西口が開発されその店が無くなると、今度は近くのファミレスに集結したものです。ある年度は、近くにある複数のファミレス、中華料理店、弁当店、ケーキ店それぞれどこに行っても児童学科で近くに下宿している学生がアルバイトに入っており、店長にご挨拶をさせていただいたこともありました。すると、

時には唐揚げが1個多かったりケーキがサービスされたりと、何もそれを目当てに行くわけでは無いのですが、夜の宮原の街全体が、聖大の雰囲気と融合した温かさに包まれて、ほっこりしたものでした。このような、学科の学生たちの学外で働く姿に触れられたことは、学科の運営に深みを増すことにも繋がっていました。

あれからもう何年経つのでしょうか、きっと今も学生たちは、地域との温かい繋がりに支えられながら、学問においても生活においても力を付けて、さらに人として成長し続けていることでしょう。そのことを、私は心から嬉しく思っています。

人間福祉学科の20年



古谷野 亘

I. 人間福祉学科開設の趣旨

人間福祉学科は2018年3月に開設満20年を迎えた。同年3月21日（水・休）には、季節外れの雪のなか184人の卒業生と家族、在学生、現・元教員が集い、「人間福祉学科開設20周年記念パーティ」が盛大に催された。同月までの人間福祉学科の卒業生は累計1,735人、4月1日現在の2～4年次在学生は157人であった。

人間福祉学科は、1998年4月に人文学部の中に開設され、2004年4月には児童学科とともに人文学部から独立して、人間福祉学部人間福祉学科となった。入学定員は100人であった。

学科の名称からは、もっぱら社会福祉の領域で働く専門職を養成するための学科であると思われがちで、そのような志望をもって入学してくる学生が多かった。学科開設の前年4月に文部省（当時）に提出した設置認可申請書には、「人間福祉学科は、建学の精神・理念と教育の伝統を踏まえ、質の高い福祉社会の形成に貢献できる『精神ある専門人』としての福祉人材の養成に力を入れる」と記されていた。そして実際に、人間福祉学科には社会福祉士と精神保健福祉士の国家試験受験資格を取得するための課程が設けられ、高等

学校福祉科教員免許を取得するための課程も作られた。しかし、聖学院大学人間福祉学科の特色は、福祉領域で働く専門職を養成するためだけの学科として構想されていなかったことにある。

設置認可申請書の「設置の趣旨と必要性」には次のように記されていた。

1. 人間福祉学科に課された課題は、福祉文化の担い手である「福祉人」の養成である。福祉人は現代社会を福祉社会へと膨らますパン種であって、そのような人の必要性は、社会福祉という特定の分野に狭く限定されるべきではない。
2. しかし人間福祉学科は、福祉文化の担い手としての基礎的教養を備え、社会福祉の現場で働く専門職の養成という具体的焦点をも併せもっている。

社会のさまざまな場面で福祉社会の形成に寄与する「福祉人」を養成するのが主であって、その中から国家資格をもつ福祉の専門職が生まれてくるというのが学科の基本構想だったのである。これは、資格取得に特化した他大学の社会福祉学科にはない聖学院大学人間福祉学科の特色であったといつてよい。

Ⅱ. 人間福祉学科の資格課程とゼロ免課程

人間福祉学科には「人間福祉総論」という1年次の必修科目がある。これは学科開設の当時からずっと続いている初年次教育の科目であったが、その2015年度の授業で配布したプリントで、筆者は次のように人間福祉学科を紹介した。

人間福祉学科では福祉の専門職である社会福祉士・精神保健福祉士の養成を行っているが、すべての学生が福祉の専門職になるわけではなく、福祉関係の職場に就職するわけでもない。学科の設置準備の段階から、専門職の養成もする学科を意図していたのである。当時の文部省の指示で全員分の実習先を名目上確保したが、実習に行き国家試験受験資格を得るのは、どんなに多くても5割を超えることはないと思っていた。この予想は今日まで外れたことがない。

福祉の専門職を養成している他の大学では、入学者全員に国家試験受験資格を与えるようにしているところが少なくない。そのような大学では、カリキュラムの編成や学年運営は楽だし、国家試験の合格率や福祉関係の職場への就職率など教育の成果を目に見えるかたちで示すのも容易である。しかし、実際の福祉の職場など知らずに入学してくる学生にとっては酷な面もある。自分が向いていないとわかっていても福祉の勉強をし続けるか、退学するかしからないからだ。

私が以前勤めていた北海道の大学もそのようなところだった。ゼミ生の一人は同学年の

だれよりも早く就職先を決めることができた。ところが、多くの教員から落ちこぼれのように言われてしまった。福祉関係の職場ではなく、コンピュータ・ソフトの会社を選んだからだった。彼女は特にパソコンが得意だったわけではない。会社も彼女にソフトを作らせようとしたのではない。ソフトを作るのはSEの仕事。会社が彼女に期待したのは通訳のような仕事だった。パソコンは障害者や高齢者にとって便利なコミュニケーションの手段である。しかし、顧客である障害者や高齢者とSEの間では意思の疎通ができないことが多い。そこで、福祉の勉強をした彼女が、通訳として求められたのだった。

本人は「わたし落ちこぼれちゃった」と言って笑っていたが、聖学院大学の人間福祉学科であったなら、落ちこぼれなどと言われるはずがない。むしろ、最適の職場を選んだと褒められることだろう。人と社会、福祉の勉強をした人が働くホテルは、だれにとっても心地よいホテルになるだろうし、スーパーはだれにとっても利用しやすいスーパーになるだろう。人間福祉学科では、そのような働き人を養成したいと考えている。

東日本大震災が起こったとき、卒業生の一人は郡山市で在宅介護サービスの事業所をまかされていた。余震とライフラインの寸断、物資の不足に見舞われ、さらに原発事故により高い放射線量にさらされた。原発周辺から避難してきた人も多く、断水で入浴できない高齢者も大勢いた。介護サービスへの需要は非常に多くなり、そのすべてには応えきれなかった。そのようななかで彼は、自分も被災

者であったにもかかわらず、「我々が撤退してしまったら高齢者の生活は成り立たない。継続してサービスをしていくことが介護事業者に与えられた使命だ」と踏みとどまり、困難なかでサービスを提供し続けた。その後、郡山市内で最初の温泉旅館を利用したデイサービス事業所を立ち上げ、原発周辺から避難してきた高齢者の閉じこもり予防のためにも活用しようとしている。彼は、「大学での経験は本当に役立っています。1期生として、無いものは自ら作り上げる精神を鍛えることができました」と語ってくれた。

震災の年、大学では卒業式もグラデュエーションパーティも中止になり、その年に卒業した107W生は皆で卒業を祝う機会を失った。そのような後輩が気の毒だと卒業生の有志が集まって、6月に「107W生の卒業を祝う会」を開いてくれた。1期生の98W生から106W生まで、学年ごとに数人の実行委員を決めて、仲間を呼び集め、準備をし、割高の会費を払って参加してくれた。大学の職員になっていた卒業生は献身的に動いてくれた。教員はもちろん超割高の会費を払い、カンパをして参加した。人間福祉学科だからできたことだと思わずにはいられない。

今でも、人間福祉学科という学科の特色をよく表した文書であったと思っている。

しかし、「専門職の養成もする学科」を作るのは容易でない。資格取得のためのカリキュラムは法令によって定められているので、その編成はきわめて容易であるが、それ以外の、資格取得をめざさない学生、あるいは

は資格取得をやめた学生のための学修課程（いわゆるゼロ免課程）を整備するのは難しい。人間福祉学科の歴史は、ゼロ免課程をいかに整備し、充実させるかを考え続けた歴史でもあった。学科開設の当初は、医学・生物学や福祉工学の教員を迎え、それらの領域の教科を揃えることによってゼロ免課程のカリキュラムの充実をはかった。ゼロ免課程のなかで心理学は最初から主要な専攻領域のひとつであったが、学内外からの要望に応じて徐々にその比重を増し、ゼロ免課程の中心となっていく。

Ⅲ. 人間福祉学科から心理福祉学科へ

人間福祉学科が開設された1998年は、介護保険制度の開始（2000年4月）を間近に控え、福祉・介護に世間の関心が集まった時期であった。そのため、開設後数年間は多くの入学希望者を得ることができた。

いずれの大学でも同じことであるが、新設学科の1期生は、制度が整っていないための苦労も多いかわりに、在学中に新しい取り組みをする機会にも恵まれる特別な位置にある。たとえば、人間福祉学科の1期生が始めたことのひとつに「ボランティア掲示板」がある。ボランティア活動をしたい学生とボランティアを必要とする人や施設・機関をつなぐ仕組みであった。ボランティア掲示板は、その後、学友会総務委員会が運営する時期を経て、新設された大学のボランティア活動支援センターに引き継がれ、聖学院大学の特色のひとつである学生ボランティアの伝統を培うことになった。

しかし、福祉・介護に人々の関心が集まる時期は長くは続かなかった。むしろ福祉・介護現場の労働条件の厳しさが過度に喧伝され、さらに18歳人口の急減にも見舞われて、学生募集は低迷せざるをえなくなった。2012年には、人間福祉学部こども心理学科の開設にあわせて入学定員を80人に減じたが、学生募集の困難はとどまることがなかった。さらに、人間福祉学科のゼロ免課程の柱である心理学とこども心理学科の「心理学」がバッティングし、こども心理学科の「こども」と児童学科の「児童」が重なって、人間福祉学部の3学科は、18歳人口の減少のもと、三つどもえの不振にさらされることになってしまった。

そのような中であって、2018年4月に大規模な学部学科の改変が行われた。人間福祉学部児童学科は人文学部に移って人文学部児

童学科となり、人間福祉学科はこども心理学科と統合され、心理福祉学部心理福祉学科として再出発することになった。これにともない人間福祉学科への新入生受け入れは停止され、在学生の卒業とともに、人間福祉学科はその歴史を閉じることになる。

人間福祉学科の開設にかかわり、その後の20年を人間福祉学科で過ごした身にとって寂しいこと、悲しいことであるのは言うまでもない。しかし、人間福祉学科の歴史を通して培われた伝統は、新設された心理福祉学部心理福祉学科に伝えられ、生き続けることを信じたい。福祉社会形成のパン種となる福祉人の養成はこれからも続き、心理学に裏打ちされた人間理解とあわせて、「神を仰ぎ 人に仕う」働き人が次々と世に出て行くことを念願している。

こども心理学科の設立の経緯と歴史



窪寺 俊之

聖学院大学に「こども心理学科」が出来たのは、当時学長だった阿久戸光晴先生の思いが強くありました。学科誕生のきっかけは、2011.3.11に起きた東日本大震災です。東北地方の東沿岸の町村は地震、津波、原子力発電所の崩壊で壊滅的打撃を受けました。人々の生活は根底から崩れ、その被害は想像を超えました。人々は、住みなれた家を離れて避難生活を強いられて、その苦しみは今でも続いています。こども心理学科はその悲惨な苦しみの中から生まれた学科です。

阿久戸元学長はキリスト教大学として、この国難の時、大学としてできることをしなくてはならないと示されたと想像します。強い使命感だったと想像します。キリスト教の精神に立って何ができるかを考えた末に、子供達の心のケアをする学科を作る発想を与えられたと想像します。

私に初代のこども心理学科長を引き受けるように打診があったのは、すでに理事会の承認を通った後だったようです。阿久戸先生から電話があり、すでに決まっているとわかって戸惑いました。しかし、その瞬間、阪神淡路大震災での私の経験が頭を横切りました。私の家も被害を受けました。それ以上に当時務めていた大学の学生や教職員が何名も亡く

なりました。また学生の中には、家族を失い取り残された苦しみを負い、その傷と苦しから何年も解放されず今でも痛みを抱えています。阪神淡路大震災後、沢山の方々が手を差し伸べて助けてくださいました。物質的にも精神的にも支えが必要でした。震災のことが頭に浮かんだ瞬間に私は阿久戸先生の申し出をお引き受けすることにしました。私ができることがあればしたいと思います。

すでにこども心理学科の大枠は決まっており、担当教員も決まっていました。心理系の教員が中心となり傷付いた子供たちへの心のケアができる体制になっていました。特に私の補佐をしてくださるベテランの金谷京子先生が学内の諸用事を引き受けてくださいました。2年目からは中村磐男先生、3、4年目は和田雅史先生が助けてくださいました。徐々に学科としての体制が整いました。

こども心理学科が目指す教育は、自然災害で家族、友人、学校を奪われた子供たちへの心のケアができる人材養成です。こども心理学科の教員同士でも目指す教育方針について話し合う機会を持ちました。一般的大学とは異なる理念を模索しました。一般的には、高度な知識と技術を身につけて社会に出て成功

する強い人材が求められるものでしょう。しかし、私たちは社会の勝者になることが重要だとは考えませんでした。私たちの学科が目指すのは、災害や不幸を負いながら生きる人々に寄り添い一緒に生きることを願うような若者を育てたいと考えました。

具体的には、「優しさ、豊かな感性、信じる心」を持つ人材の養成です。大学教育で「優しさ」を教育目標に掲げることは多くはないと思います。高度な知識と技術、豊かな教養を身につけ、その上に資格をとることが大学の目標になっていることが多いでしょう。しかし、職業人になる前に、人間としての生き方を考えることが重要だと考えました。弱い人や傷ついた人の心に寄り添うことのできる人です。実は、弱い人や傷ついた人の心に寄り添うことは、弱い人には出来ないのです。人としての本当の強さがある人が、人に優しくできる人です。内的な強さを持つ人が人への援助者になれるのです。

第2は、「豊かな感性」を持つ若者を育てたいと考えました。人の心のわかる人になるためです。傷ついた人の心が分かるには感性が必要です。どんなことで悩み、傷つき、何を必要としているのか気づける人です。感性を磨くことで人の心を知るだけではなく、自分自身の正直な気持ちを知り、かつそれを大切にできるようになることを願いました。そこに学生が自立する本当の道があると考えました。

第3は「信じる心」を持つ若者を育てたいと考えました。聖学院大学はキリスト教主義大学ですから、キリスト教信仰を大切にしてい

ることは当然です。しかし、「信ずる心」とは、神様を信ずることだけではなく、人を信頼し、自分を信ずることのできる心のことです。神様を信ずることは信仰者には大切ですが、そうでない人には無関係です。しかし、人を信頼する心は全ての人に大切なことです。震災で全てを失った人は人への信頼や人生自身への自信を失っている人が多いと感じます。どうしてこんなことが私自身の身に起きるのか、人生が分からなくなったなどと嘆く人が多く居ます。そして生きる力がなくなると自らの命を絶つ人さえ出てきます。「信ずる心」とは、人生に希望を見つける心です。たとえ、どんなことが起きても現実の向こうに光を見つけ希望を持って生きる力になるものです。将来に期待を持つ積極性が重要です。

こども心理学科が立ち上がり、集まった第1期生に私は期待しました。私は「スピリチュアルケア入門」を担当しました。私はできるだけ個人的接触を持つことに務めました。教室では学生に問いかけ、返って来た一言一言を大切に、その言葉に秘められた意味に注目して、時間を取りながら学生と一緒に考えるようにしました。最初は時間もかかり、授業の仕方に戸惑う学生も出ましたが、どんな小さなことでも自分の考え、意見、感想がしっかりと受け止められることに気づいた学生は、心を開き自分のことを話してくれました。自分自身の感じることや考えることを大切に受け止めるようにしていると、学生が変化していくことが見て取れました。

こんな学生さんもいました。私の研究室を

訪ねてきて相談したいと言いました。妹が自殺したいと言っていると話し出しました。話を聴いていると、自分も死にたいと思ったことがあります、妹との気持ちがわかると言いました。妹は寂しいのですといい、話を聴いてやりますと言いました。それがきっかけで親しくなり、色々と自分のことを話してくれました。彼女が抱える大きな問題も話すことで、自由になれるのが私には感じられました。人

の話を聴くこと、人を信ずることの大切さを教えられる体験でした。

こども心理学科は再編成されて今はなくなりましたが、その教育目標は、聖学院大学が求める目標でもあると感じます。全ての学生は愛されているということを知り、神と人に仕える人になることを目指す教育が聖学院大学の教育目標だと思っています。

聖学院大学創立 30 周年 おめでとうございます！



聖学院大学後援会 会長 古屋 博規

1988年開学の年、日本全国にも数多くの出来事がありました。青森と函館を結ぶ青函連絡船が終了し、青函トンネルの開通。東北・上越新幹線網が広がり、瀬戸大橋が開通、鉄道・道路幹線網が整備されました。映画「となりのトトロ」公開。プロ野球も、福岡ダイエーホークスが起こされ、また、コミュニティFMが開局しました。発展の勢いが伝わって来る年に、聖学院大学の開学を迎えました。

創立30周年の、聖学院大学2018年度後援会は、41名の役員でスタート致しました。役員それぞれのキャリアも、後援会の役割に、まるでiPS細胞の様に適応下さっています。

遡ると、これまでの阿久戸光晴名誉会長、吉田武人名誉役員はじめ、監査、理事に至るまで、30年間の道程（みちのり）には、目を見張るものがありました。開学当初に、聖学院大学保証人会会報が発刊され、柴崎忠彦会長の開学挨拶の中で、後援会援助金として、チャペル建設、テニスコート、奨学金、図書館、学友会、同窓会、卒業対策の援助、企業との懇談会援助、教育改善のための設備の充実などを担って、沢山の事柄に尽力された事が記録されています。その後、父母と教職員との心のかけ橋として、聖信会会報が発刊され、会長・石橋教弘（当時）氏は、第一回卒業生

を送り出すにあたり、大学の「神を仰ぎ人に仕う」の建学の精神が実社会で発揮されることを願いつつ、これまでの保証人会から聖信会、聖信会から1994年には、後援会としての引継ぎをされました。吉田武人前会長は、1996年から役員として、又、1998年から会長の大任をお引き受け下さり、チャペル建設への協力、スクールバスの運行、学生食堂の充実拡大へと続きます。1996年度以来、休刊していた後援会会報も、2001年の13号から再発刊し、現在まで続けられています。

俳人正岡子規の句になぞらえ、『たえず人いこう夏野の石一つ』と、かつて富士見町教会の島村亀鶴牧師は、句に込められた思いを、「人生に疲れた人、道に迷った人が、この石に来て憩うのである。」と語っていました。私たち後援会も、聖学院の礎に連なる学生・教職員・保護者の方々が憩う石であり続けたいと願っています。

1989年4月1日（1988年4月開学）聖学院大学保証人会会報で、初代学長・金井信一郎先生は、「保証人会は教育推進の戦力」「本学の開学と時を同じくして保証人会が発足されたことは、本学教育遂行にとって大きな戦力が与えられ、その活動に期待を寄せています。会長、副会長が高校までのPTAの教育

的協力体制を引き継いで下さったこと、小規模大学の利点をフルに活かすための手段の一つであり、大学と家庭の協力であります」と。また、当時の聖学院理事長・大木英夫先生は「大学を支えるご父母の見識」として、「常に変わることなく、大学の働きを支えようとしてこられました。」と評価下さっています。

発行されました保証人会会報の創刊号一面には、石塚会長の、「[「大学づくりの傍観者にならぬ」聖学院大学保証人会は、先生方と学生が、新しい大学の歴史を一つ一つ造り上げて行く過程で、学生の後見人でもある。保証人会も歴史と創造の傍観者になってはいけません。』と呼び掛けておられます。「中学や高校ならともかく、大学になぜ、このような会が必要なのか、という疑問をもたれるかもしれません。…子供を預けた大学のことを…大学と家庭とが密接な連絡をとることは大切なことです。」ここに込められた思いは、30年を経た今でも変わりません。「学長を囲む会」、「ヴェリタス祭」、「企業との就職懇談会」、「聖書を学ぶ会・点火祭」を支えつつ、30年を迎えています。

役員の方達は、好きな人たちが集まる趣味の仲間入りではなく、後援会の働きのために、ひと汗もふた汗も流しているのです。誠に感謝にたえません。

吉田前会長は、『後援会報 50号に寄せて』『1996年の次男入学時の役員募集のハガキに「他に居ないなら受けても良い」という欄に○印を付けて消極的な意思表示のつもりが、三男が入学したこともあり、以来20年も関わらせていただきました。当時、大学と後援会の課題はチャペル建設でした』と、学生と共に列席される保護者に熱き思いを伝えて下さり、今では、数多くの役員が、大学づくりの傍観者にならぬ後援会の働きに参加して下さっています。

1883年に、ガルスト宣教師が来日し、聖学院大学に種蒔かれたことが礎となって、ガルスト奨学金制度が生まれました。ガルスト奨学金授与式が後援会に託されています。現在も授与される優秀な学生がおられます。

学長を囲む会も、胸襟を開いて語り合い、学生と同じく学び合いが続いています。これからも、後援会は、学生と教職員のそれぞれの課題・目標に向かって備えて参りたいと願っています。

2020年はオリンピックの年。聖学院大学チャペルにパイプオルガンが奉献される年。後援会はこの事業に一同心を込めています。羊を呼び集めるオルガンの音色が大きく響きわたります様に。

聖学院大学の発展を心よりお祈り致します。

聖学院大学での学び



聖学院大学同窓会 会長 坂村 哲也

私は2002年に政治経済学科を卒業し、2009年11月より第4代 聖学院大学同窓会会長に就任しました。次回の改選まで果たすとなると約10年の間、同窓会長としてご奉仕させていただいたこととなります。同窓会活動は役員一同、それぞれの仕事の合間に集まりながらのご奉仕です。中々都合がつかずに話し合うことも難しく、意見がまとまらない日々が続きましたが、よくここまでみんなでやって来られたなというのが今の心境です。特に、前回の同窓会設立20周年記念事業の時は、夜通し準備を行ったことを鮮明に記憶しています。やはり母校が好きなのだなと、改めて思われました。

聖学院大学での学びは私の人生に良い意味で影響をたくさん与えてくれました。まずはキリスト教との出会い、そして教会への訪問です。キリスト教に触れる機会がそれまで私にはありませんでした。その教えは私にとっては衝撃でした。自分と関わりのない人のためにお祈りを行うのです。他人のために祈るとは大げさですが、仕事やその他のどんな時でも他人への配慮を考えながら行動するようになり、それを対価を求めるのではなく、ただただその人のことを考えた上で行動すると、なぜか物事がうまくいきました。自然と

評価もされるのです。そして、もう一つ学んだことは、流行の学問だけを学ぶのではなく、人生の中でいつまでも必要とされる能力を養うことの重要性です。言い換えると、本当に大切なものが何かを理解し、それらを会得し社会のために役立てることの大切さです。最近のトレンドは数年で終わりますが、どんな時代でも大切なものを見極め身に付ける能力、それを聖学院大学の4年間で学びました。

私は聖学院大学を卒業したことを心から誇りに思っています。卒業生や在学生の皆様には、同じように是非とも誇りを感じて欲しいと思います。そして、先生方や職員の皆様におかれましては、聖学院大学でのお働きに感謝しつつ、これからも良き教育の場を学生にご提供していただければ幸いです。私たち卒業生もできる限りの奉仕はさせていただきます。卒業生の活躍による大学の知名度の向上や在学生への就職支援等を行うことが私たち同窓会の役目であると思っています。大学が創立30周年を迎えることに、「もう30年」なのか「まだ30年」なのか私にはわかりませんが、一人の卒業生としてはいつまでも帰る場所があり、在学生や卒業生、先生方の活躍等、母校の良いニュースをいつでも耳にできることを、これからも願っております。

同窓会のあゆみ



聖学院大学同窓会は、最初の卒業式が行われた後、一年余りを経て、1993年2月に設立された。発足から25年を迎えた同窓会の歴史を、三つの時期に区分して振り返ってみたい。

・黎明期

聖学院大学の第1期生は1992年3月に卒業したが、卒業生を送り出した当初は、独立した同窓会組織を持たなかった。その後、卒業生有志による同窓会設立準備委員会が結成され、第2期生の卒業を目前に控えた1993年2月20日、東京YMCAホテル308号室において、同窓会の設立総会が開催された。会則の制定や役員を選出等が行われ、この日より組織的な同窓会活動が開始された。またこの時期、役員も多くは新社会人ということもあり、同窓会活動が軌道に乗るまでの期間、大学事務局を中心とした教職員が伴走者として活動を支援していた時期でもあった。

1996年2月には、会員相互の親睦を深めるための一助として、同窓会名簿（冊子版）が発行された。しかしながら、その後2003年5月に成立した個人情報保護法の施行に伴って、会員情報を把握したり、個人情報を印刷物として編集・発行したりすることは極めて困難な作業となった。ソーシャルメディアの普及といった時代の流れと相まって、改訂版については継続的に発行することが難し

いまも現在に至っている。

・成長期

1999年11月、主として内部統制環境の確立と機動力確保の観点から、同窓会会則の全面改正が行われ、組織の再構築が図られた。この組織再編を経て、本格的な同窓会活動が開始された。同窓会事務局が開設され、5号館（現在のディスプレイ館）3階に同窓会室が設置された。同窓会室が整備されたことにより、定例役員会の開催や会計帳簿の保管、業者との折衝・調整などを行う際、柔軟な対応が可能となった。また同窓会室には、運営補助として、パートタイマーの職員が週に数日、常駐するようになった。

2001年7月、長期にわたり途絶えていた同窓会報が発行され、その後は春と秋の年2回、定期的に刊行されるようになった。内容については、同窓生の動向や母校の現況など、同窓生と大学や在学生とのつながり、また同窓生同士のつながりを確認し合うことができるよう、工夫が凝らされていた。なお編集上の特色として、春号については同窓会入会記念号と位置付けて同窓会の新入会員となる学部卒業生に配布、秋号についてはヴェリタス祭の開催と同時期に行われる通常総会の開催告知号として全会員に向けて郵送配布、とすることでそれぞれの読者層を明確化し、紙面構成に変化をつけている。

2002年11月には、念願であった公式ウェブサイト「CROSS Point」の運用が始まった。紙媒体の同窓会報には紙面の都合上掲載スペースに限りがあるので、掲載し切れなかった写真やインタビューの全文など、紙面連動型の記事を中心に掲載するとともに、これまで郵送でのみ受け付けてきた住所・氏名・勤務先などの変更手続きや近況報告などが、ホームページ上からも行えるようになった。なお当初は固定コンテンツが中心だったが、運用開始から1年を経過した頃、コンテンツの更新頻度を上げるため、学内情報の取材と編集、ホームページへの掲載などについてはNPO法人「コミュニティ活動支援センター」に依頼することとなった。その結果、同窓会事務局の月次活動報告と併せて、大学の近況がキャンパスレポートとしてリアルタイムで発信されるようになった。またこの時期、同窓会の視覚的なイメージを統一するため、ウェブサイトや印刷媒体など、主として外部に向けた同窓会の愛称を「CROSS Point」と定め、公式ロゴマークを制定している。

2003年11月1日（土）には、『『再開』～あなたは今、何をしていますか？～』をテーマに、同窓会設立10周年を記念したパーティーが、東京全日空ホテル（現・ANAインターコンチネンタルホテル東京）の地下1階ホール「プロミネンス」において、通常総会と併せて開催された。

・成熟期

2003年11月に開催された通常総会において、任期満了に伴う役員の変更があり、役員

構成が大きく変化した。役員の世界交代が進んだことにより、大学との協力体制がより深まるとともに、同窓会活動は拡がりを増していった。

2004年4月17日（土）～18日（日）には、長野県諏訪郡原村の「岩つきペンション」において、第1回役員会合宿が開催された。この合宿は、毎月の定例役員会において審議時間が十分確保できないまま審議未了となってしまう議案をすくい上げるために企画された。1泊2日の限られた日程ではあったが、現在同窓会が抱えている課題、これから展開していく事業、新規企画など、同窓会の中長期構想の策定とその具現化に特化した案件について集中審議が行われた。この合宿での協議を踏まえ、また2004年11月に竣工を予定していたチャペル建築への協力を視野に入れた名簿整備を兼ねて、2004年から2006年3月の期間、同窓会事務局より全同窓生に向け、誕生月にバースデーカードが届く、という企画が実施されている。

この合宿に先立つ2004年3月の卒業式より、同窓会から卒業生一人ひとりに対して、卒業記念品が贈られるようになった。当初はオリジナル煎餅やロゴ入り携帯箸など、実用的なものが中心だったが、2007年3月の卒業式より、大学並びに大学後援会との連携の下、学位記の原本を収納する証書フォルダも同窓会から贈呈することとなった。

また2005年より、ヴェリタス祭実行委員会との協力体制の下、卒業生来場促進メニューの一環として、学生の参加団体と同様に大学学内の教室を確保し、同窓会企画と銘

打ってドリンク類の無償提供を開始した。なお当初は茶道の専門家を招いてお点前を披露していたが、2010年よりセルフサービススタイルのカフェに変更されている。室内には歴代の卒業アルバムを自由に閲覧するスペースが設けられ、また来場者にはその場でノベルティグッズを配布するなど、きめ細やかなサービスが好評を博し、この場所が小さなホームカミングの場として機能するようになった。また2011年より、同窓生と在学生、また地域の方々との交流を深めることを目的として、屋外にも模擬店ブースを構え、豚汁の無料配布をはじめている。

2015年より、学生支援の一環として、大学ボランティア活動支援センターとの協力の下、ボランティア活動助成事業「ドネーション(寄付)パーティー」に協賛することとなった。これは、社会貢献活動に取り組む学生団体がその目的と活動を発表し、それを聴いた同窓会など支援者が共感した団体に寄付を行うイベントであるが、資金援助と共に、公開審査会の審査委員として運営に参画することとなった。この資金提供をきっかけにして、地域課題の解決に取り組む学生団体の支援が実現するとともに、地域の課題解決に対して、寄付を通して同窓会が積極的に関わることとなり、「大学×同窓会×地域×学生」という連携の循環が生み出されるようになった。この支援はまた、学生にとっても、自分たちの活動が同窓会をはじめとする多くの方々から

応援されていることを実感できる良い機会となっている。

この他、2013年9月28日(土)には、同窓会設立20周年を記念したホームカミングが聖学院大学において行われ、150名以上の来場者があった。チャペルにおいて記念式典が行われ、その後エルピス食堂でパーティーが開かれている。また2018年12月8日(土)には、同窓会設立25周年を記念して、聖学院大学創立30周年記念ホームカミングを大学と共催し、153名の出席者があった。この時も、チャペルにおいて記念礼拝並びに記念式典が行われ、その後エルピス食堂において懇親会が持たれている。

同窓会の足跡を振り返ってみると、200名あまりの卒業生からスタートした組織は、今や12,000名を超える規模となっていることに気づかされる。大学をはじめとする高等教育機関の果たすべき役割が大きく変化する中で同窓会の将来像を考える時、この学院に連なる一校として、聖学院大学の使命達成と発展ためにどのような貢献ができるのかを問い続ける姿勢が求められている。聖学院全体の中の同窓会の位置づけを明確にしつつ、会員相互の親睦を深めながら、さらなる協力へ向けて、可能性を広げる努力を続けていくことができたらと願っている。

(聖学院大学 同窓会役員会)

あのことろのこと ——学生生活の思い出——



倉橋 基 (88P)

最初の入学式は4月11日、月曜日だった。入学式に向かうため、宮原駅前から大学に続く細い一本道を歩いた。駅前にはロータリーなどなく、「木（もく）」という名の小さな喫茶店があった。橋上駅舎から大学のある西側を眺めると正面に小さな森が見えており、森を抜けると畑の中に戸建ての住宅が点在していた。庭先に犬がつかないである家、ペットとして九官鳥やオウムなど喋る鳥を飼っている家など、穏やかな街並みが続き、学生たちには人気があった。まだ学生用のバスはなく、駅前の舗装道路は大学に近づくにつれ、いつの間にか砂利道となった。大学の向かい側、鴨川の土手沿いには梅林が広がっており、上流には小さい牧場があった。

273人で始まった最初の学年には、クラス制度があった。一クラス約40人、AクラスからGクラスまで7クラスあり、それぞれにクラス主任の先生がいた。英語や体育、キリスト教概論など、必修の授業についてはこのクラス単位で行われた。

ガイダンス期間の終盤、4月15日から16日にかけて、1泊2日のフレッシュマン・オリエンテーションが、軽井沢の星野温泉であった。夜の親睦会では、憲法の酒井文夫先生が歌う「同期の桜」「黒田節」「田原坂」を、

手拍子しながら皆で歌った。2日目の昼食として用意されたのは、荻野屋の「峠の釜めし」だった。この昼食をもって解散の予定だったが、昼食のメニューが事前に示されなかったため、初日の昼食で釜めしを食べてしまった者も多く、結果として大量の釜めしが食堂に残されたままとなった。実行委員が一人平均7個を持ち帰ることになり、帰り道、とても重たかったことを覚えている。

4月最初の体育の授業では、前年の台風の際に校庭に流れ込み、放置されたままになっていた大量の土砂や石ころを拾っては捨てた。体育の鈴木明先生の号令「はい、一列に並べ～、前に向かって、石拾え～！」「回れ右、引き続き前に向かって、石拾え～！」「ランニングで校庭3周、そのあいだに、石拾え～！」の掛け声に合わせて、校庭中に散乱していた石を拾いまくった。最初の体育の授業は、事実上「校庭造成」だった。

5月中旬、大学と短大共催の春キャンプが、これも1泊2日であった。みどり幼稚園の園舎でひとしきりレクリエーションゲームをした後、夕食のカレーライスを皆で作って食べた。夜、詩画家の星野富弘さんを描いたVTRを皆で見た後、星野さんの詩集の中で、心を動かされた詩を朗読し合っ

た。深く感銘を受けた学生が次々と泣き出し、当惑するとともに対応に困った。出席者は短大の学生（恐らく50名以上はいた）と、大学の学生（女子学生は1名、男子学生は私を含め2名）、そして教職員数名だったが、男性が宿泊することを想定していなかったため、男子学生のみ日帰り参加となった。帰り道は寒かった。暖かい飲み物が欲しかったが、日中は夏日が続いており、宮原駅に向かう道すがら、コンビニなど一軒もない自動販売機はすべてコールド販売に切り替わっていた。寒暖の差が激しい町だと知った。

あの頃、夏になるとよく鴨川が氾濫した。1号館入口付近にあった宗教センターの壁には、床上浸水した際、泥水が流れ込んできたことを示す水跡がくっきりと残っていた。腹まで水につかりながら大学までたどり着いてみたら休講だった、ということもあった。そんな学生の苦労を知ってか、いつの頃からか教務課の森野光生課長(当時)が宮原駅まで、同じくへそまで水につかりながら、休講掲示を貼り出しに来て下さっていたように思う。

最初の定期試験は、7月最終週だった。その最終日だった金曜4限目、最後の試験の最中に校内放送があり、鴨川が増水して危険水域を超えたから早く帰るように、とのアナウンスが流れたと記憶している。その後、試験がどうなったかは記憶にない。その時点で既に土砂降りの雨だったので、仲間たちとタクシー4台を呼んだが、大学まで来ることができたのは1台だけ、しかもその1台は、既に増水していた戸崎橋を渡った先の低地部分で水没し、身動きできなくなっていたように見

えた。

8月中旬、当時聖学院が所有していた軽井沢セミナーハウスで、2泊3日のリトリートが行われた。まだ長野新幹線も上信越自動車道もない時代だったが、現地集合・現地解散だったため、上野駅から特急列車で現地に向かう者、青春18きっぷを利用して普通列車を乗り継いで行く者、自家用車に相乗りする者など、参加者の交通手段はまちまちだった。しかし、初日の昼前から群馬県内では集中豪雨となり、横川駅では落石警報装置が作動して列車はすべてストップ、碓氷バイパスも通行止めとなったため、開会礼拝の時刻になっても多くの者がセミナーハウスまでたどり着けなかった。夜、落語研究会出身者の演じる落語あり、当時来日していたネヴァン宣教師夫妻のお話しあり、仲間づくりの良いきっかけとなるようなプログラムは続いたが、雨は降り続いた。翌日予定していた碓氷峠行きのハイキングは雨のため中止となったが、峠の茶屋の団子60皿(600個)は既に注文済みだったため、希望者のみ(15名程度だったと思う)、車に分乗して峠の茶屋まで行った。食べきれない程の団子が提供され、途方に暮れた。

夏が終わっても、ひとたび大雨が降れば鴨川が溢れる事態は変わらなかった。大学4年だった1991年には、11月末の点火祭が終わった後、季節外れの台風がやってきて鴨川が溢れ、大学前の道路が水没した。聖学院橋から大学構内にかけて、教室の長椅子を橋のように並べて渡ったと記憶している。学生課の職員の方々が、ボートのカタログを熱心に見て

品定めをしていたのも、この頃だったと思う。

11月2日から3日にかけて、文化祭があった。当時、短大の文化祭は「緑聖祭」と呼ばれていたの、こちらも何か名前をつけよう、ということになった。準備の初期段階では聖学院中高と同様、「(仮称)記念祭」と呼んでいたが、何を記念するのか、という疑問が生まれ、議論になった。プロテスタント・キリスト教の始まりである宗教改革を記念するのであれば、宗教改革者だったマルチン・ルターにあやかって「ルター祭」が良いのではないか、いやルターより、同じく宗教改革者の「カルバン」のほうがカッコいいのではないか、といった意見が出されたように思う。名称については先生方も巻き込んだ議論となり、様々なアイデアが寄せられる中、最終的には「真理」を意味するラテン語から「ヴェリタス祭」に落ち着いた。学生ライブのためのパフォーマンスステージは、体育館に仮設舞台をしつらえ、短大と一緒に利用した。ダンス部のパフォーマンスが披露され、軽音楽部の演奏する「プリンセス・プリンセス」や「HOUND DOG」の歌声が響いていた。

11月下旬には、点火祭があった。地元のテレビクルーや新聞社が取材に訪れる中、みどり幼稚園の子どもたちや町の人たちと一緒に、ツリーの前でドイツ民謡の「もみの木」を歌った。4号館の食堂では、暖かいコーヒーやコーンポタージュが配られた。短大のブラスバンドサークルだったアンサンブルクラブの演奏する「そりすべり」を聴きながら、クリスマスの始まりを町中で祝った。

当時、10月に行われた創立記念音楽会や

12月のクリスマス礼拝は、浦和や大宮の市民ホールを利用していた。クリスマス礼拝では、当時まだ存在していた短大学生寮の寮生が演じるクリスマス・ページェント(聖誕劇)が披露された。ヘンデル作曲の合唱曲「ハレルヤコーラス」を、短大の音楽選択の学生や教職員有志と一緒に歌った。ハレルヤコーラスは、もともと女声3部合唱のところに後から男声2パートが加わることになったため、混声5部、という不思議なハーモニーとなった。

2月初旬には、八王子にある大学セミナーハウスで、大学・短大共催の八王子合宿があった。主なプログラムは大学・短大別々だったが、礼拝や親睦会など、いくつかのプログラムは一緒だったと記憶している。2泊3日の期間中、宿泊した長期セミナー館の屋上で、冬の星座を見上げながら、毛布にくるまって聖学院の未来を語り合った。合宿直前に大雪が降った年もあった。この時は、2日目のレクリエーションのために借りたテニスコートで、学生対教職員の大雪合戦となった。

ソーシャルメディアなど影も形もなかったあのころ、考え方や価値観が合いそうな仲間を探し出す「嗅覚」だけは、皆すぐれていたかもしれない。多くのクラブ、サークルは、自然発生的にできあがっていったように思う。1号館学生食堂(現在の1cafe)の奥の方では、ギターを抱えた学生たちがいつもいた。誰かが弾いているギターの音色に引き寄せられる形で、軽音楽部は始まったように思う。授業のため教室に入ると、教室の内側の壁には、クラブやサークルのメンバー募集の

手書きポスターが点々と貼られているのが目について（学生課許可済の印は押されていたように思う）。内容は、〇〇が好きな人、〇月〇日、〇限目に、この教室へ集まろう、という類のものだった。また当時、大学の学生が使える部室棟はなかったので、廃車となったバス6台を校庭の端に並べ、内部を前後に区切って部室として使用していた。

あのころ、校舎や校庭など、必要最低限の施設はあったが、他には何もなかった。クラブもサークルも、委員会も文化祭も体育祭もなかった。もとより携帯電話もメールもインターネットもない時代だった。ただ、新しいことにチャレンジする、熱い思いだけがあった。暑い夏、エアコンなどまだ付いていない、今はなき1号館5階の西日のあたる研究室で、仲間たちといろいろな未来を思い描いていた。同じ目的を持つ仲間を探し出し、その仲間たちと夜遅くまで議論しながら、クラブやサークルを作り、委員会を組織し、文化祭の企画を立て、無から有を作り出していく、と

いうことの尊さを、この大学で知った。またその時に得た仲間たちとの信頼関係は、その後、私の大切な財産となった。新しい学校を新しい仲間たちと共に作っていく、そんな実感のある4年間だった。

「授業料」という名のお金を支払って、その反対給付として当然のごとく手に入れたものも、たくさんあった。しかしそれ以上に、ただで受けることが相応しいもの、あるいはそもそも値段のつかないもの、プライスレスなものが世の中にはあることを、私はここで過ごした4年間の中で学んだ。使命や役割、出会いや友情、そして人を愛すること……。大学の30年を、そして自らの30年を振り返る時、ただで受けた「人を育む」というこれら一切の営みについては、いつかまた、どこかで、ただでお返ししたい、そう強く感じている。一つの歴史の折目の中にあって、大学の更なる歩みに大きな信頼と信任を寄せつつ、これからも全力をもって応援していきたいと心から願うものである。

クラブ活動の思い出



秋谷 大輔（100 A）

聖学院大学創立30周年、本当におめでとうございます。心からお慶び申し上げます。またこれまで聖学院大学にご尽力頂きました

教員、職員、後援会、関わり頂きましたすべての皆様に心から御礼を申し上げます。

私が同校へ入学した年はちょうど2000年

を迎えた年で日本だけでなく世界的にも記念する年でした。シドニーでのオリンピックでは女子マラソンでは高橋尚子さん、柔道100キロ超級では井上康生さんが金メダルを獲得した年でもあります。キャンパスにはまだチャペルが無い時代でした。今から18年前になりますが大学時代の4年間を今でもよく思い出し、旧友と今でも年に数回は顔を合わせる事もあります。現在、同窓会の役員を務めているからという事もありますが当時所属していた学友会や軟式野球部のメンバーとも顔を合わせ、当時を振り返り語り明かす事が度々あります。

あまりにも濃密だった私の4年間はとてもかけがえのない時間でした。18歳から22歳という多感な時期。学業やヴェリタス祭実行委員としての活動、部活動では軟式野球部に所属しそれ以外の時間はアルバイトへと毎日奔走していました。それぞれが多面で様々な関わりを築くことになりました。学業ではゼミにおいて担当の教授には色々な意味で大変お世話になりました。

軟式野球部への入部きっかけは部活・サークル勧誘DAYでした。小学校から高校までずっと野球を経験していた私は大学へ入学後、野球を続けるという事も決めずにいましたが、自然と野球部のブースへと足を運んでいました。入部を決めた理由は今では思い出せませんが、入らない理由が無かったのかもしれない。部員数は引退した4年生を除き3学年で20数名。ちょうどいい人数だったのかもしれない。ほとんどが高校までの野

球経験者でしたが未経験者も歓迎といった和気あいあいとした雰囲気ของทีมでした。キャプテンを中心に部員のみんながのびのび自発的に練習に取り組み、高校までのしっかりとした練習とは異なり「楽しく」というフレーズがびったりのチームでした。高校まではみっちり野球漬けだった皆にとっては週に3日の練習でアルバイトなど両立できる環境がびったりだったのかもしれませんが。年に1度の千葉の房総や東京の大島への合宿も良い思い出となりました。

和気あいあいとした雰囲気重視のチームではありましたが北関東野球連盟に所属し大会時期には毎週のように笠間や今市まで学生ながら車を出し合い乗り合わせて球場まで移動していました。2年次にはリーグ優勝を果たし、東日本大会へ出場しベスト8という記録を残すことが出来ました。当時の試合相手には筑波大学や作新大学・白鷗大学など強豪がひしめく中で数年の中でもまれにみる戦績を残すことが出来たのは有力なバッテリーが所属していたり、個々人の実力ということも、もちろんありますが、何よりもチームワークが良く、チャンスの時にはまさに一丸となって戦ったからこそ勝利を掴み取れたのだと思います。

この経験は今でも顔を合わせると当時のことを語り合うエピソードとなっています。野球を共通として聖学院大学で偶然出会った皆がそれぞれのフィールドで今現在は社会人としてご活躍されていることを祈念しまして創立30周年へ寄せる言葉とさせていただきます。

児童学科の思い出



稲葉 令子 (旧姓 清水) (92C)

聖学院大学創立 30 周年、おめでとうございます。

私が人文学部児童学科の一期生として聖学院大学に入学したのは 1992 年、早いのもう 26 年も前になります。

当時、人文学部の中にある児童学科というのは全国でも珍しく、そして新設の学部らしく華麗な教授陣による充実の講義を受けることができました。特に記憶に残っているのは、子どもの本に関わる者なら夢のような、福音館書店の松居直先生による絵本論です。ご自身の絵本はもちろん、多くの作家さんとの絵本制作のエピソードを話して下さいました。中でも長新太さんのお話が印象的でした。そして、児童文化学の本田和子先生の児童学概論は本当に圧巻でした。その頃子どもたちに大流行していたセーラームーン現象についての分析はいまも覚えています。ゼミは児童心理学の故新田倫義先生でしたが、その分野では権威と言われていた先生なのに、全く偉そうなところがなく本当に優しい口調で指導くださったのが印象的でした。病院でのボランティア経験をもとに「幼～児童期に親と離れて暮らす子どもたちの心の弊害とそのケア」という卒論を書き上げました。

一般教養では、村上公久先生の環境学は雑

学までもおもしろく、故バートンルイス先生の英会話はどこまでも格好良く、鈴木明先生の体育は学生と一緒に真剣勝負をしてくれて、どれも本当に楽しかったです。少人数教育だったこと (1 学年 50 名)、そして、教職課程をとっていたので実技系の講義も多かったこともあり、どの講義もとても印象深く、魅力的でした。

特筆したいのは、これだけの有名で実績ある先生方が、皆、私たち学生を一人の人間ととらえ、意見を聞き、きちんと接して下さったということです。聖学院大学の児童学科で学んだ者は、子どもを人格を持った一人の人間として尊重して接するのは当たり前だと思っていると思いますが、解っていても出来ないこともあったり、世の中の当たり前では決してないのです。私は、学問としての学びは勿論ですが、聖学院大学の先生方の、学生に対する姿勢から人との接し方、生き方、在り方を学んだと思っています。本当にありがとうございました。

縁あって今、絵本や児童書、そして子ども達に関わる仕事に携わっておりますが、仕事においても、それから私自身の子育てにおいても、聖学院大学で学んだもの全てが役立っています。本物に触れる。大切なことです。

また、これは面白そうだと聖学院大学を選んだ娘を、当時としてはまだ珍しい新幹線通学させてくれた（箱入りだったのですね）両親にも感謝です。

資格、特に教職課程をとると必修科目も多く、実習もあり、勉強は格段に大変になるとは思いますが、是非後輩たちにも頑張ってい

ただき、未来を担う子どもたちの笑顔のために一人でも多くの子どもときちんと向き合える先生になって欲しいです。

最後に、これからも聖学院大学が、ますます素晴らしい学生を育てて行く場でありつづけますよう、お祈りしております。

日本文化学科の思い出



磯田 梓（旧姓 武藤）（98 J）

聖学院大学創立 30 周年、おめでとうございます。

早いもので、私たち日本文化学科一期生が卒業して、今年で 17 年。大学生活はたったの 4 年間でしたが、私にとっては非常に濃密な 4 年間だったように思います。

1998 年、聖学院大学に新たに誕生した日本文化学科に、私たち日本文化学科一期生は入学致しました。1 年目の日本文化学科は、まだ女子聖短大に所属されている先生方もいらっしゃる、私たち学生も、学科の先輩がいない中、それぞれに戸惑いの多いスタートとなりました。そんな私たちをさまざまな場面で先生方は助けて下さいました。残念ながら、先輩との交流というものは体験できませんでしたが、その一方で先生方が積極的に交流を深めて下さったり、相談に乗って下さったり

と、絆は深くなったと思います。

大学生活を振り返りますと、私にとりましては教職課程とゼミが大学生活の二大柱と言っても過言ではないと思います。双方とも 2 年次から始まりましたので、履修に関して、いろいろと試行錯誤したと記憶しております。大学生活も 1 年が過ぎますと、いろいろな授業や専門分野に興味が出て参ります。そんな中、教職科目やゼミの時間と折り合いをつけながら、自分の興味や将来の専門分野を考えつつ、履修科目を決めていきました。結局私は、教職課程に重きを置いた履修にし、興味のあるゼミを 2 年次は履修せず、担当の先生にお願いして、ゼミを履修していないにも拘らず、ゼミの資料を頂いておりました。そういったわがままを聞いて頂き、結果私の 3 年次以降の卒業研究、卒業論文の題材は、

履修していなかった分野に落ち着いたのです。当時、資料の提供に快諾頂いていなければ、私の卒業論文は違うものになっていた訳です。今考えましても、縁を感じずにはいられません。

興味のある分野を見つけ、その研究に邁進しておりましたが、そんな大学生活にも就職活動の時期がやってくる訳です。私たち一期生は学科として就職先の前例がなく、どんな業種職種に進もうか悩みました。私は教職課程を履修しておりましたし、できれば教員にと考えておりました。しかし、教員採用（埼玉県）は若干名であることはわかっておりましたので、一般企業の採用試験も同時に進めておりました。また、4年次6月に教育実習

を控えておりましたので、それまでには内定を、と思っておりました。教員採用試験は、私にとってはあまりにも高いハードルで、残念ながら合格は致しませんでした。私たちの卒業年2002年はまだ就職氷河期の中にありましたが、私は幸いにも教育実習の直後に内定を得ることができ、縁あってその企業に入社することになり、約10年勤務致しました。

卒業しましてから感じますのは、聖学院大学はアットホームな大学だということです。在学中ですと特に感じないことですが、社会に出ますと、先生方や職員の皆さんがとても暖かいことを実感致します。今後もそんな聖学院大学の良いところをどんどん伸ばし、発展されていくことを切に願っております。

人間福祉学科の思い出



浅野早百合（112W）

私の人間福祉学科での思い出は、ボランティア活動支援センターでの活動と先生方との出会いです。

ボランティア活動支援センターでは「サポメン」として約3年間活動しました。1年生の春学期、人間福祉学総論の講義でボランティア活動支援センターの川田さんと芦澤さんがボランティアについて話をしに来て下さいました。講義後、お二人に「真面目に話を

聞いていてくれたね！」と声を掛けて頂いたことがサポメンの活動を始める最初のきっかけです。大学は自主的に行動しなければいけない場所と思っていたのですが、職員の方から声を掛けてきて下さったことに驚き、同時に嬉しい気持ちになりました。サポメンでは、学内のボランティア活動活性化を目的とし、新入生への宣伝やボランティア団体と学生が繋がる機会作り等の活動を行いました。仲間

と合宿をし昼間は真面目に夜は騒ぎ、サポメンでの活動はいつも笑いに溢れていました。そんな中で、私のお堅い真面目な性格も和らいでいったように思います。私にとってサポメンは、伸び伸びと個性を大事に楽しく活動できる場所でした。最初に声を掛けて下さった川田さんと芦澤さんには本当に感謝しています。

私は木下大生先生のゼミに所属していました。木下先生は優しくも厳しい先生で、卒業論文や国家試験等、弱音を吐きたくないような事に対して「やるかやらないか」ではなく「やるしかない」というスタンスでした。そのため、ゼミや講義での課題に私はいつも全力で取り組んでいたように思います。

3年生の時、秋から始まる社会福祉士の実習が不安で不安で、泣きながら先生の研究室へ行ったこともありました。「ここで諦めたら絶対に後悔するでしょ？やっごらん！」と先生に励まされ、実習を迎えたことも懐かしい思い出です。

学生生活最後の年には、卒業論文の執筆とにかく苦しみました。考えれば考える程自分がどこにいるのか分からなくなり、苦しん

で出した答えが的外れなんてこともありました。「やるしかない！」と思いながら何度も徹夜をして何とか提出までたどり着きました。学生生活の中で1番辛い経験でしたが、先生に「よく頑張ったから木下賞をあげよう」と笑って褒めて頂いた時は本当に嬉しかったです。

また、助川征雄先生にも大変お世話になりました。研究室で先生とお茶を飲みながらお話する時間が大好きでした。4年生の12月頃、国家試験の勉強がなかなか進まず焦っていたのですが、先生は急かさず「まだ2か月あるから大丈夫！まずは1日2時間勉強してごらん」と言って下さいました。そこからはエンジンがかかったように集中し、国家試験に無事合格することができました。優しく応援して下さいる助川先生と、厳しく力強く背中を押して下さいる木下先生との出会いは、私にとって一番の宝物です。

色々と辛い時期もありましたが、常に温かく見守って下さる方々がいました。聖学院大学では、沢山の出会いを通して「自分は自分らしくいていいんだな」と思いながら成長することができたと思います。

第3部 資料編

教員等

1. 理事長・院長・歴代学長・全学教授

理事長

1951～1979.5	石川 清
(1978～在任のまま入院、逝去。その間小田信人が代行)	
1979.9～1985.9	小田 信人
1985.10～2010	大木 英夫
2011～2017	阿久戸光晴
2017～	清水 正之

院長

1966～1979	石川 清
1984～1985	小田 信人
1988～2006	大木 英夫
2007～2011	小倉 義明
2012～2016	阿久戸光晴
2017～	山口 博

学長

1888～1993	金井信一郎
1994～1998	安倍 北夫
1999～1999	松川 成夫
2000～2003.10	飯坂 良明
2003.12～2013	阿久戸光晴
2014～2014	姜 尚中
2015～	清水 正之

全学教授

1989～1993	隅谷三喜男
2003～2009	速水 優
2013～2013	姜 尚中

2. 部長会

大学チャプレン

(前大学宗教主任)

1988～1994	西谷 幸介
1995～2003	阿久戸光晴
2006～2009	阿部 洋治
2010～2017	菊地 順
2018～	柳田 洋夫

キリスト教センター所長

(前宗教センター)

1988～2003	近藤 勝彦
2004～2011	小倉 義明
2012～2016	山口 博
2017～	菊地 順

学部長

政治経済学部

1988～1991	金井信一郎
1992～1995	平 良
(1992は代行)	
1996～2001	澁谷 浩
2002～2007	標 宣男
2008～2011	土方 透
2012～2013	標 宣男
2014～2014	阿久戸光晴
2015～2015	平 修久 (代行)
2016～2017	谷口隆一郎
2018～	高橋 愛子

人文学部

1992～1995	J.D. リード
1996～1998	松川 成夫

1999～1999	金子 晴勇	2017～2017	渡辺 英人
2000～2007	寺田 正義	2018～	石川裕一郎
2008～2011	稲田 敦子	コミュニティ政策学科	
2012～2014	清水 正之	2000～2005	富澤 賢治
2015～	清水 均	2006～2007	石部 公男
人間福祉学部		2008～2011	平 修久
2004～2009	中村 磐男	2012～2015	谷口隆一郎
2010～2015	牛津 信忠	2016～2016	吉田 博司
2016～	古谷野 亘	2017～2017	渡辺 英人
心理福祉学部		2018～	石川裕一郎
2018～	古谷野 亘	欧米文化学科	
学科長		1992～1993	J.D. リード
比較政治経済課程		1994～1995	安酸 敏真
1988～1991	酒井 文夫	1996～1997	西村 虔
1992～1993	平 良	1998～1998	金子 晴勇
1994～1995	北山 直樹	1999～1999	寺田 正義
1996～1997	山本 鎌造	2000～2001	稲田 敦子
1998～1999	石部 公男	2002～2003	安酸 敏真
社会政治経済課程		2004～2007	稲田 敦子
1988～1991	安倍 北夫	2008～2011	D. バーガー
1992～1993	霜田美樹雄	2012～2013	和田 光司
1994～1995	城戸 喜子	2014～2016	D. バーガー
1996～1997	北山 直樹	2017～	氏家 理恵
1998～1999	吉田 博司	日本文化学科	
政治経済学科		1998～1999	荒木 忠男
2000～2003	梅津 順一	2000～2003	鶴沼 裕子
2004(春)	柴田 武男	(2000年は代行)	
2004(秋)～2007	土方 透	2004～2005	標 宮子
2008～2009	柴田 武男	2004～2005(春)	清水 均 (代行)
2010～2013	吉田 博司	2006～2009	黒木 章
2014～2014	平 修久	2010～2011	清水 正之
2015～2015	谷口隆一郎	2012～2014	清水 均
2016～2016	吉田 博司	2015～	村松 晋

児童学科		2011～2013	高橋 義文
1992～1993	遠藤喜美子	2014～2015	清水 正之
1994～1995	新田 倫義	2016～	清水 均
1996～1999	本田 和子	人間福祉学研究科	
2000～2002	志田 俊郎	2006～2011	郡司 篤晃
2003～2016	村山 順吉	2012～2013	窪寺 俊之
2017～2017	鎌原 雅彦	2014～2015	牛津 信忠
2018～	田澤 薫	2016～	古谷野 亘
人間福祉学科		基礎総合教育部長	
1998～2000	熊澤 義宣	(旧称：一般教育課程委員会→基礎・総合科	
2001～2009	牛津 信忠	目委員会→基礎・総合教育部→現在)	
2010～2013	助川 征雄	1988～1991	杉本 栄司
2014～2015	古谷野 亘	1992～1996	鶴沼 裕子
2016～	中谷 茂一	1997～1997	志田 俊郎
こども心理学科		1998～1999	石部 公男 (基礎)
2012～2015	窪寺 俊之	1998～1999	吉田 博司 (総合)
2016～2017	和田 雅史	2000～2001	遠山 益
2018(春)	渡邊 正人	2002～2003	阿久戸光晴
2018(秋)	藤掛 明	2004～2011	標 宣男
心理福祉学科		2012(春)	菊地 順
2018～	田村 綾子	2012(秋)～2013	稲田 敦子
大学院研究科長		2014～2015	松本 祐子
政治政策学研究科		2016～	渡邊 正人
1996～1999	飯坂 良明	教務部長	
2000～2011	大木 雅夫	(旧称：教務部委員会)	
2012～2013	松原 望	1988～1991	黒木 章
2014～2014	阿久戸光晴	1992～1996	標 宣男
2015～2015	平 修久 (代行)	1997～1997	山田 克己
2016～2017	谷口隆一郎	1998～1999	稲田 敦子
2018～	高橋 愛子	2000～2001	標 宣男
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科		2002～2003	稲田 敦子
1999～2008	古屋 安雄	2004～2007	渡邊 正人
2009～2010	有賀 貞	2008～2011	松本 祐子

2012～2013	大高 研道
2014～2017	石川裕一郎
2018～	村上 純子
学生生活部長	
(旧称：学生部委員会→学生部→現在)	
1988～1991	石部 公男
1992～1993	吉田 博司
1994～1995	石部 公男
1996～1997	志田 俊郎
1998～2003	黒木 章
2004～2007	梅津 順一
2004(秋)	清水 均 (代行)
2008～2011	清水 均
2012～2013	古谷野 亘
2014～2014	助川 征雄
2014～2016	濱田 寛
2017～2018(春)	森分 大輔
2018(秋)～	竹井 潔
入試報部長	
(旧称：入試委員会→入試・広報部委員会→現在)	
1988～1988	安倍 北夫
1989～1993	平 良
1994～1997	北山 直樹(入試委員長)
1996～1997	村上 公久(広報部長)
1998～2001	西本 憲弘
2002～2009	大森 達也
2010～2013	渡邊 正人
2014～2014	小川 洋
2015～2016	渡辺 英人
2017～	松本 祐子

キャリアデザイン部長	
(旧称：リクルート委員会→就職部→現在)	
1988～1988	金井信一郎
1989～1993	霜田美樹雄
1994～1995	保谷 六郎
1996～1997	山本 鎌三
1998～1999	加藤 恵司
2000～2001	柏木 昭
2002～2004(春)	柴田 武男
2004(秋)～2007	平 修久
2008～2011	標 宣男
2012～2013	平 修久
2014～	八木 規子

国際交流・留学生センター所長	
(旧称：オーグルソープ委員会→国際交流委員会→国際部→現在)	
1989～1991	杉本 栄司
1992～1992	J.D. リード
1993～1993	杉本 栄司
1994～1994	安酸 敏眞
1995～1998	西村 虔
1999～2000	W.G. クレーラ
2001～2002	山本 昂
2003～2003	飯坂 良明
2004～2007	寺田 正義
2008～2009	阿部 洋治
2010～2013	R.D. バーガー
2014～2014	佐野 正子
2015～2015	喜田 敬
2016～2016	E.D. オズバーン
2017～2017	大森 達也
2018～	村瀬天出夫

教員（専任・特任）在職期間

掲載順序は就任年度順の名前順とし、肩書は最終のものないしは2018年度現在のものを記した。

1988～2012	秋吉 祐子 (政治経済学科教授)	1989～2004	鷗沼 裕子 (日本文化学科教授)
1988～1998	安倍 北夫 (学長)	1989～2016	加藤 恵司 (政治経済学科教授)
1988～2012	石部 公男 (コミュニティ政策学科教授)	1989～1994	城戸 喜子 (政治経済学科教授)
1988～1993	金井 信一郎 (学長)	1989～1995	黒部 隆 (一般教育課程教授)
1988～1995	金丸 平八 (政治経済学科教授)	1989～1993	佐々木 信夫 (政治経済学科教授)
1988～2013	鹿瀬 颯枝 (欧米文化学科教授)	1989～1994	霜田 美樹雄 (政治経済学科教授)
1988～2014	黒木 章 (日本文化学科教授)	1989～1992	隅谷 三喜男 (全学教授)
1989～2003	近藤 勝彦 (特任教授)	1989～1998	平 良 (政治経済学科教授)
1988～1995	酒井 文夫 (政治経済学科教授)	1989～2007	寺田 正義 (欧米文化学科教授)
1988～2013	標 宣男 (コミュニティ政策学科教授)	1989～1994	吉川 元忠 (政治経済学科教授)
1988～1998	杉本 栄司 (欧米文化学科教授)	1990～2017	大森 達也 (政治経済学科教授)
1988～2004	鈴木 明 (児童学科教授)	1990～1999	北山 直樹 (政治経済学科教授)
1988～1994	西谷 幸介 (大学宗教主任)	1990～2013	後藤 兼一 (政治経済学科教授)
1988～2016	原 一子 (こども心理学科教授)	1990～1999	鐸木 昌之 (政治経済学科助教授)
1988～在籍中	土方 透 (政治経済学科教授)	1990～1993	松井 弘明 (政治経済学科教授)
1988～2008	丸山 久美子 (人間福祉学科教授)	1990～2016	吉田 博司 (政治経済学科教授)
1988～1998	山本 鎌造 (政治経済学科教授)	1991～1994	磯部 浩一 (政治経済学科教授)
1989～1992	岩渕 美克 (政治経済学科専任講師)	1991～2017	柴田 武男 (政治経済学科教授)

1991 ~ 1992	富田 重夫 (政治経済学科教授)	1993 ~ 1995	深山 千穂子 (児童学科専任講師)
1991 ~ 2000	保谷 六郎 (政治経済学科教授)	1993 ~ 2016	村山 順吉 (児童学科教授)
1991 ~ 1995	堀家 文吉郎 (政治経済学科教授)	1993 ~ 2003	安酸 敏眞 (欧米文化学科教授)
1992 ~ 2016	石津 靖大 (こども心理学科特任教授)	1994 ~ 2000	須山 静夫 (欧米文化学科教授)
1992 ~ 2001	遠藤 喜美子 (児童学科教授)	1994 ~ 1995	時田 光彦 (欧米文化学科教授)
1992 ~ 在籍中	菊地 順 (政治経済学科教授)	1994 ~ 2000	西村 虔 (欧米文化学科教授)
1992 ~ 2003	窪田 恭子 (児童学科教授)	1994 ~ 2002	西本 憲弘 (政治経済学科教授)
1992 ~ 1999	D.T. グリフィー (欧米文化学科助教授)	1994 ~ 2000	松川 成夫 (児童学科教授)
1992 ~ 2007	志田 俊郎 (児童学科教授)	1994 ~ 2007	森下 みさ子 (児童学科准教授)
1992 ~ 2014	柴田 史子 (欧米文化学科教授)	1994 ~ 1994	渡辺 守道 (欧米文化学科教授)
1992 ~ 1996	H. バートンルイス (欧米文化学科助教授)	1995 ~ 2016	阿久戸 光晴 (理事長)
1992 ~ 2016	村上 公久 (政治経済学科教授)	1995 ~ 2002	大山 礼子 (政治経済学科教授)
1992 ~ 1996	J.D. リード (政治経済学部教授)	1995 ~ 2001	金子 晴勇 (欧米文化学科教授)
1993 ~ 2014	稲田 敦子 (欧米文化学科教授)	1995 ~ 1999	篠田 豊 (政治経済学科教授)
1993 ~ 1997	大井上 滋 (一般教育課程教授)	1995 ~ 2002	澁谷 浩 (政治経済学科教授)
1993 ~ 2002	川村 登喜子 (児童学科教授)	1995 ~ 2000	本田 和子 (児童学科教授)
1993 ~ 2016	喜田 敬 (児童学科教授)	1995 ~ 2000	前田 信雄 (政治経済学科教授)
1993 ~ 2001	高木 乙女子 (児童学科助教授)	1995 ~ 1998	山田 克己 (政治経済学科教授)
1993 ~ 1995	寺内 幸雄 (児童学科専任講師)	1996 ~ 2014	鈴木 真実哉 (政治経済学科教授)
1993 ~ 1999	新田 倫義 (児童学科教授)	1997 ~ 2003	大藤 紀子 (政治経済学科助教授)

1998～1999	荒木 忠男 (日本文化学科教授)	1998～2015	山田 麻有美 (こども心理学科教授)
1998～2016	K.O. アンダスン (欧米文化学科教授)	1998～2003	結城 俊哉 (人間福祉学科助教授)
1998～在籍中	氏家 理恵 (欧米文化学科教授)	1998～在籍中	渡邊 正人 (基礎総合教育部教授)
1998～2015	牛津 信忠 (人間福祉学科教授)	1998～在籍中	和田 光司 (欧米文化学科教授)
1998～2007	梅津 順一 (政治経済学科教授)	1999～在籍中	相川 徳孝 (児童学科教授)
1998～2012	梅津 迪子 (人間福祉学科教授)	1999～2016	阿部 洋治 (人間福祉学科教授)
1998～2003	大木 英夫 (人間福祉学科教授)	1999～2012	池 弘子 (人間福祉学科教授)
1998～2001	柏木 昭 (人間福祉学科教授)	1999～2008	井上 伸子 (日本文化学科教授)
1998～2015	川崎 司 (日本文化学科教授)	1999～2007	江川 美知子 (欧米文化学科教授)
1998～2002	熊澤 義宣 (人間福祉学科教授)	1999～2004	岡田 潔 (日本文化学科教授)
1998～2000	W.G. クレーラ (欧米文化学科教授)	1999～在籍中	加曾利 実 (欧米文化学科特任教授)
1998～2006	佐藤 克哉 (日本文化学科特任講師)	1999～2006	黒澤 浩 (基礎総合教育部特任講師)
1998～1999	島村 馨 (日本文化学科教授)	1999～在籍中	古谷野 亘 (心理福祉学科教授)
1998～2009	標 宮子 (日本文化学科教授)	1999～在籍中	清水 均 (日本文化学科教授)
1998～2003	鈴木 洋児 (人間福祉学科教授)	1999～在籍中	中谷 茂一 (心理福祉学科教授)
1998～2002	須山 名保子 (日本文化学科教授)	1999～2016	中村 磐男 (こども心理学科特任教授)
1998～1999	千田 明夫 (政治経済学科教授)	1999～2006	西谷 博之 (日本文化学科教授)
1998～2003	遠山 益 (人間福祉学科教授)	1999～2016	R.D. バーガー (欧米文化学科教授)
1998～在籍中	松本 祐子 (児童学科教授)	1999～2001	長谷川 浩一 (人間福祉学科教授)
1998～2001	山下 愛子 (日本文化学科教授)	1999～2004	林 収正 (政治経済学科教授)

1999～2013	藤田 明 (児童学科教授)	2002～在籍中	渡辺 英人 (政治経済学科准教授)
1999～2010	増田 公香 (人間福祉学科教授)	2003～2011	相澤 一 (政治経済学科准教授)
1999～2008	松村 豪一 (人間福祉学科教授)	2003～在籍中	相川 章子 (心理福祉学科教授)
1999～2002	山本 昂 (副学長)	2003～2015	小川 洋 (政治経済学科教授)
2000～2003	飯坂 良明 (学長)	2003～2011	清澤 達夫 (コミュニティ政策学科助教授)
2000～在籍中	飯島 康夫 (政治経済学科教授)	2003～2013	国分 道雄 (コミュニティ政策学科助教)
2000～2004	潮 匡人 (コミュニティ政策学科講師)	2003～在籍中	小林 茂之 (日本文化学科教授)
2000～2003	大木 雅夫 (コミュニティ政策学科教授)	2003～2007	近藤 存志 (欧米文化学科准教授)
2000～2003	郡司 篤晃 (コミュニティ政策学科教授)	2003～2003	T.P. ジュリエン (基礎総合教育部特任講師)
2000～2014	佐野 正子 (こども心理学科教授)	2003～在籍中	竹井 潔 (政治経済学科准教授)
2000～2003	鈴木 順一 (コミュニティ政策学科教授)	2003～2004	立田 夏子 (基礎総合教育部特任講師)
2000～在籍中	平 修久 (政治経済学科教授)	2003～在籍中	内藤 みち (政治経済学科特任講師)
2000～2005	富沢 賢治 (コミュニティ政策学科教授)	2003～2013	永井 理恵子 (児童学科教授)
2000～2003	馬場 健 (コミュニティ政策学科講師)	2003～2006	長坂 達彦 (欧米文化学科助教授)
2000～2001	増田 文男 (コミュニティ政策学科教授)	2003～2004	中田 美子 (児童学科特任講師)
2000～2004	眞野 輝彦 (コミュニティ政策学科教授)	2003～2008	長山 篤子 (児童学科特任講師)
2001～2014	瀬名 浩一 (政治経済学科教授)	2003～在籍中	長谷川 恵美子 (心理福祉学科教授)
2001～在籍中	谷口 隆一郎 (総合研究所教授)	2003～2015	東島 誠 (日本文化学科教授)
2002～2016	川口 さち子 (日本文化学科教授)	2003～2010	牟田 隆郎 (人間福祉学科教授)
2002～2012	川添 美央子 (コミュニティ政策学科准教授)	2003～2004	矢部 寿美子 (基礎総合教育部特任講師)

2004～在籍中	高橋 愛子 (政治経済学科教授)	2005～2008	松浦 浩樹 (児童学科特任講師)
2004～2016	野口 祐子 (人間福祉学科特任教授)	2005～在籍中	メイス みよ子 (基礎総合教育部特任講師)
2004～在籍中	村松 晋 (日本文化学科教授)	2005～2005	尹 仁河 (基礎総合教育部特任講師)
2004～2013	山口 圭 (人間福祉学科助教)	2005～2008	R. ラビーニ (基礎総合教育部特任講師)
2005～在籍中	石川 裕一郎 (政治経済学科教授)	2005～2016	若松 昭子 (政治経済学科教授)
2005～2007	市川 研 (基礎総合教育部特任講師)	2006～2016	大高 研道 (政治経済学科教授)
2005～2005	岡田 靖子 (基礎総合教育部特任講師)	2006～2013	大塚 健司 (コミュニティ政策学科特任講師)
2005～2017	E.D. オズバーン (欧米文化学科教授)	2006～在籍中	小池 茂子 (児童学科教授)
2005～在籍中	金谷 京子 (心理福祉学科特任教授)	2006～在籍中	佐藤 千瀬 (児童学科准教授)
2005～2010	D.A. ガン (基礎総合教育部特任講師)	2006～在籍中	M. サベット (欧米文化学科教授)
2005～2011	C. ギブソン (基礎総合教育部特任講師)	2006～在籍中	柳田 洋夫 (児童学科教授)
2005～在籍中	熊谷 芳郎 (日本文化学科教授)	2007～2015	河島 茂生 (政治経済学科准教授)
2005～2011	国府田 秀行 (基礎総合教育部特任助手)	2007～在籍中	濱田 寛 (日本文化学科教授)
2005～2014	佐藤 逸子 (基礎総合教育部特任講師)	2007～2011	深澤 悠紀雄 (児童学科特任講師)
2005～2008	高端 正幸 (政治経済学科准教授)	2007～在籍中	横山 寿世理 (日本文化学科准教授)
2005～2006	R.E. デイム (基礎総合教育部特任講師)	2008～2014	石川 由美子 (こども心理学科教授)
2005～2012	長崎 (出口) 睦子 (欧米文化学科准教授)	2008～2009	井本 美穂 (欧米文化学科特任講師)
2005～在籍中	東 仁美 (欧米文化学科教授)	2008～2012	久保 千一 (基礎総合教育部特任講師)
2005～2012	K.A. ヒル (基礎総合教育部特任講師)	2008～2009	黒瀬 聖子 (基礎総合教育部特任講師)
2005～2005	S.R. ボイド (基礎総合教育部特任講師)	2008～2013	左近 豊 (人間福祉学科准教授)

2008～2013	佐藤 啓介 (欧米文化学科准教授)	2011～在籍中	田村 綾子 (心理福祉学科教授)
2008～在籍中	清水 正之 (学長・理事長)	2011～2014	藤井 重隆 (基礎総合教育部特任講師)
2008～2014	助川 征雄 (人間福祉学科教授)	2012～在籍中	井上 知洋 (児童学科助教)
2008～在籍中	寺崎 恵子 (児童学科准教授)	2012～在籍中	大橋 (川村) 良枝 (心理福祉学科教授)
2008～2011	J.R. バーン (基礎総合教育部特任講師)	2012～在籍中	尾張 宏一 (基礎総合教育部特任講師)
2009～在籍中	黒崎 佐仁子 (日本文化学科准教授)	2012～在籍中	川瀬 敏行 (児童学科特任講師)
2009～2012	小山 義徳 (人間福祉学科助教)	2012～在籍中	木村 美里 (基礎総合教育部特任助手)
2009～在籍中	島田 洋子 (基礎総合教育部特任講師)	2012～2015	窪寺 俊之 (こども心理学科特任教授)
2009～在籍中	田澤 薫 (児童学科教授)	2012～2017	坂本 佳代子 (児童学科特任講師)
2009～2016	チェンバレン 暁子 (基礎総合教育部特任講師)	2012～2014	佐治 由美子 (児童学科特任講師)
2009～2010	徳永 貴志 (コミュニティ政策学科特任講師)	2012～2016	齊藤 理砂子 (こども心理学科准教授)
2009～2013	松尾 秀哉 (政治経済学科教授)	2012～2014	鈴木 潔 (政治経済学科准教授)
2009～在籍中	森分 大輔 (基礎総合教育部准教授)	2012～在籍中	畠山 宗明 (欧米文化学科助教)
2010～2010	上野 麻美 (日本文化学科准教授)	2012～2013	平山 正実 (こども心理学科教授)
2010～在籍中	棚橋 明美 (基礎総合教育部特任講師)	2012～在籍中	藤掛 明 (心理福祉学科教授)
2010～2013	船田 信昭 (児童学科准教授)	2012～在籍中	山田 ひとみ (政治経済学科助教)
2011～在籍中	市村 和子 (児童学科特任講師)	2013～2016	L.アーノルド (基礎総合教育部特任講師)
2011～2013	菊池 有希 (日本文化学科助教)	2013～在籍中	小川 隆夫 (児童学科特任講師)
2011～在籍中	酒井 俊行 (基礎総合教育部特任講師)	2013～2014	片柳 榮一 (欧米文化学科 (大学院) 教授)
2011～在籍中	竹渕 香織 (基礎総合教育部准教授)	2013～2014	姜 尚中 (学長)

2013～在籍中	鎌原 雅彦 (児童学科特任教授)	2014～在籍中	齋藤 範雄 (児童学科特任講師)
2013～2013	気谷 陽子 (基礎総合教育部特任講師)	2014～在籍中	広瀬 歩美 (児童学科助教)
2013～2016	木下 大生 (人間福祉学科准教授)	2014～在籍中	丸山 綱男 (児童学科特任講師)
2013～在籍中	鄭 鎬碩 (基礎総合教育部准教授)	2014～在籍中	村瀬 天出夫 (欧米文化学科特任講師)
2013～2013	高橋 義文 (大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科教授)	2014～2016	山口 博 (児童学科特任教授)
2013～2013	豊川 慎 (基礎総合教育部特任研究員)	2014～在籍中	吉澤 剛士 (基礎総合教育部特任講師)
2013～在籍中	中川 英幸 (基礎総合教育部特任講師)	2015～在籍中	岡村 佳代 (基礎総合教育部准教授)
2013～在籍中	春木 豊 (基礎総合教育部特任講師)	2015～在籍中	木下 綾子 (日本文化学科准教授)
2013～2014	藤原 淳賀 (基礎総合教育部教授)	2015～在籍中	木村 裕二 (政治経済学科(大学院)特任講師)
2013～在籍中	堀 恭子 (心理福祉学科教授)	2015～在籍中	島田 由紀 (欧米文化学科准教授)
2013～2013	松原 望 (大学院政治政策学研究科教授)	2015～2017	中原 純 (人間福祉学科准教授)
2013～2014	松本 周 (基礎総合教育部助教)	2015～在籍中	長谷部 雅美 (人間福祉学科助教)
2013～在籍中	宮本 悟 (政治経済学科教授)	2016～在籍中	井上 兼生 (政治経済学科特任教授)
2013～在籍中	村上 純子 (心理福祉学科教授)	2016～在籍中	関根 清三 (欧米文化学科(大学院)特任教授)
2013～在籍中	八木 規子 (政治経済学科准教授)	2016～在籍中	野田扇三郎 (政治経済学科(大学院)特任教授)
2013～2016	吉田 昌義 (こども心理学科特任教授)	2016～在籍中	松井 慎一郎 (日本文化学科准教授)
2013～2017	和田 雅史 (こども心理学科教授)	2017～在籍中	五十嵐 成見 (心理福祉学科助教)
2014～在籍中	金子 毅 (政治経済学科准教授)	2017～在籍中	小沼 聖治 (心理福祉学科助教)
2014～2017	小松崎 利明 (政治経済学科助教)	2017～在籍中	久保田 翠 (児童学科准教授)
		2017～在籍中	齋藤 一雄 (児童学科特任教授)

2017～在籍中 中村 月子
(基礎総合教育部特任講師)

2018～在籍中 阿久澤 弘陽
(基礎総合教育部特任講師)

2018～在籍中 猪狩 廣美
(基礎総合教育部特任教授)

2018～在籍中 猪瀬 桂二
(心理福祉学科准教授)

2018～在籍中 齊藤 伸
(基礎総合教育部特任助手)

2018～在籍中 塩崎 亮
(基礎総合教育部准教授)

2018～在籍中 柴崎 裕
(児童学科特任教授)

2018～在籍中 柴田 怜
(政治経済学科助教)

2018～在籍中 野村 春文
(児童学科特任講師)

2018～在籍中 松永 直人
(基礎総合教育部助教)

2018～在籍中 村岡 有香
(欧米文化学科准教授)

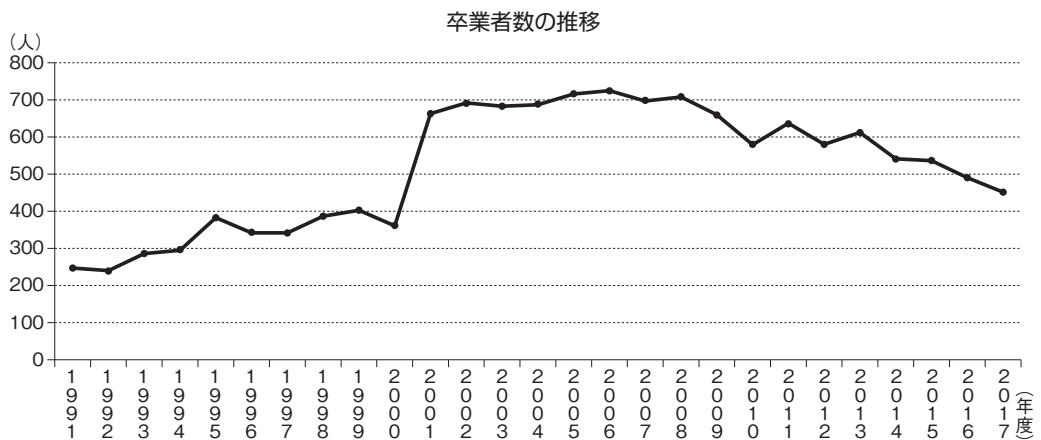
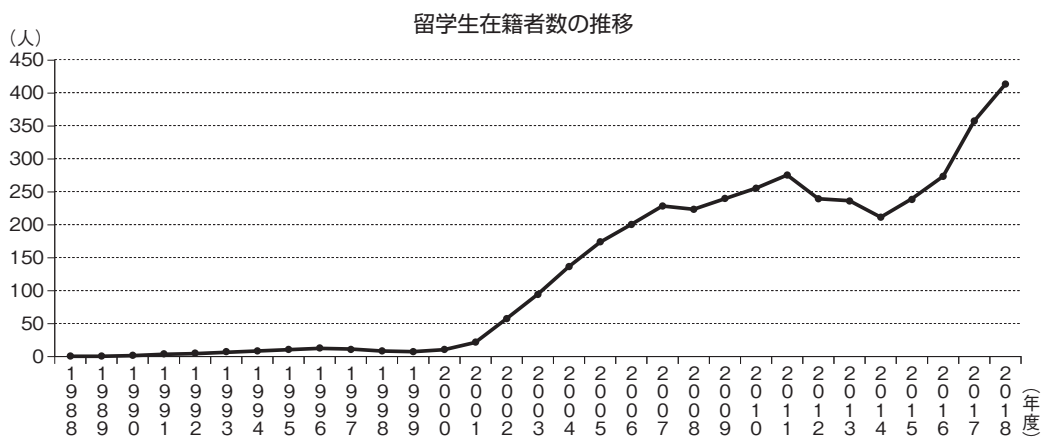
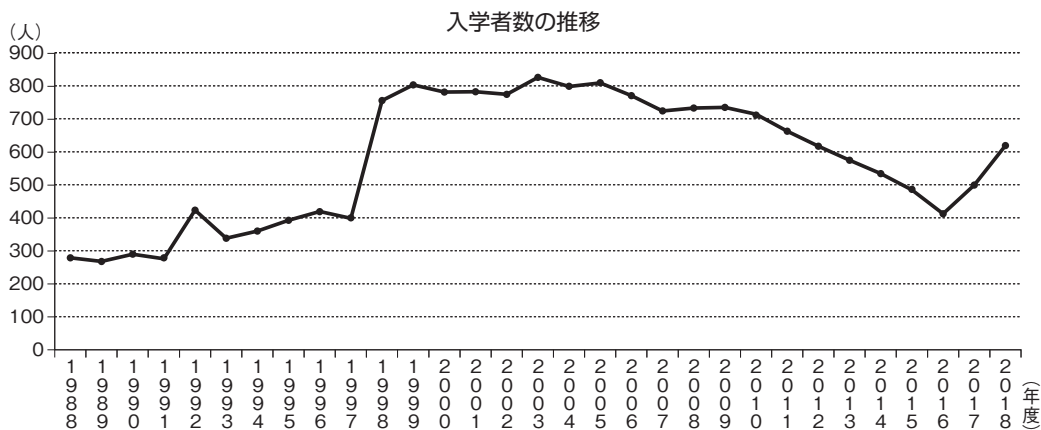
2018～在籍中 R. ローランド
(基礎総合教育部特任講師)

2018～在籍中 若原 幸範
(基礎総合教育部准教授)

本教員在籍期間は、過年度の教員組織表などの資料に基づき作成したものです。資料不足並びに記載内容の不確定性により正確性に欠ける恐れがあります。その点をご容赦ください。

学生

1. 学生数の推移



2. ヴェリタス祭 (テーマ)

「ヴェリタス (veritas)」とは
ヴェリタスはラテン語の「真理」を意味しています。新約聖書のヨハネによる福音書 8章 31-32節には、イエス・キリストの言葉があります。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」。この自由を得させる「真理」がヴェリタス祭の名称の由来です。

第1回 1988年

※ 1988は女子聖学院短大のテーマ
キャンパスに新しい息吹を

第2回 1989年

夢の樹～宇宙(そら)に向かって～

第3回 1990年

ADVENTURE

第4回 1991年

完成への序曲 GOTT MIT UNS(神と共に)

第5回 1992年

思いやりのある仲間たち

第6回 1993年

JUST LIKE UOGASI 魚河岸のように活
気ある祭りにしたい。

第7回 1994年

CHOICE 君は何を選ぶか

第8回 1995年

Canvas

第9回 1996年

「!」

第10回 1997年

キラリ

第11回 1998年

みんなの CREATION

第12回 1999年

もぎたて

第13回 2000年

半熟 - 転換期 -

第14回 2001年

はっこう

第15回 2002年

かいか

第16回 2003年

上昇

第17回 2004年

SHIN

第18回 2005年

Key to the Future ～見つめなおす鍵～

第19回 2006年

笑激的祭

第20回 2007年

きせき

第21回 2008年

つながり

第22回 2009年

十人十色

第23回 2010年

学生力

第24回 2011年

WE CAN DO IT ～いまこそ明るく～

第25回 2012年

Wish for All ～ひとつの願いを～

第26回 2013年

Link ～大切な繋がり～

第27回 2014年

TAKE A NEW STEP! ～前を向いて歩こう～

第28回 2015年

Fun! Fun!! Fun!!! ～楽しさのプレゼント～

第29回 2016年

ヴェリマジック! ～元気の魔法をあなたに～

第30回 2017年

燦(サン) ～30年目のヴェリ革命～

3. スポーツ DAY / ジュベナリス祭

「ジュベナリス (Juvenalis)」とは

ギリシア・ローマ時代の格言の中には今も広く世界中に使われているものが数多く残されていますが、その中の一つに紀元1世紀のローマの社会風刺詩人、デキムス・ユニウス・ユヴェナリス (Decimus Junius Juvenalis A.D.50-130) の言葉として一般に広く知られている「健全な精神は健全な身体に宿る (mens sana in corpore sano)」というものがああります。聖学院大学では2002年度まで大学の全学行事としてスポーツデイを毎年行ってきましたが、女子聖学院短期大学の伝統を受け継ぐ形で、2003年度からはこのイベントをユヴェナリスの名に因んでジュベナリス祭と呼ぶことになりました。

第1回 1988年

実施せず

第2回 1989年

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第3回 1990年

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第4回 1991年

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第5回 1992年

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第6回 1993年

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第7回 1994年

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第8回 1995年

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第9回 1996年

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第10回 1997年 5月15日

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第11回 1998年 5月14日

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第12回 1999年 5月23日

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第13回 2000年 5月8日

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第14回 2001年 5月9日

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第15回 2002年 5月15日

ソフトボール大会

東京健保組合大宮運動場

第16回 2003年 5月21日

体育祭

上尾運動公園競技場

第17回 2004年 5月23日

(雨天により中止)

上尾運動公園競技場
第18回 2005年5月2日
体育祭
鴻巣市陸上競技場
第19回 2006年5月13日
雨天により中止
(山田宏臣グラウンドオープンセレモニー)
第20回 2007年5月15日
体育祭
山田宏臣グラウンド
第21回 2008年5月31日
創立20周年記念30キロ WALK
駒込キャンパスから上尾キャンパス
第22回 2009年5月30日
上尾市内16キロ WALK
上尾市内
第23回 2010年4月24日
ミニサッカー・ドッジボール
上尾キャンパス A・Bグラウンド
第24回 2011年4月16日
(震災の影響により中止)
ミニサッカー・ドッジボール
上尾キャンパス A・Bグラウンド
第25回 2012年4月21日
ミニサッカー・ドッジボール
上尾キャンパス Cグラウンド
第26回 2013年4月27日
大人のドッジボール
上尾キャンパス Cグラウンド
第27回 2014年4月26日
青春のキックベース
上尾キャンパス Cグラウンド
第28回 2015年4月25日

青春のバレーボール大会
上尾キャンパス体育館
第29回 2016年4月23日
青春のフットサル大会
上尾キャンパス体育館
第30回 2017年5月13日
青春のドッジビー大会
上尾キャンパス体育館

4. 緑聖賞

緑聖賞は、女子聖学院短期大学が保有していた「小田緑聖賞」「浅原文芸賞」「児玉スポーツ賞」の基金が本学に寄贈されたことを発端とし、その精神を継承し一層発展させることを主旨として2002年度に設置された。諸活動を奨励するとともに、社会的に高く評価される業績を挙げた在学学生および卒業生を特に称揚してその成果を広く内外に紹介することを目的とする。

表彰は、次の1～3に該当する本学の在学学生および卒業生(短大生含む)について行う。

- (1) 社会活動等において特に顕著な功績を残し、本学の建学の精神の具現化に貢献すると同時に、社会的に高い評価を受けたと認められる者
- (2) 学術・芸術活動において特に顕著な業績をおさめ、本学の学術・芸術の振興に多大な功績があったと認められる者
- (3) スポーツ活動において特に優秀な成績をおさめ、本学のスポーツの振興に多大な功績があったと認められる者

受賞者数および受賞理由

2002年度	1名	社会活動
2008年度	1名	社会活動
2009年度	1名	学術・芸術活動
2011年度	2名	社会活動 スポーツ活動
2018年度	1名	学術・芸術活動
累計	6名	

正保証人等（父母またはこれに代わるべきもの）が、聖学院大学の教育・研究の目的達成のために結成した会である。1993年6月17日に、聖信会は、学業に精励し、勉学の意志のある、人物優秀な学生が学費負担者である聖信会会員の死亡等により就学継続が困難に陥った場合に、学費の援助を行うことを目的として発足した。

5. 学内奨学金

本学の奨学金制度は次のタイプがある。

- A：人物・学業成績優秀な人材を育成する報奨
- B：修学上経済的に困難な学生を援助して教育の機会均等を図る経済援助（給付または貸与）
- C：国際交流等の特定の目的に対して与えられるもの

1) 聖学院大学学友会奨学金／

聖学院大学学友会修学援助奨学金

（1990年度～2014年度）

聖学院大学学友会奨学金は相互扶助の精神にもとづいた緊急避難的なものである。

経済的事情により修学継続が困難な学生で、学業に奨励し品行に優れた者。学生生活において突発的に経済的逼迫状態に陥り緊急に必要なが生じた場合に対象となる。

2) 聖学院大学聖信会修学援助奨学金／

聖学院大学後援会修学援助奨学金

（1993年度～2011年度）

聖信会とは、聖学院大学の趣旨に賛同した

3) 聖学院大学特別奨学金

1995年度から学友会・後援会の奨学金のほかに、大学独自の奨学金として設けられた。

・第一奨学金〔メリット・スカラシップ〕

（1995年度～2010年度）

成績および品行が特に優秀であり、他の学生の模範となり得る者に給付する奨学金。前年度（単年度）の成績が極めて優秀な学生に対して与える。一般公募は行わず、選考は大学側で行う。再度の受賞は妨げない。

対象は2～4年生。

・第二奨学金〔ニード・スカラシップ〕

（1995年度～2012年度）

経済的に困窮し、援助を必要とする者に貸与する奨学金。選考は、日本学生支援機構に準ずる。

対象は全学生。

・第三奨学金〔留学生奨学金〕

（1995年度～2004年度）

〔1〕成績優秀者

〔2〕私費外国人留学生（正規生）のうち、

最短修業年数で卒業見込みのある者
一定の成績を修めれば上記〔1〕、〔2〕
の併用受給が可能となる

〔補足〕

2005年には「聖学院大学特別奨学金 留学生授業料減免」に名称変更。2006年の規定整備により「聖学院大学私費外国人留学生授業料減免制度」に引き継がれていく。

4) 女子聖学院短期大学記念国際交流奨学基金

(2000年度～2012年度)

女子聖学院短期大学の廃止に伴い、建学以来果たしてきた国際交流の成果とその精神を継承し、国際化の一層の進展を目的として、女子聖学院短期大学の資金22,762,773円をもって、女子聖学院短期大学記念国際交流奨学基金を設定した。対象者は提携校に1セメスター以上留学する学生。

5) ルーラ・ロング・コームズ記念奨学基金

(2000年度～2012年度)

女子聖学院短期大学のルーラ・ロング・コームズ奨学金の資金5,656,125円(ルーラ・ロング・コームズ女史からの寄付金340万円、その他繰入金、利子等)を継承し、修学上経済的に困難なものに対して援助する目的をもってルーラ・ロング・コームズ記念奨学基金を設定した。

・正規課程に在籍する学部学生で、経済的に困窮し、援助を必要とする者で、在学年数が標準修業年限内である者。

対象は全学生。

6) ルーラ・ロング・コームズ記念奨学金

(2013年度～現在)

日本人学生で経済支援を必要とする学生(主たる家計支持者の収入・所得金額が指定の条件を満たすもの)を対象に、年間授業料の30%を給付(学納金より減免)する。成績も以下の条件を満たすこと

- ・1年生は春学期の学業成績GPA2.5以上
- ・2～4年生は前年度学業成績GPA2.5以上

7) ファーストラーニングサポート制度

(2010年度～2012年度)

1年生の日本人学生で、主として家計を支えている人の昨年1年間の所得金額が700万円未満である学生で、春学期の学業成績GPA2.5以上のものを対象に、年間授業料の30%を給付。

9月に募集。

8) 聖学院大学進学・修学支援制度

(2009年度～現在)

聖学院大学への入学を強く希望し、大学で学ぶ強い意思を持ちながら、経済的理由で大学進学をあきらめざるをえない受験生に対し、入学時および入学後に経済支援をすることで、社会的に役立つ人材を世に輩出する機会を広げることを目的とする。

- ・入学金免除
- ・学費月払い制度の適用

9) チャールズ・エリアス・ガルスト奨学金

(2013年度～現在)

秋学期入学者を含め、2年間以上当該学科

に在籍した4年生で、正課教育において優秀な成績を修めた者を対象に給付。選考は1年次から3年次までの学業成績に基づいて行う。編入生および転部転科生は当該学科の在籍開始時からの学業成績に基づくこととする。

10) 聖学院大学被災者修学支援奨学金

(2013年度～現在)

災害により被災し、大学で学ぶ強い意思を持ちながら、経済的事情により修学困難な学生に対し、入学時および入学後に経済的支援を実施することで、学生の修学機会を確保することを目的とする。

地震、風水害等の自然災害等により被災した学生を対象に、年間授業料の20%～学費全額の範囲で給付。

11) 女子聖学院短期大学記念国際交流奨学金

(2013年度～現在)

この奨学金は、女子聖学院短期大学の廃止に伴い、同短期大学が建学以来果たしてきた国際交流の成果とその精神を継承し、国際化の一層の進展を目的として、学業成績、人物ともに優秀である聖学院大学学生に、奨学金を給付し、本学または本学各学科が行う短期海外研修への参加を支援することを目的とする。

12) 聖学院大学特待生奨学金

(2017年度～現在)

2年生～4年生を対象に、正課教育において優秀な成績を修めた者（各学科の各学年における上位5%の成績優秀者）に、年間授業

料の50%を給付する。

13) 聖学院大学私費外国人留学生授業料減免制度

(2005年度～現在)

この制度は、授業料の減免によって、経済的減理由により修学が困難な私費外国人留学生の経済的負担を軽減し、修学を奨励することを目的とする。年間授業料の30%～60%を減免する。

14) 聖学院大学 ECA 奨学金

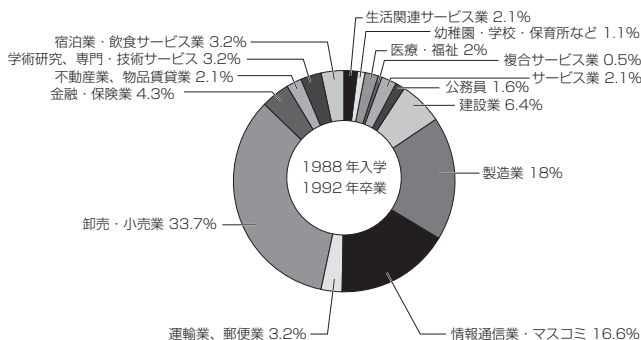
(2013年度～現在)

本学のECA科目において優秀な成績を修めた学生に対し、さらなる英語学習を支援することを目的として設けられた。

6. 卒業生進路

卒業生の進路の推移を見るために、開学後から10年ごと（第1回、第10回、第20回）の卒業生と最新（2018年卒）の卒業生の業種別割合と主な進路先を掲載する。

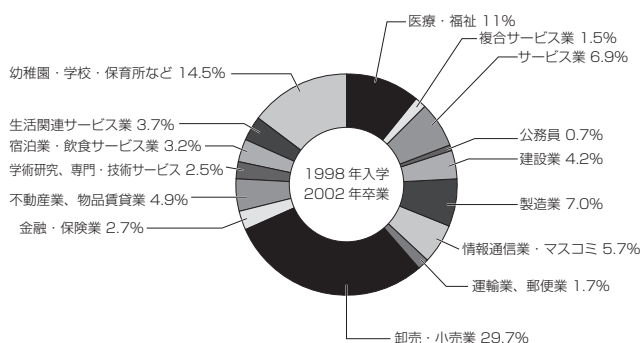
第1回卒業生



主な就職先

- 建設業：東急ホーム（株）、ミサワホーム（株）、ボラス（株）、群馬セキスイハイム（株）
- 製造業：ミズノ（株）、（株）パイロットコーポレーション、旭化成グループ、凸版印刷（株）、ゲンゼ（株）、プリマハム（株）
- 情報通信・マスコミ：福島民友新聞社、（株）NEC情報システムズ、キャノンソフト情報システム（株）、（株）ぎょうせい、（株）日立情報システムズ
- 運輸業、郵便業：日本通運（株）、（株）丸紅物流、ヤマトホールディングス（株）
- 卸売、小売業：三井食品（株）、富士ゼロックス埼玉（株）、（株）コクヨ東京販売、（株）東武百貨店、（株）ミキモト、（株）日比谷花壇、豊田通商（株）、キャノンマーケティングジャパン、三越伊勢丹ホールディングス
- 金融・保険業：巣鴨信用金庫、城北信用金庫、東京シティ信用金庫、あいおいニッセイ同和損害保険（株）
- 生活関連サービス業：（株）パレスホテル、（株）JTB、東武トラベル（株）
- 公務員：さいたま市役所、東京消防庁、警視庁

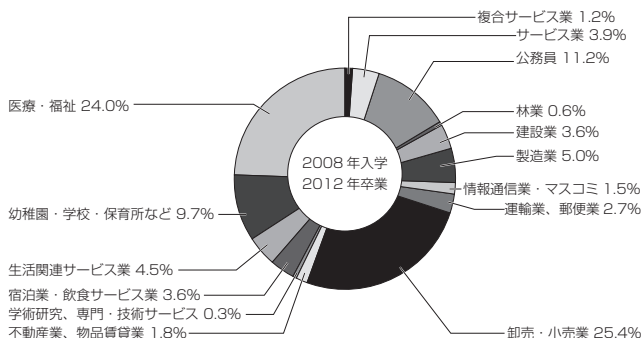
第10回



主な就職先

- 建設業：大和ハウス工業（株）、ボラス（株）、積水ハウス（株）
- 製造業：明治乳業（株）、アサヒビール（株）、（株）ウエシマコーヒーフーズ、イトキン（株）、森乳業（株）
- 情報通信・マスコミ：キャノン電子テクノロジー（株）、（株）アミューズ、（株）シーネット
- 運輸業、郵便業：佐川急便（株）、日本通運（株）
- 卸売・小売業：（株）しまむら、キャノンシステムアンドサポート（株）、（株）東京エコー（株）トーエル、（株）ペルーナ、（株）ユナイテッドアローズ、住友不動産販売（株）、（株）トヨタレンタリース埼玉
- 金融・保険業：青木信用金庫、（株）クレディセゾン、明治安田生命保険
- 生活関連サービス業：（株）エイチ・アイ・エス、（株）白洋舎、（株）ラウンドワン
- 医療・福祉：（医）久喜すずのき病院、（社）鶴ヶ島社会福祉協議会、（社）やどかりの里
- 公務員：深谷市消防本部、警視庁、青森県黒石市農業試験場

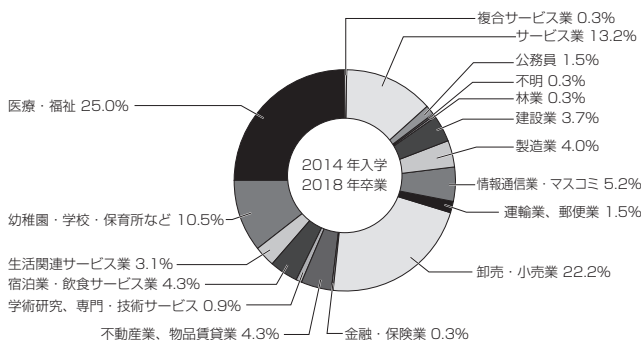
第20回



主な就職先

- 製造業：(株) 神戸屋、(株) サティス製菓、(株) サマンサタバサジャパンリミテッド、大塚刷毛製造 (株)、(株) T&K TOKA
- 情報通信・マスコミ：(株) 東計電算
- 運輸業、郵便業：日本運輸 (株)、(株) ビルディング・ブックセンター
- 卸売・小売業：J Kホールディングス (株)、(株) 明光商会、(株) サイサン、(株) NaITO、(株) トーエル、(株) L I X I L ビバ、東京ガスファーストエナジー (株)、青山商事 (株)、(株) ヤオコー、
- 生活関連サービス業：(株) 大阪屋旅館、ヨコハマグランドインターコンチネンタル
- 幼稚園、学校、保育所など：(学) 文化学園、(学) 三育学院、(学) 高崎健康福祉大学、埼玉県教育委員会、東京都教育委員会、千葉県教育委員会、横浜市教育委員会
- 医療・福祉：(独法) 国立病院機構関東信越グループ、(医) IMSグループ、(医) さいたま生活協同組合、(社) JHC板橋会
- 公務員：北本市役所、埼玉県警、久喜市消防本部、板橋区役所

第26回



主な就職先

- 建設業：日本ハウスホールディングス、古郡建設 (株)、日研硝子 (株)
- 製造業：中央化学 (株)、望月印刷 (株)
- 情報通信・マスコミ：トランスコスモス (株)、(株) マイナビ
- 卸売、小売業：(株) トーエル、(株) ヨコハマタイヤジャパン、(株) 富士薬品、(株) ベルク、ダイヤオフィスシステム (株)、南商事 (株)、(株) 栃木屋
- 金融・保険業：中原証券 (株)
- 幼稚園・学校・保育所など：埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会、市進ホールディングス、山手学院日本語学校、(株) こどもの森、(学) 昭和大学、
- 医療・福祉：(独) 高齢・障害・求職者雇用支援機構、(社) さいたま市社会福祉事業団、(独法) 国立病院機構関東信越グループ、(社) ふじみ野児童発達支援センター
- 複合サービス：ふかや農業協同組合
- 公務員：上尾市役所、川口市役所、警視庁、埼玉県警

7. 国際交流

聖学院大学では、学生が1セメスター以上の長期留学によって、休学せずに単位を互換できる交換留学制度を、次の海外の大学と提携している。以下に、1988年度～2017年度までの派遣人数と受け入れ人数を記す。

提携校および人数

リンチパーク大学（1988年提携）

Lynchburg College（アメリカ）

歴代派遣人数 1名

歴代受け入れ人数 0名

オグルソープ大学（1989年提携）

Oglethorpe University（アメリカ）

歴代派遣人数 11名

歴代受け入れ人数 12名

ベサニー大学（1995年提携）

Bethany College（アメリカ）

歴代派遣人数 5名

歴代受け入れ人数 3名

啓明大学校（2003年提携）

Keimyung University（韓国）

歴代派遣人数 0名

歴代受け入れ人数 0名

聖潔大学校（2003年度提携）

Sungkyul University（韓国）

歴代派遣人数 1名

歴代受け入れ人数 10名

湖西大学校（2004年提携）

Hoseo University（韓国）

歴代派遣人数 8名

歴代受け入れ人数 19名

ラグレインジ大学（2005年提携）

LaGrange College（アメリカ）

歴代派遣人数 7名

歴代受け入れ人数 7名

ホープ大学（2008年提携）

Hope College（USA）

歴代派遣人数 4名

歴代受け入れ人数 1名

長老会神学大学校（2008年提携）

Presbyterian University and Theological Seminary（韓国）

歴代派遣人数 0名

歴代受け入れ人数 0名

トランシルバニア大学（2006年提携）

University Transilvania of Brasov（ルーマニア）

歴代派遣人数 0名

歴代受け入れ人数 0名

8. 海外研修

長期交換留学制度の他に、教授会が適切と認めたプログラムを実施している学校(機関)において、学生は短期海外研修に参加して単位を修得することができる。以下に、プログラム名・日程・参加人数の実績をまとめる。(1998年以前は資料がなく、不明)

1999年度

- ・聖学院大学児童学科海外研修
ローハンプトン・インスティテュート・ロンドン／イギリス
7月30日～8月28日 18名
- ・聖学院大学夏期海外研修
シアトル・パシフィック大学／アメリカ
8月2日～8月28日 10名
- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」
翰林大学校他／韓国
9月6日～9月13日 9名
- ・聖学院大学春期海外研修
シアトル・パシフィック大学／アメリカ
2月5日～3月16日 2名
フリンダース大学／オーストラリア
2月11日～3月12日 21名

2000年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
シアトル・パシフィック大学／アメリカ
7月29日～8月26日 14名
- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」
翰林大学校他／韓国
8月30日～9月8日 7名
- ・聖学院大学春期海外研修

フリンダース大学／オーストラリア

2月9日～3月12日 14名

オグルソープ大学／アメリカ

2月10日～3月11日 13名

2001年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
シアトル・パシフィック大学／アメリカ
7月28日～8月25日 13名
- ・聖学院大学児童学海外研修
フリンダース大学／オーストラリア
8月17日～9月16日 15名
- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」
翰林大学校他／韓国
9月5日～9月14日 16名
- ・聖学院大学春期海外研修
フリンダース大学／オーストラリア
2月8日～3月11日 21名

2002年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
シアトル・パシフィック大学／アメリカ
7月27日～8月25日 9名
オックスフォード・ブルックス大学／イギリス
8月2日～8月30日 20名
フリンダース大学／オーストラリア
8月17日～9月15日 13名
- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」
啓明大学校他／韓国
9月2日～9月11日 16名
- ・聖学院大学春期海外研修
シアトル・パシフィック大学／アメリカ

2月6日～3月16日 3名

- ・聖学院大学児童学海外研修
フリンダース大学／オーストラリア

2月8日～3月8日 29名

2003年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
シアトル・パシフィック大学／アメリカ

8月21日～9月21日 12名

- ・聖学院大学夏期海外研修
フリンダース大学／オーストラリア

8月16日～9月14日 9名

- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」
啓明大学校他／韓国

9月1日～9月10日 7名

- ・聖学院大学春期海外研修
ヴィクトリア大学ウェリントン／
ニュージーランド

2月6日～3月7日 26名

- ・聖学院大学児童学海外研修
フリンダース大学／オーストラリア

2月6日～3月7日 26名

2004年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
シアトル・パシフィック大学／アメリカ

7月25日～8月21日 4名

- ・オックスフォード・ブルックス大学／
イギリス

8月7日～9月5日 7名

- ・フリンダース大学／オーストラリア

8月16日～9月12日 10名

- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」

啓明大学校他／韓国

8月30日～9月8日 16名

- ・聖学院大学春期海外研修
ヴィクトリア大学ウェリントン／
ニュージーランド

2月12日～3月12日 8名

- ・聖学院大学児童学海外研修
フリンダース大学／オーストラリア

2月12日～3月12日 19名

2005年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
パシフィック・ルーサラン大学／
アメリカ

7月23日～8月21日 4名

- ・フリンダース大学／オーストラリア

8月14日～9月11日 18名

啓明大学校／韓国

8月7日～8月27日 4名

- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」
啓明大学校他／韓国

8月29日～9月5日 8名

- ・聖学院大学児童学海外研修
フリンダース大学／オーストラリア

2月11日～3月11日 21名

2006年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
UCLA／アメリカ

7月30日～8月26日 17名

啓明大学校／韓国

8月6日～8月23日 2名

- ・フリンダース大学／オーストラリア

8月11日～9月8日 15名

- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」

啓明大学校他／韓国

8月28日～9月6日 13名

- ・聖学院大学春期海外研修

ディーキン大学／オーストラリア

2月10日～3月3日 7名

- ・聖学院大学児童学海外研修

フリンダース大学／オーストラリア

2月5日～3月15日 26名

7月26日～8月24日 10名

- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」

啓明大学校他／韓国

8月31日～9月9日 8名

- ・聖学院大学春期海外研修

ディーキン大学／オーストラリア

2月10日～3月21日 9名

- ・聖学院大学児童学海外研修

フリンダース大学／オーストラリア

2月12日～3月13日 14名

2007年度

- ・聖学院大学夏期海外研修

UCLA／アメリカ

7月29日～8月25日 12名

- ・聖学院大学夏期海外研修

ビクトリア大学／カナダ

7月31日～8月26日 5名

啓明大学校／韓国

8月5日～8月22日 5名

- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」

啓明大学校他／韓国

9月2日～9月11日 6名

- ・聖学院大学春期海外研修

ディーキン大学／オーストラリア

2月7日～3月15日 16名

- ・聖学院大学児童学海外研修

フリンダース大学／オーストラリア

2月14日～3月14日 6名

2008年度

- ・聖学院大学夏期海外研修

ビクトリア大学／カナダ

2009年度

- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」

啓明大学校他／韓国

日程・人数不明

- ・聖学院大学春期海外研修

ディーキン大学／オーストラリア

2月9日～3月21日 5名

2010年度

- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」

啓明大学校他／韓国

8月30日～9月7日 5名

- ・聖学院大学夏期海外研修

ビクトリア大学／カナダ

8月2日～8月29日 7名

- ・聖学院大学春期海外研修

ディーキン大学／オーストラリア

2月8日～3月20日 7名

- ・聖学院大学児童学海外研修

フリンダース大学／オーストラリア

2月12日～3月13日 14名

2011 年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
グランドバレー州立大学／アメリカ
8月14日～9月11日 4名
啓明大学校／韓国
8月7日～8月27日 4名
- ・聖学院大学春期海外研修
ディーキン大学／オーストラリア
2月7日～3月18日 6名
- ・聖学院大学春期海外研修
フリンダース大学／オーストラリア
2月11日～3月11日 11名
- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」
啓明大学校他／韓国
3月5日～3月13日 7名

2012 年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
啓明大学校／韓国
8月5日～8月25日 2名
- ・聖学院大学春期海外研修
ディーキン大学／オーストラリア
2月5日～3月17日 8名
- ・日本文化学科「海外文化交流研修(アジア)」
啓明大学校他／韓国
3月7日～3月12日 5名

2013 年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
オグルソープ大学／アメリカ
8月25日～9月8日 2名
ビクトリア大学／カナダ
8月4日～8月25日 3名

啓明大学校／韓国

- 8月4日～8月24日 3名
- ・聖学院大学春期海外研修
ディーキン大学／オーストラリア
2月13日～3月23日 1名
- ・聖学院大学児童学海外研修
フリンダース大学／オーストラリア
2月22日～3月21日 11名
- ・聖学院大学東アジアキリスト教文化研修
長老会神学大学校／韓国
3月8日～3月13日 6名

2014 年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
ビクトリア大学／カナダ
8月3日～8月24日 7名
啓明大学校／韓国
8月3日～8月23日 3名
セインツ／アメリカ(こども心理学科)
8月29日～9月11日 2名
- ・聖学院大学春期海外研修
ディーキン大学／オーストラリア
2月12日～3月22日 6名

2015 年度

- ・聖学院大学夏期海外研修
ビクトリア大学／カナダ
8月9日～8月30日 4名
- ・聖学院大学春期海外研修
ディーキン大学／オーストラリア
2月12日～3月22日 6名
- ・聖学院大学児童学海外研修
フリンダース大学／オーストラリア

2月20日～3月17日 10名

2016年度

- ・聖学院大学夏期海外研修

ビクトリア大学／カナダ

8月6日～8月29日 1名

啓明大学校／韓国

8月8日～8月26日 1名

- ・聖学院大学東アジアキリスト教文化研修

(キリスト教センター主催)

長老会神学大学校／韓国

9月8日～9月13日 4名

- ・聖学院大学春期海外研修

ディーキン大学／オーストラリア

2月7日～3月19日 2名

2017年度

- ・聖学院大学夏期海外研修

ビクトリア大学／カナダ

8月7日～8月27日 4名

- ・聖学院大学児童学海外研修

フリンダース大学／オーストラリア

2月16日～3月15日 5名

9. 入学前準備学習

聖学院大学で、入学前準備教育（現在は「入学前準備学習」）が始まったのは2001年のことである。全国の大学の中でも導入は早い方だと思う。その当時、推薦やAO入試などが増えて大学入試も多様化にむかい、年内に進路が決定する生徒が増えていた。そのため、進路未決定の生徒との間で高校生活での温度差が大きくなり、大学側にも入学前の課題を

求め始めていた。一方、大学側も入学する学生の多様化により、基礎学力の低下が憂慮される状況でもあった。

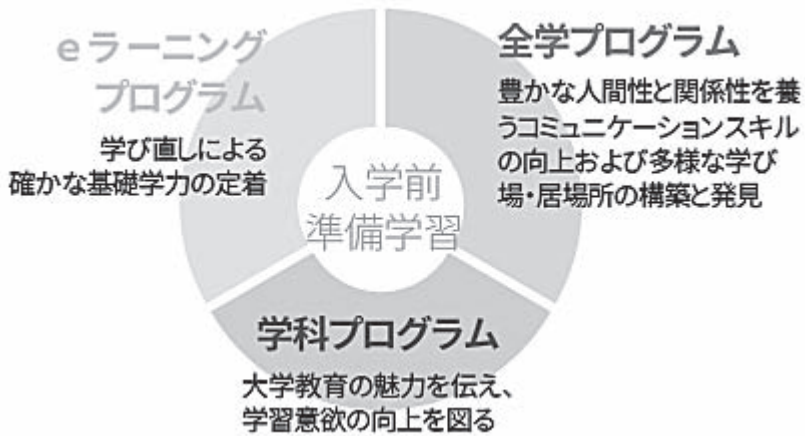
それは聖学院大学でも同じであったが、他と違うのはAO入試の導入にあたってでも考慮された「入試から始まる聖学院大学の教育」という教育コンセプトであった。レポート型AO入試に強く表れているが、一人一人の興味を伸ばし、大学の専門的学びにつなげようということである。だから、初期の講座でも「なぜ大学へ行くのか」「何を学びたいのか」を探る全員面談が組み込まれていた。

この流れは受け継ぎつつも、大きく姿をかえたのは2015年である。基礎学力確保よりも、次第に「大学になじむ」という事が重視されてきたのである。その頃からであろうか、大学4年生になっても自分の事をまだ「生徒」と呼ぶ学生がでてきたのが象徴的なことであった。「大学生」という主体的に学び研究するという自意識が弱いのである。そこで、「大学生になる」ことを目指す全学プログラムに変化した。それは異なる考え・思考をもつ者同士のコミュニケーション力育成することである。講師もキャリアコンサルタントの資格を持つ方に依頼し、ゲームや会話などを通じて「活動する」楽しさを伝えようとした。もう一つ重要な働きはSA (Student Assistant) である。SAは4回の講座のための研修を受け、講座に臨む。だからSA自身も成長するのである。そうして育ったSAとの交流を通し、学生という主体的に動くロールモデルを見て、自分も後輩たちの指導に当たりたいと入学後にSAとなる良い循環が始まっている

のは大きい。今でいう学生同士のピアサポートの
の良いモデルである。一人を育むという新しい
タグラインの、一つの源流はこれだろう

と思う。

(基礎総合教育部長 渡邊正人)



入学前準備学習 3つの柱

地域連携・地域貢献のあゆみ

1. NPO 法人コミュニティ活動支援センター

聖学院大学をはじめとして、学校法人聖学院内の小学校や中学・高校がすでに行っている地域活動を活発化させるため、NPO 法人コミュニティ活動支援センターが約半年の準備を経て2001年4月に創設された。本部を法人本部（東京都北区中里）に置き、大学は埼玉支部として活動を始めた。初代理事長に峰田将聖学院中高校長、事務局長に富沢健治コミュニティ政策学科長が就任した。ピーク時において、正会員105名、賛助会員8団体であった。

活動分野は、まちづくり、環境、子ども、震災復興など多岐にわたり、活動内容に関しても、イベントの企画・運営、調査、体験、ボランティア活動など幅広かった。

NPO 単独では、地域通貨デナリの発行（2002）、野菜づくり（2003 - 10）、ドミノ倒し（2003）、ホタル祭り（2004 - ）、中越沖地震被災地救援ボランティア（2007）、中越地震被災地での雪かき合宿（2007 - 2011）、東日本大震災復興支援（2011 - 14）を実施した。

大学周辺地域の方々とは、鴨川調査（2001 - 2）、宮原駅前通りに名前をつける活動（2001 - 2）、国際理解講座（2002）、ふれあいフェスタ in 宮原（2002 - 14; 2011年からさいたまKI-TA まつりに名称変更）、戸崎地区里山清掃（2002）、ソバ栽培（2004 - 5）、まちづくり研究会（2005 - 6）、上尾桜マップづくり・

桜植樹（2009）などを行った。

また、地域の諸団体と宮原駅西口地域まちづくり協議会を結成し（2003）、協議会として、グリーンフェスタ（2006 - 2010）、竹林清掃・竹炭づくり（2007 - 8）を行った。さらには、自治体から、まちづくりセミナー（さいたま市）（2001 - 3）、ふるさと学園・まちづくりコース（上尾市）（2004）を受託し、企画・運営した。

学生が積極的に活動に参加し人間的に成長したとともに、聖学院大学と地域との密接な関係を構築・強化、コミュニティの活性化に成果を上げた。設立目的がある程度達成されたとともに、学内に、2012年にボランティア活動支援センターが、2013年に地域連携・教育センターがそれぞれ設立され、NPOの活動を引き継ぐ体制が確立されたと判断し、2014年12月の臨時総会をもって解散した。

（政治経済学部 平修久）

2. ボランティア活動支援センター 大学理念の実践としてのボランティア活動

聖学院大学では、「神を仰ぎ 人に仕う」という建学精神の実践として、大学設立当初より、学生たちのボランティア活動が盛んに取り組まれてきた。その流れは、1998年に人間福祉学科が設立されたことで、さらに充実していくこととなる。それまでは、礼拝奉仕を中心に行ってきた「宗教委員会」を「聖学院大学ボランティアアソシエーション（グレ

イス)」と改称し、特別養護老人ホーム川越キングスガーデンや児童養護施設光の子ども家、障がい者施設であるかやの木作業所等へのボランティア活動が展開された。

国の動きを見渡してみると、1998年という年は、「ボランティア元年」と呼ばれる「阪神・淡路大震災(1995年)」から3年後であり、全国的にその熱がまだ残っており、大学生を中心とする若者のボランティアへの期待から、関西圏を中心に大学ボランティアセンターの設置が始まっていた。関東圏においても、大学設置の明治学院大学ボランティアセンター(1998年)、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(2002年)や学生が立ち上げた亜細亜大学ボランティアセンター(1998年)等、大学を挙げたボランティア支援体制の整備や学生の自主的な活動による、ボランティアのマッチング・コーディネートが展開されていた。

学生主体によるボランティアセンター(ボランティア部会)の設置

聖学院大学においても、1999年頃からボランティア活動を実践する学生リーダーたちが集まり、関東・全国の動きと連動しながら、単に自分たちの活動を充実させるということにとどまらず、大学全体としてボランティア活動の活性化を目指すボランティアセンターの構想を立て、実践を始めた。同年の後半には、学生課の支援のもと、グレイスをはじめ、ソーシャルワーク研究会、フィールドワーク企画編集部という当時の学内ボランティア関連の3団体が集まり、大学に寄せられるボラ

ンティア情報を一元的に取り扱い、学生に対して情報を発信していくというセンターの基礎的な役割を担う「ボランティア掲示板」が設置された。2000年には、学友会文化会連合の中に「ボランティア部会」として位置付けられ、学生運営によるボランティアセンターの活動が本格化していった。

ボランティア部会の主な活動は、①ボランティア掲示板の運営・学生によるボランティア紹介、②ボランティア祭りの開催、③ボランティア団体の情報交換会、④他大学との情報交換会とネットワークづくり、⑤大学に対して、ボランティアセンター設置の要請、⑥ボランティアに関する講演会であった。

①ボランティア掲示板の運営・学生によるボランティア紹介

ボランティアセンターの基本的な役割であるボランティア情報の集約と発信の機能を担い、大学に寄せられるボランティア情報や学内のボランティア団体の情報を定期的に掲示し、活動を希望する学生とのマッチングを行った。

②ボランティア祭りの開催

学内のボランティア団体を集めクラブ勧誘デイのように合同説明会を実施することで、学内ボランティア団体のメンバー獲得と、活動未経験者に安心して活動できるボランティア活動の提供を行った。旧大宮市社会福祉協議会とも連携を図り、当日その場でボランティア保険に加入できる等の工夫や卒業生によるボランティアに関わる講演会等を実施

し、多い時には100人以上の来場者があった。

③ボランティア団体の情報交換会

ボランティア部会自体が発足当初より、グレイス・ソーシャルワーク研究会・フィールドワーク企画編集部というボランティア関連団体のネットワーク組織であったが、団体同士の連携を密にするため、定期的な情報交換会を実施した。新規のボランティア団体が発足した際には、お互いの情報交換を行い、連携した情報発信などを確認した。

④他大学との情報交換とネットワークづくり

関東圏の学生ボランティアネットワークであるSV-net（2000年～）の発足に関わり、主として明治学院大学、早稲田大学、亜細亜大学、国士舘大学、淑徳大学、城西大学のボランティアセンタースタッフ（職員・学生）との情報交換を行い、2001年からは埼玉県社会福祉協議会の呼びかけで集った、聖学院大学、埼玉県立大学、立正大学、東京国際大学の学生と一緒に「彩の国学生ボランティアネットワーク（通称：彩学）」の立ち上げに関わった。

⑤大学に対して、ボランティアセンター設置の要請

ボランティア部会は、学生主体のボランティアセンターであったため、当時はまだ少数であった専門スタッフを配置しての大学ボランティアセンターの設置に向けて、大学側に対して継続的な提案を行っていた。

⑥ボランティアに関する講演会

2001年は日本の発案により国連で「ボランティア国際年」と定められ、全国で関連するイベントが行われたが、ボランティア部会においても、国際年と関連付け、関東圏の大学ボランティアセンターと連携し「ボランティアフェスタ2001」を開催し、ボランティアに関する講演会や分科会などをすべて学生が企画・運営し学内外から多くの来場者があった。

その他に、地域との連携事業として、「宮原フェスタ（現：KI-TAまつり）」に参加し、福祉ブースの企画を担うなど、ボランティアの支援だけでなく直接的なボランティア活動等にも取り組んでいった。

これらの取り組みは、すべて学生主体の取り組みであったため、年ごとに活動量には大きな幅があった。特に、「ボランティアを応援するボランティア」という、ボランティアセンターやコーディネート機能等の、いわゆる中間支援的な役割についての理解は、必ずしもメンバーで一致していたわけではなかった。そのため、その年のリーダーたちが毎年悩みながら、ボランティアセンターの役割とは何かを考え、活動を作り上げていった。2011年のボランティア活動支援センター設置直前には、学生ボランティアセンターという認識はやや薄れ、ボランティア祭りや掲示板等が、人間福祉学科や学友会総務委員会により運営されるにとどまっていた。

NPO 法人コミュニティ活動支援センターによるまちづくり・復興支援

聖学院大学における大学ボランティアセンター設置に繋がるもう一つの潮流は、2001年4月に大学として創設した「NPO 法人コミュニティ活動支援センター」の取り組みである。同法人は、2000年に聖学院大学政治経済学部にてコミュニティ政策学科が創設され「大学と地域社会を結ぶ拠点」として、地域と連携しながら様々な活動を展開した。地域と教職員・学生が一緒になって取り組んだ活動は多岐にわたるが、その中でもほたるの再生と2004年から始まったほたる祭りは、毎年学生が中心となり実行委員会を立ち上げ、大学と地域を融合させる機会として現在に至るまで長年取り組まれている。

また、2007年に新潟中越沖地震が起きた際には、NPOが中心となり教職員・学生が現地に駆け付け活動を行った。その後、一回限りの活動ではなく、震災復興に寄り添い続けるため「雪かきボランティア」として、現地との継続的な関わりをもった。さらに、学生にとっての学びの場として捉えなおし、「雪かき合宿」と名称を変え、地元の方々との交流を深めながら2011年の東日本大震災直前まで活動が継続された。

東日本大震災発災後は、現地調査を行い、岩手県野田村を中心に活動を展開したが、これらの復興支援活動に迅速に取り組めたのは、従来からの活動の蓄積があったからである。さらには学生の学びの視点を取り入れ特定の地域と深く長いお付き合いをしていく視点などは、2007年の新潟中越沖地震におけ

る復興支援の活動の経験からもたらされているものであった。

現在のボランティア活動支援センターの歩み

現在のボランティア活動支援センターは、2011年3月11日の東日本大震災におけるボランティア活動を大きな契機として、ここに震災前から続いている諸ボランティア活動および今後立ち上げられるであろう活動を支援するために、2012年4月に設立された。

当初は大学2号館1階に事務室を置き、学生が気軽に訪問できる場所としてボランティア相談窓口をエルピス館2階インターネットカフェに設置された。その後2016年3月に大学1号館地下1階に「地域共生広場1cafe」が誕生したのを機に、事務室を1号館1階に、ボランティア相談窓口を1cafeに移転した。

ボランティア活動支援センターでは、東日本大震災の復興支援活動を継続するほか地域などから寄せられたボランティア情報を集約し、活動を希望する学生とのマッチングや活動全般について支援している。未経験の学生が初めの一歩を踏み出す仕掛けとして、ボランティアの合同説明会である「ボラ Tea」や「夏のちょっとボランティア体験キャンペーン」、活動実践者のスキルアップ研修も行うほか、本学の学生ボランティアコーディネーターにあたる「学生サポートメンバー（通称：サポメン!）」養成講座を2012年の設立当初から毎年実施している。サポメン!は、「ボランティアの魅力を発信し盛り上げる」というミッションの下、ボランティア活動支援セ

ンターと連携しながら、「ボラ Tea」等を企画している。

また、2014年度には、学内のボランティア団体の運営・企画資金を応援することを目的として、大学同窓会と連携し、「ボランティア活動助成金」事業を開始。2017年度にはゼミによる地域貢献活動の支援を強化すると同時に名称を「ボランティア・まちづくり活動助成金」に変更し、毎年約10前後のボランティア活動団体（学友会所属団体に限らず任意団体も含む）やゼミを応援している。

（地域連携・ボランティア支援課）

3. 本学の地域連携

従来、大学の役割は「研究」と「教育」の2つであったが、近年第3の役割として「社会貢献」が位置付けられるようになった。本学においても、そのような時代の流れに対応し、2013年4月1日に自治体、企業、NPOなどの地域諸団体と連携し、大学として社会貢献の機能を果たすとともに、地域活動に参加することにより「実践的に成熟し、民主的な社会人としての良識と見識をもった有為の人間を育成する」という教育的使命を遂行するために、地域連携・教育センターを設置し、ボランティア活動支援センターと連動させる形で、専任のコーディネーターを配置した。

また、センター設置に合わせ、従来から深い関わりのあった、大学周辺の自治体と、これまでの関わりを整理し、改めて連携協定や包括協定の締結を結ぶこととなった。2013年3月29日「さいたま市と聖学院大学との連携に関する包括協定」、2013年9月27日「上

尾市と聖学院大学との連携に関する包括協定」、2014年1月29日「釜石市と聖学院大学との連携に関する協定」、2014年4月22日「春日部市と聖学院大学との包括的連携協定」、2014年7月18日埼玉県と「特別県営上尾シラコバト住宅の共助による活性化推進に係る連携協定」を締結した。

行政や企業、NPO等との連携事業も増え、従来から継続している「子ども大学あげお・いな・おけがわ」を始め、上尾市単独で実施された「子ども大学」や行政・企業・大学で共同実施した「上尾市自転車のまちづくり産学官協働事業」においては、「あげおスマートサイクルフェスタ」等を実施した。上尾市にある県営上尾シラコバト住宅においては、学生が団地内にシェアルームで住み込み、自治会活動等への参加を行っている。教育を通じた、地域貢献活動も盛んとなり、「埼玉学」「宮原地域学」「地元学」「釜石学」や「コミュニティサービスラーニング」等の科目設置の他、ゼミ単位での専門的な知識を活かした地域活動等、学生たちが地域について学ぶとともに、地域の中で学びを深める科目も充実していった。

（地域連携・ボランティア支援課）

4. 大学によるリカレント教育

本学におけるリカレント教育は、埼玉県が進める「大学の開放授業講座（リカレント教育）」という事業に協力しているものである。これは団塊世代や高齢者の方々に、充実した第二の人生を過ごす一助としていただくとともに、地域・社会活動への参加のきっかけと

していただけるよう、大学の授業を受講できる環境を提供するものであり、本学は2007年2月13日に埼玉県知事と本学学長の間で「平成19年度団塊世代・高齢者等を対象とした授業科目の開放に関する協定書」を調印し、翌年度2007年4月より現在まで一部の授業科目を開放している。埼玉県の同事業では、県内在住の55歳以上を対象にしており、県内および近隣の大学が協力し、受付や運営はそれぞれの大学ごとであるが、県が取りまとめて周知をしている。

本学における初年度の2007年度は春学期に4科目、秋学期に5科目をリカレント科目として提供した。その後次第に提供科目は増え、多い時で1学期に10科目を越えることもあった。また2016年度からは大学院科目も提供するようになり、さらに充実した環境を整えている。

受講者については、初年度の2007年度こそ春学期秋学期ともに20名台であったが、翌2008年度以降は1学期当たり40名台が最も多く、多い時で50名台、少ない時で30名台である。受講者の特徴としては、一度限りでなくリピーターとなる割合が高いことが挙げられる。また、本学だけでなく他大学も経験している人が多いことも特徴である。実際にはそれぞれの大学を見比べた上で検討しているようで、ある時は、次学期は取りたいものがないので、本学は休んで他大学に行くとわざわざ伝えてくれる受講者もいる。なお中には、リカレントの提供科目だけでは飽き足らず、他の科目も受講したいとの理由で本学の聴講生制度へ移行するケースも見られる。

授業担当者からも、熱心に参加するリカレント受講生がいることで履修学生への良い効果があるとの声もある。

このリカレント教育を通して、地域住民に本学をもっと知ってもらい、多くの理解者を生み出すことによって、地域に開かれた大学として更なる発展を目指していきたい。

(教務課)

5. 公開講座

公開講座は1971年度女子聖学院短期大学時代に第1回が開催された。

当時の講座は、第一講座「英文学と一般教養」、第二講座「国文学教養」、第三講座「海外旅行の英会話」。

1992年度(第22回)まで女子聖学院短期大学として開催され、1993年度(第23回)から聖学院大学・女子聖学院短期大学として開催された。この時の講座は、第一講座「役に立つ英会話講座」、第二講座「琉球への誘い—文学・言葉・芸能—」、第三講座「ワープロ講座」、第四講座「コーラス」、第五講座「バブル崩壊後の生活と自立」。

1998年度(第28回)から、聖学院大学として開催され、その時の講座は、第一講座「役に立つ英会話」、第二講座「暮らしの中の政治経済」、第三講座「パソコン初歩」。

そして2018年度(第48回)現在の講座は、第一講座「教養講座—共に生きる社会を創る」、第二講座「役に立つ英会話講座」、第三講座「パソコン講座」、第四講座「女声コーラス」、第五講座「初級手話講座」。受講者数は、253名となっている。

女子聖学院短期大学から始まり聖学院大学へ受け継いだ公開講座は、当初、埼玉県教育委員会、大宮市教育委員会、上尾市教育委員会の共催のもと開催されていたが、現在は、さいたま市教育委員会と上尾市教育委員会の共催で開催されており、大学の持つ機能を地域に開放し、地域と大学の連携を図るとともに、市民の高度かつ専門的な学習意欲にこたえるため、また、生涯現役であり続けたい方や社会人としての知識やスキルを高めたい方、豊かな教養を身に付けたい方を対象に「人生100年時代」に向けた社会人教育を行っている。

(総務課)

6. 司書講習・学校図書館司書教諭講習

司書講習とは文部科学省の委嘱を受けた大学が開講する短期集中講習である。本学では2000年度に故・林収正（図書館情報学課程主任（当時）・黒澤浩（同課程副主任（当時））の下、人的・知的業務である図書館業務を担う専門職員としての司書の育成と提供を目的に開講した。また図書館情報大学（現筑波大学）が司書講習を開講してからは北関東の司書資格取得希望者の玄関口という役割も担ってきた。初期の事務は総務部（現総務課）が担当していたが、2007年度より図書館司書課（現司書課）が担当し、現在に至る。司書講習は実施期間こそ7月下旬から9月下旬までの約2か月間ではあるが、運営には申請から募集、報告までと1年間を通じて業務がある。なお、事務とは別に聖学院大学図書館情報学課程が中心となり1999年に結成された聖学院大学図書館情報学会が司書講習・学校図書

館司書教諭講習受講後の受講生のフォローも行っていたが、2010年度の活動を最後に休止している。

少し戻り1998年度に学校図書館司書教諭講習が開講した。司書教諭講習は教員・教員免許取得予定者を対象に文部科学省からの委託を受けて開講する講習である。主に地域の学校図書館への社会貢献という機能を担い開講した。1998年度は大学に学校図書館司書教諭課程はなく、学校図書館司書教諭資格を得るには、この講習を受講するか女子聖学院短期大学の学校図書館司書教諭課程を科目履修生という形で受講するしかなかった。学校図書館司書教諭講習の初期の事務は教務課であったが、司書講習と同じく2007年度より司書課が担当した。これにより司書講習及び学校図書館司書教諭講習の事務が司書課に一本化され、各受講生の図書館利用や講義による利用がスムーズに行えるようになった。

2005年度より、前年度に退職した林の後任として若松昭子が両講習の担当となる。2008年度には、前年度に退職した黒澤に代わり河島茂生が担当となった。ただし、黒澤は退職後も2011年度まで児童サービス論講師として参加している。2009年度は司書教諭講習のみの開講となった。2011年度は東日本大震災を受けての計画停電により学内での完全実施は困難となった。そのため選択科目をすべて、大宮駅近くのホテル会議場にて開催した。物品移動や会場設備の不具合はあったが、立地という点で受講者には好評であった。同年は例年教室として最も利用している4号館のエレベーター交換工事もあり、

7号館を中心に開講した。

2012年度に、学校図書館司書教諭講習は聖学院大学での使命は果たされたとして閉講した。なお、学校図書館司書教諭課程は女子聖学院短期大学時代の1969年より現在まで49年間続いている。

2014年度は1号館の建て替え工事により教室確保に難航したが、エルピスホールを教室とした。また同年度に河島が退職し、以降司書講習は休止している。なお、司書課程は女子聖学院短期大学時代の1975年から現在まで43年間続いている。

(司書課)

7. 教員免許状更新講習

2007年6月の教育職員免許法の改正により2009年4月1日から教員免許更新制が導入された。本学ではそれに伴い、2009年度より教員免許状更新講習を毎年実施している。本制度は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教諭および養護教諭、栄養教諭の現職教員を対象に、文科省から認定を受けた必修12時間（2016年度より必修6時間と選択必修6時間）と選択18時間の合計30時間の講習の受講を、指定された2年間の間に義務付けるものである。

本学では毎年概ね8月上旬に、1日6時間の講習を5日間、合計で必要な30時間を開設し、受講者がすべて修得すれば一度に修了できるように実施している。

最初の2年間は各講習とも定員40名、選択領域の対象は教諭のみでスタートした。2年目に定員をオーバーし、3年目の2011年

度より必修領域の定員を100名に増やすほか、先着順にするなど工夫を凝らしてきた。当初は近隣の園や学校、教育委員会に案内を出していたが、本学の更新講習が定着すると、その後は案内を出さずとも1週間の申込期間終了前に定員に達するようになった。2016年度には選択領域も複数の講習を提供し、2017年度には、それまで日によってばらつきがあった定員を一日当たり合計100名で揃えることで、受講者全員が5日間を申し込むことを可能にした。また2018年度には選択領域でも養護教諭が受講可能な講習を加えた。

一方で、2012年の認定こども園法改正等の一連の改革に伴い、保育士が保持している、それまで使用していなかった幼稚園教諭免許の休眠状態からの回復等、幼稚園教諭免許保持者の需要が増え、受講希望者が増大した。それを受けて2018年度には幼稚園教諭向けの講習を大幅に増やし、1日当たりの定員も合計150名に増やしたが、申込は開始から30分足らずで定員を超え終了した。

また受講者からは概ね高評価をいただき、一部には口コミで本学の評判を聞いて申し込んだ等の声も聞こえる。2018年度には臨時駐車場を開放し、それまで希望の多かった車での来学を可能にして更なる便宜を図っている。なお毎年多くの受講者にきちんと対応していくことが、近隣の園や学校への本学の周知や評判へつながるため、今後も質の高い講習を提供できるように心掛けていきたい。

(教務課)

8. 小学校英語指導者養成講座

小学校英語指導者養成講座は、語学教育委員会を主催として2001年より「児童英語教師養成講座」の名称で開始された。

背景には、欧米文化学科の「在學生にJ-SHINEの小学校英語指導者の資格授与を」との志があり、実際に、本学は在學生が資格を取得した日本の最初の大学となっている。

当初、語学教育委員会が中心となって欧米文化学科とともに講座の運営を進めていたが、業務の増加等により、2006年度よりキャリアサポートセンターと総務部のタスクフォース体制で運営を行った。さらに、2007年度からは会場をそれまでの都内から大学キャンパスに移して開催した。

2008年度から2011年度までは教育事業課が中心となって運営を実施。2011年の学習指導要領の改訂により、小学校外国語活動が必修化となったことを受け、その移行期間が始まった2009年度から名称を「小学校英語指導者養成講座」と変更した。

2012年度は国際交流課が、翌年2013年度（第13回）からは英語教育課が担当となり、講座の形式も夏の集中講座での実施から、年3回の土曜日開催に変更されて実施した。さらに2017年度からは、年2回の開催となり、翌2018年度から組織改編に伴い、学生課（小学校英語講座担当）が業務を担当している。

小学校英語指導者養成講座は、名称変更や担当組織の変遷などを経ながらも継続的に開催されてきた。昨今では、小学校の英語教育の本格化および新学習指導要領などを受けて、講座の需要はより高まっており、埼玉県

をはじめとする教育委員会からの後援をいただきながら、広く小学校英語に係る方へ新しい情報や学びの機会を提供し続けている。

（学生課）

9. 聖学院大学グローバルキャンプ

グローバル人材の育成が求められる中、2016年度に欧米文化学科では5日間の『欧米文化グローバルキャンプ』を企画し2017年2月に実施した。本キャンプは「英会話のイーオン」との産学連携事業として学科生の異文化体験と英語コミュニケーション能力の向上を目的とした模擬留学体験である。初回の参加者は33名であったが、毎日5時間、異文化アクティビティー、ディスカッション、スピーチ、英語学習法などテーマ別の講座を受講し課題に取り組み、最終日にはグループプレゼンテーションを行った。

2017年度は、埼玉県より「グローバル体験プログラム助成金」を受給し『聖学院大学グローバルキャンプ』として、全学科、埼玉県在住・在勤・在学の高校生、大学生、社会人から参加者を募り2018年2月13日から5日間実施した。プログラムは9時から17時20分まで延長し、本学のネイティブ教員、ECA教員6名が加わりイーオンの教員とともに毎日講座を担当した。参加者は本学学生21名（政治経済1名、児童7名、欧米文化13名）、高校生1名、他大学学生7名、社会人6名の合計35名で年齢も様々であった。実施後には「スケジュールがタイトで課題も多く、決して楽ではなかったがやりがいがあった。」という声が多く、2019年2月には

第3回目が実施される。



本学は「THE 世界大学ランキング日本版」で国際性のある大学16位にランクインした*。その理由は語学力の向上や専門分野の研究など、一人ひとりの目的や目標に合わせて多彩な留学プログラムや、学部横断的な語学教育によりグローバル視点を養っていることであるが、地域を盛り上げる拠点としてグローバルキャンブの実践が取り上げられている。これからも『聖学院大学グローバルキャンブ』が地域に愛され長く続くことを祈っている。

* THE 世界大学ランキング日本版「グローバル視点・地域視点ともに重視する私立大学」
<https://japanuniversityrankings.jp/topics/00027/index.html>
(2018年9月26日アクセス)

(人文学部 小川隆夫)

10. ひらめきときめきサイエンス

正式名称を「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」とする独立行政法人日本学術振興会が各大学と共同で実施していた研究成果の社会還元・

普及事業である。当初は単年度実施の予定であったが、2007年度が好評を博したため、2008年度も実施した。

2007年度は11月17日(土)に、「本を解剖する-メディアとしての書物の世界」と題して、中高生を対象にエルピスホールにて実施された。担当教員は若松昭子、清水均、渡邊正人、河島茂生の4名である。当日は講演と実習の2部構成となっており、前半は若松が本の歴史、河島が本の形、清水が読書についてそれぞれ講演した。そして後半は「ごんぎつね」を用いて、清水が媒体ごとの差異を確認し、渡邊が作中の1幕を演出するという内容で実習を行った。

2008年度は「本を解剖する vol.2- 情報が生まれる場所・情報を生かす場所」と題して、9月23日(火・祝)に高校生を対象に、4号館4402・4403教室にて実施された。担当教員は昨年に引き続き若松、清水、渡邊、河島に小池茂子を新たに加えた5名である。当時のチラシを見ると大学創立20周年のロゴが入っており、記念行事という側面もあったようである。若松がメディアについて、小池が幼児に影響する情報について、河島が前の二人の講演を総括しつつ、大学での学びとしての情報についてそれぞれ講演した。そして清水と渡邊が参加者とともに、往年の紙芝居屋の宣伝広告を作成するという実演も踏まえた実習を行った。

いずれの年度においても、職員の鈴木純の意見を取り入れ、紙芝居屋全盛期当時の自転車と紙芝居台を博物館より借り出して用い、参加者によりリアルな体験をしてもらう工夫を凝らしていた。

学生支援のあゆみ

1. 総合図書館

1988年2月に「女子聖学院短期大学図書館」から「聖学院大学総合図書館」と改名。同年4月に大学が設置されると、大学と短期大学の共用図書館となった。当時は1階を大学事務局、2階～4階を図書館としており、本館と呼ばれていた。図書館カウンターは2階に置かれていた。また、建物に荷物運搬用リフトはあったものの、人の移動手段は階段しかなかった。現在あるエレベーターは、障害のある学生への配慮として2000年度に設置されたものである。

2004年度にチャペルと周辺付属棟が完成し、1階にあった管理部門の事務所がディスプレイ館（旧5号館）に移った。翌2005年度の夏に1階も図書館に改修されて建物名称も「図書館棟」となった。

2005年からは、駒込にある聖学院中学高等学校および女子聖学院中学高等学校の図書館と本学図書館で、共通の図書館システムである「UNIPROVE」（日立製作所）を使用するようになり、3館で業務の連携が図られるようになった。

2013年度には「私立大学等改革総合支援事業」（文部科学省・私学事業団実施）の「タイプ1」に関連した「教育研究活性化設備整備事業」として、図書館棟アクティブラーニング環境整備を申請し、採択され、4階グループ閲覧室A・Bを改修してアクティブ・ラーニング室を4階に3室、2階に1室（こちら

は教員研究室を改修）を整備した。ゼミ等の少人数授業、図書館オリエンテーション、学生のグループ学修などに活用されている。

聖学院学術情報発信システム「SERVE」

2008年に国立情報学研究所の最先端学術情報基盤整備（CSI）委託事業により、学術情報の収集、保存、公開を目的とした機関リポジトリである聖学院学術情報発信システム「SERVE」を構築した。これは同規模私立大学の中では先行した取り組みであった。

委託事業は3年間で終了したが、現在も、本学の研究・教育成果、教育活動等の資料を世界に向けて発信している。2016年度からは新システムの「JAIRO Cloud」となり、さらなる利便性の向上を目指しており、2018年度にて10年目を迎える。

2. 教職支援センター

教職支援センターは、児童学科に小学校教職課程を設置した2008年度に4号館2階に開設された。その目的は、大学に教職課程を設置するだけでなく、教職課程学生が実際に教員として採用されることを可能にするために様々な支援を行うことである。これは当時の文部科学省および全国の教職課程を有する大学の動きと一致してのことであった。当初は児童学科内に設置され、初代所長は児童学科長が兼務していた。しかしながら小学校教諭免許希望者のみを対象とするのではなく、同

時に他学科の中学校高等学校教諭免許希望者も対象としていた。特に教員採用試験関係の情報収集や相談への助言、教員採用試験対策講座の実施等を中心の業務とし、その他教育実習や介護等体験、学習支援ボランティアなどの教育現場体験等を取り扱っている。上記に関連して、実習校や教育委員会との連絡窓口も担っている。

4号館2階には相談ができる窓口の他に、隣に学習室を用意して採用試験に関する参考書、問題集等も準備し、学生が採用試験へ向けて学習を進めることが可能になっている。また廊下の掲示板には、上記業務に関連する掲示物の他、各教育委員会や私立学校から連絡のあった求人案内が掲示され、対象学生がいち早く情報を得ることを可能にしている。

同時に、教職支援センターにはこれまで事務局の教職担当(教育事業課)が常駐したり、専属の指導教員が常駐したりと紆余曲折を経て、現在は教務課教職担当職員が教職課程学生との窓口として提出物の受付等を行い、必要に応じて学生への相談対応を行う形となっている。

2017年度には組織が大きく変わり、これまで児童学科内に設置されていた教職支援センターが大学全体に位置付けられ、名実ともに全学的な組織となった。それに伴い、これまで児童学科教員が兼務していた指導教員も、中学校高等学校教職課程を持つ学科教員が加わるようになった。これにより教職課程学生への全学的な支援が拡大し、例えば学科横断的なプログラムの作成や、全学的な採用試験対策講座の実施が可能になり、教員採用

へ向けての支援が広がっている。

3. ラーニングセンター

聖学院大学ラーニングセンターは、2005年4月に学長の発案により、リメディアル教育を目的として開設された。国語分野、英語分野の指導を中心に、また、他方で資格取得・進学などのステップアップを目指す学生への指導やアドバイスも行なっている。更にラーニング commons の機能を併設し、オープンな空間を学生に提供している。

本センターの教員は基礎総合教育部に属し、全学的な組織として開設された。そのあゆみは聖学院大学総合図書館2階にてセンター所長を含む専任指導教員2名で始まり、4号館4階に移動、さらには指導学生の増加に伴い2012年からは1名の事務職員を増員、2013年には1号館1階へ移動し、指導強化を行なった。2018年10月現在、3名の専任指導教員が各専門的な立場から、各種検定試験、就職試験、文章読解やレポート指導、英語基礎学力向上のための指導にあたっている。

本センターは自主的に来室する学生を対象に学習全般の指導を行っているが、その質問は多岐にわたる。しかし、開設当初から「学生自身が自ら答えを導き出し、解決できるための指導や助言を行う」ことを基本として、受動的な学生が能動的に学習できるようになる学習姿勢の転換を目指している。抱える問題の答えを提示するのではなく、教員と共に学び、個々の学び方を模索し、一人ひとりが解決に至る道を発見するように促すことを指導のスタンスとしている。また、不安や悩み

を抱えている学生に対しては、学科教員および学生相談室と密に連携を取り、学習指導に活かしている。そうした方針による指導の結果、開設当初の来室者数は年間 200 名程度であったが、2017 年度には 1,600 名以上の学生が来室するまでに至った。2018 年度においてもその数は増加し続けており、本学の学習支援に大きく寄与している。

4. キャリアサポートセンター

キャリアサポート部キャリアサポート課の変遷

当初、キャリアサポート部キャリアサポート課は「就職指導室」としてスタートした。その後、大学各部署のセンター化に伴い、1998 年には「就職センター」となる。その後、1 号館に宗教センター、就職センター、国際センターなどが集積し、センター通りという名称で学生のひとつの流れができた。2003 年 4 月から「キャリアサポートセンター」になり、1 年次生からのキャリア形成支援が本格的にスタートした。企業の採用試験では“大学 4 年間何を学んできたのか、何を経験してきたのか”ということが問われる時代となり、3 年次からの就職支援では間に合わなくなり、1 年次からのキャリア形成支援が必要になったため、就職というイメージを一新するために名称の変更に繋がった。2010 年度から広報部（アドミッション課）の下にキャリアサポート課が移り、入学と卒業・就職の両面から一括統括する組織となった。2017 年 6 月から再び、広報部から独立した現在の「キャリアサポート部キャリアサポート課」となる。

開設以来 1 号館で設置されていたが 2016

年に現在の 2 号館 1 階に移設された。

就職・キャリア支援の特色

就職・キャリア支援の根幹をなすのが学生一人ひとりの就職活動の最初から最後まで同じ担当者がフルサポートする「学科別キャリア・アドバイザー制度」であり、2005 年度から導入された。また、4 年生が 3 年生の就職支援を行う「絶対就職するための研究会（絶対就研）」は 2000 年度からスタートし、2018 年度は第 20 期目を迎えている。

1・2 年次生対象のキャリア形成ガイダンスの取り組みは早く、2002 年度ごろから各学科からの要請で学科授業内での職員のキャリアガイダンスが年間 10 コマ程度行われ、現在も継続している。その間、職員には SD（スタッフ・ディベロップメント）が求められ、キャリアコンサルタント国家資格や大学院での学びにより内容の充実が図られた。また、インターンシップの取り組みも早く、2001 年度から授業がスタートし、現在では、海外インターンシップ（米国、カナダ）も開講されている。

就職ガイダンスとしては、伝統の「内定 GET 講座」（企業人事部と他大学生参加の実戦型模擬面接・グループディスカッション講座）は 2005 年度開始、「水曜学内会社説明会」（4 年生対象 5 月以降毎週水曜日開催。ホームタウンで実力発揮）は 2011 年度開始した。保護者対象の就職ガイダンスは後援会協力のもと早くから取り組み、5 月に「新入生保護者ガイダンス」、11 月ヴェリタス祭で「親子で考える就職ガイダンス」を 2004 年度から

スタートしている。

SEIG VISIONの「世界に貢献する」をかかげる中、2018年4月から、急増する留学生対策として、キャリアサポート部職員が留学生センターに常駐し、入学から大学生活、就職まで対応するワン・ストップ・サービスがスタートした。

対外的評価

2009年度文部科学省大学改革推進等補助金事業(GP)に「人的ネットワークによるチーム就職活動」育成プログラム(キャリアサポート課作成)が採択された。また、2007年12月、社団法人日本能率協会から「第5期大学経営革新フォーラム」第4会合「大学におけるキャリア支援の先例事例」として講演依頼を受け、『キャリア支援改革への取り組み』を発表する。就職情報会社マイナビが2009年に刊行した全国の国公私立大学の就職指導課へのインタビュー冊子『就論。』に全国35大学の1校に選出され掲載される。

5. 保健室

聖学院大学保健室は女子聖学院短期大学の衛生室から引き継ぎ、30年を迎えた。当初は、非常勤看護師が数時間が在室し、病気や怪我の応急処置などを行っていた。しかし社会の移り変わりと共に、健康に関する現代的課題など近年の問題状況の変化に、より専門性を求められるような役割となっていった。それに伴い、保健室スタッフの充実を図り、様々なニーズに対応できるようになった。

学校医1名、常勤：看護師1名・養護教諭

1名、非常勤：看護師1名で運営している。

開室時間は、1988年度から2003年度まで時間に変動があったが、2004年度からは徐々に体制も整い、現在は、

月～金：9時30分～17時30分

土　　：9時30分～16時00分

となっている。

保健室は、健康診断・健康相談・保健指導・応急処置など日々の対応から、専門性と保健室の機能を最大限に生かして、心の健康問題にも対応した健康の保持増進を実践していく場でもある。心身ともに健康で学校生活が送れるよう、学校医、学科、他部署、保護者、外部の医療機関、その他の専門機関などと連携しながら、学生支援の向上に努めた保健室運営を行っている。

保健室は、1988年度から1999年度まで、1号館1階(1996年度に衛生室から保健室に名称変更)に設置されていた。その後は数年ごとに移動し、2000年度から2003年度までは5号館1階(現在：ディサイプル館)に、2004年度からシャローム館(6号館)に置かれた。2011年度にシャローム館を建て替え、2012年度から新シャローム館で現在に至る。

なお、学校医は1988年度から2006年度まで、高橋小児科・高橋秀二先生(女子聖学院短期大学衛生室より継続)、2007年度からは高橋クリニック・高橋一哲先生(校医診察：授業期間中の毎週水曜日14時～15時)をお願いした。

6. 学生相談室

聖学院大学学生相談室(以下、相談室)は

1999年に開設してから19年が経過した。相談室の設置の契機となったのは、当時の教職員が心理援助の専門家による学生支援体制の必要性を強く感じていたことである。学生に親身に関わっていた教職員の中には、学生の相談に割く時間が膨大で疲弊していたり、対応に苦慮するケースについて相談できる者が身近にいなかったりと、個々での対応に限界を訴える者が出てきた。そうした中で、学生支援機関の一つとして相談室が設置された。相談室が開設された当初は非常勤カウンセラー2名と受付だけの小さな組織で、場所も教員の研究室だった部屋を使用していたが、利用者の増加と学生個々のニーズの多様化に対応するため、現在ではスペースも人員も増えた。

相談は、原則として予約制になっていて、申し込みは直接来室、電話、電子メール、手紙で受け付けている。カウンセラーによる一回の相談時間は、50分を基本に設定。また、面接による個別の直接的援助だけでなく、グループワークなども徐々に取り入れてきた。開室時間は、1999年度から2003年度は人員不足や場所移動などの影響で変動していたが、2004年度からは10時30分～17時30分となっている。場所は、1999年度から2003年度まではディサイブル館(旧5号館)の一角を使用し、2004年度からはシャローム館(旧6号館)へ移動、2011年度の建て替えを経て、2012年度から面談室の他、グループワーク室やスタッフルームが設けられた。

相談室では、学生のニーズを敏感に汲み取りながら活動を工夫し、現場スタッフや運営

協議会委員と共に考えながらより良い学生支援を目指して運営を行っている。

7. オリーブデスク

2012年6月、学生部委員会において「障がい学生支援連絡会」の発足が提案され、その後、2013年4月より「学生支援準備室」が組織上位置付けられる。準備室の立ち上げに際し、教員1名が準備室長となり試行的に障害のある学生の支援を担う。そして、2014年4月、オリーブデスク(障害学生支援室)が正式に開室し、障害のある学生の多様なニーズに対応するための、相談、支援の窓口としてソーシャルワーカー2名が配置された。

開室に至る経緯として、障害のある人(学生)への権利保障に対する社会情勢や、本学特有の多様な学生層への対応の必要性の高まりが大きな要因となった。また、それまで個々の教職員、部署が個別に抱え込んで対応していたような事例に対し、オリーブデスクがマネジメント機能を担い、それぞれのニーズに応じながら学内の資源を横断的に活用することで、より専門的、適切な支援につなげることを目指した。

2014年の開設以降、組織上は学生課に所属し、修学支援を基本的な柱とする学生支援部署の一部として活動を展開している。障害や病気などにより、修学上に困難、課題を抱えた学生、保護者などと面談を行い、支援に必要な学内の調整、学内外の部署・機関との連携など、個別的な対応を行っている。また、入学から卒業まで、各修学段階における支援のニーズが異なるため、学科や教務課

のみならず、アドミッション課やキャリアサポート課との連携も重要になっている。

開設からの4年間で延べ約90名の学生(支援申請者のみ)がオリーブデスクを利用して、修学上において何らかの支援を受けな

がら学生生活を送っている。ますます多様化するニーズに対応していくために、学内の環境を整えていくこともオリーブデスクの重要な役割になっている。



学生支援関係のリーフレット

刊行物

■図書館報ぱびるす／総合図書館

1号（1980年）～67号（2019年12月現在）
 変遷：女子聖学院短期大学図書館報りよくせい（1号〔1980年〕～9号〔1987年〕）→聖学院大学総合図書館報（10号〔1988年4月〕）
 →図書館報ぱびるす（11号〔1989年4月〕～）

■緑信叢書／聖学院キリスト教センター

1号（1980年）～vol.49（2019年1月現在）
 変遷：女子聖学院短期大学宗教センター（1号〔1980年3月〕～9号〔1987年12月〕）
 →聖学院大学・女子聖学院短期大学宗教センター（10号〔1988年12月〕～20号〔1988年10月〕）
 →聖学院キリスト教センター（21号〔1999年10月〕～42号〔2012年3月〕）
 →WEB版（vol.43〔2013年2月〕～）

■神を仰ぎ、人に仕う・改訂21世紀版／聖学院キリスト教センター（2013年4月）

変遷：神を仰ぎ、人に仕う（初版）／女子聖学院短期大学（1986年3月）→改訂版／聖学院大学・女子聖学院短期大学宗教センター（1991年4月）→神を仰ぎ、人に仕う・21世紀版／聖学院キリスト教センター（2003年4月）→2版（2005年4月）→3版（2011年4月）→神を仰ぎ、人に仕う・改訂21世紀版／聖学院キリスト教センター（2013年4月）

■キリスト教と諸学／聖学院キリスト教センター

1号（1986年12月）～31号（2018年3月現在）
 変遷：女子聖学院短期大学（1号〔1986年12月〕～3号〔1988年5月〕）→聖学院大学・女子聖学院短期大学宗教センター（4号〔1989年12月〕～13号〔1998年12月〕）
 →聖学院大学宗教センター（14号〔1999年12月〕～19号〔2003年12月〕）
 →聖学院キリスト教センター（20号〔2005年3月〕～）

■聖学院大学学生要覧／聖学院大学

1988年度（1988年4月）～2018年度（2018年4月現在）
 変遷：聖学院大学学生要覧（1988年度〔1988年4月〕～2006年度〔2006年4月〕）
 →聖学院大学学生要覧政治経済学部・人文学部・人間福祉学部3分冊（2007年度〔2007年4月〕～2012年度〔2012年4月〕）
 →聖学院大学学生要覧（2013年度〔2013年4月〕～）

■聖学院大学開学記念論文集／聖学院大学総合研究所（1988年11月）

■聖学院大学論叢／聖学院大学

1巻（1988年12月）～31巻2号（2019年3月現在）

■聖学院大学総合研究所紀要／聖学院大学総合研究所
(No.1 [1990年9月]～No.64 [2018年3月現在])

■聖学院大学教員活動報告書／聖学院大学
I (1991年4月)～WEB版(2018年現在)
変遷：聖学院大学政治経済学部活動報告書I
(1991年4月)→聖学院大学教員活動報告
1992年度(1992年7月)→聖学院大学活動
報告書1994年度(1994年9月)→聖学院大
学活動報告書(1995年度[1996年10月]～
1997年度[1999年3月])→聖学院大学教員
活動報告(1998年度[2000年1月]～2007
年度[2008年6月])→聖学院大学教員活動
報告書CD-ROM版(2008年度[2010年3月]
～2009年度[2010年6月])→聖学院大学
教員活動報告書(2009年度[2010年6月]
～2014年度[2015年])→WEB版(2015
年度[2016年]～)

■聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER /
聖学院大学総合研究所
Vol.1-1 (1992年3月)～Vol.28 No.1 (2018
年10月現在)

■聖学院大学シラバス(授業計画)／聖学院
大学
1992年度(1992年)～2018年度(2018年
現在)
変遷：講義内容(1992年度[1992年]～
1995年度[1995年])→聖学院大学講義内容
(シラバス)(1996年度[1996年]～2005年

度[2005年])→聖学院大学講義概要(シラ
バス)(2006年度[2006年])→聖学院大学
シラバス(授業計画)(2007年度[2007年]
～2012年度[2012年])→WEB版(2013
年度[2013年]～)

■聖学院教育の源流／聖学院ゼネラルサービ
ス(1993年10月)

■SEIGAKUIN UNIVERSITY GUIDE
BOOK／聖学院大学
1994年度～2019年度(2018年現在)
変遷：人間の広場／聖学院大学・女子聖学院
短期大学(1994年度～1996年度)→Why：
当たり前という考えを捨てて「なぜ」という
関心から始めよう。／聖学院大学(1997年度
～1998年度)→CROSS ROADS：SEIGAKUIN
UNIVERSITY GUIDE BOOK／聖学院大学
(1999年度～2000年度)→SEIGAKUIN
UNIVERSITY GUIDEBOOK／聖学院大学
(2001年度～2002年度)→面倒見の良い大学。
入って伸びる大学。SEIGAKUIN UNIVERSITY
Guidebook／聖学院大学(2003年度～2006
年度)→SEIGAKUIN：CHOICE／聖学院
大学(2007年度～2008年度)→面倒見のよ
い大学。入って伸びる大学。SEIGAKUIN /
聖学院大学(2009年度～2017年度)→
SEIGAKUIN UNIVERSITY GUIDE BOOK
／聖学院大学(2018年度～)

■入試対策用聖学院大学入試問題集／大学通信
1995年度(1994年6月)～1998年度(1997
年6月)

■聖学院大学データブック／聖学院大学

1995 - 1997 年度(1998 年)～2018 年度(2019 年現在)

変遷：'95 - '97 入試問題集 (1998 年) → 聖学院大学 1998 年度入試試験問題集(1999 年) → 聖学院大学入試最新情報：1999 年度入試データブック (2000 年) → 聖学院大学入試結果データブック (2000 年度 [2001 年] ～ 2002 年度 [2003 年]) → 2004 年度聖学院大学入試結果データブック (2 年合冊版 [2005 年]) → 聖学院大学データブック (2006 年度 [2007 年] ～ 2008 年度 [2009 年]) → DATA BOOK 2009 SEIGAKUIN UNIVERSITY 2 分冊(2010 年) → DATA BOOK SEIGAKUIN UNIVERSITY (2010 年度 [2011 年]～2014 年度 [2015 年]) → 聖学院大学データブック (2015 年度 [2016 年] ～)

■1999 年度聖学院大学点検評価報告書／聖学院大学 (2000 年 3 月)

■かけはし Bridges / 聖学院大学学務部学生課

1 号 (2000 年 4 月) ～ 20 号 (2011 年 4 月)

■聖学院大学図書館情報学研究／聖学院大学図書館情報学課程

1 号 (2000 年 5 月) ～ 6 号 (2011 年 3 月)

■聖学院大学欧米文化学科 Newsletter / 聖学院大学欧米文化学科

No.1 (2002 年 3 月) ～ No.36 (2012 年 8 月)

■緑聖文化／聖学院大学日本文化学会

創刊準備号 (2002 年 3 月) ～ 16 号 (2018 年 3 月現在)

変遷：聖学院大学人文学部日本文化学会 (1 号～7 号 [2009 年 3 月]) → 聖学院大学日本文化学会 (8 号 [2010 年 3 月] ～)

■聖学院大学資格取得の手引き／聖学院大学 2002 年度 (2002 年 4 月) ～ 2006 年度 (2006 年 4 月)

■入学前準備学習「入学前から始める聖学院の学び」報告書／聖学院大学ラーニングセンター事務課

2002 年度 (2002 年 6 月) ～ 2017 年度 (2018 年 6 月現在)

変遷：入学前準備教育実施報告書／聖学院大学アドミッションセンター (2002 年度 [2002 年 6 月]、2004 年度 [2004 年 6 月] ～ 2010 年度 [2010 年 5 月]) → 入学前準備教育実施報告書／聖学院大学広報企画部広報戦略室 (2011 年度 [2011 年 5 月]) → 聖学院大学広報戦略室 (2012 年度 [2012 年 5 月] ～ 2013 年度 [2013 年 5 月]) → 入学前スタートアップ講座実施報告書／聖学院大学広報局広報部広報課 Vol.14 (2014 年 6 月) → 入学前準備学習「入学前から始める聖学院の学び」報告書／聖学院大学ラーニングセンター事務課 (2015 年度 [2016 年 5 月] ～)

■校友会新聞 CLIP STYLE / 聖学院大学校友会

創刊号 (2002 年 7 月) ～ 20 号 (2013 年 7 月)

■日本文化学会会報／聖学院大学日本文化学会
1号(2002年10月)～16号(2018年3月
現在)

■聖学院大学大学院要覧／聖学院大学教務課
2003年度(2003年4月)～2018年度(2018
年4月現在)

変遷：聖学院大学大学院事務室(2003年度
[2003年4月]～2009年度[2009年4月])
→聖学院大学大学院(2010年度[2010年4月]
～2015年度[2015年4月])→聖学院大学
教務課(2016年度[2016年4月]～)

■授業アンケートに答えて：応答集／聖学院
大学点検評価実行委員会

2004年度(2005年3月)～10(2018)号(2018
年11月現在)

変遷：授業アンケートに答えて：聖学院大学
授業アンケート報告集(2004年度[2005年
3月]～3(2008)号[2009年3月])→聖
学院大学授業アンケートに答えて：応答集
CD-ROM版(4(2010)号[2011年3月]
～5(2012)号[2013年3月])→授業アンケ
ートに答えて：聖学院大学授業アンケート報告
集6(2014)号／聖学院大学点検評価実行委
員会(2015年3月)→授業アンケートに
答えて：応答集オンライン版(7(2016)号[2017
年]～)

■政経塾／聖学院大学

vol.1(2005年5月)～vol.5(2010年2月)

■FD・SDニューズレター／聖学院大学

SD・FD委員会

1巻1号(2005年9月)～No.18(2017年
11月現在)

変遷：聖学院大学FD委員会ニューズレター
(1巻1号通巻1号[2005年9月]～5巻1
号通巻11号[2010年3月])→聖学院大学
FDニューズレター(No.13[2012年8月]
～No.16[2015年10月])→聖学院大学
SD・FDニューズレター(No.17[2016年11
月]～)

■欧米文化の基礎知識(新装版)／聖学院大
学欧米文化学科(2008年3月)

変遷：初版(2006年3月)→新装版(2008
年3月)

■2007年度聖学院大学自己点検評価報告書
／聖学院大学(2009年3月)

■聖学院大学 SEIG WORLD NEWS／聖学
院大学国際交流・英語教育課

1号(2009年7月)～14号(2016年10月)

変遷：聖学院大学学生支援部国際協力課(1
号[2009年7月])→聖学院大学学生支援部
国際交流課(2号[2010年4月]～9号[2013
年9月])→聖学院大学国際交流・英語教育
課(10号[2014年6月]～14号[2016年
10月])

■改訂版「はじめる」教科書：初年次のため
の欧米文化の学び方／聖学院大学欧米文化
学科(2011年3月)

変遷：「はじめる」教科書(初版[2010年3月])

→改訂版（2011年3月）

■おもしろそうから始まったまちづくり　そして復興支援へ：NPO活動の10年／コミュニティ活動支援センター
(2011年11月)

■聖学院大学入試過去問題集／聖学院大学
2011年度（2012年）～2015年度（2016年）

■聖学院大学ボランティア活動支援センター

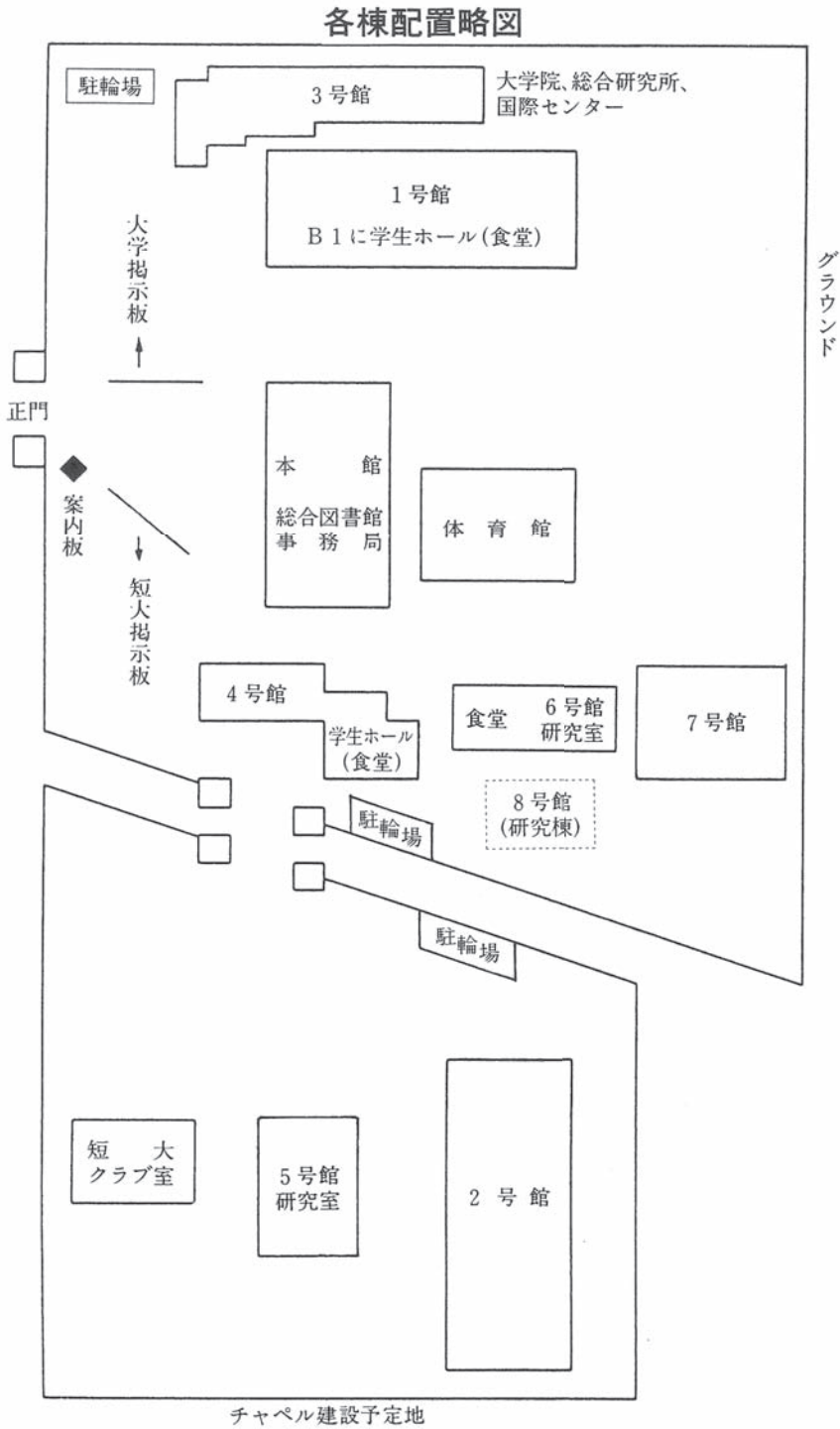
事業報告書／聖学院大学ボランティア活動支援センター

2012年度（2013年9月）～2016年度（2018年2月現在）

■聖学院大学インターンシップ報告書／聖学院大学（2014年3月）

■永遠の言葉：キリスト教概論／聖学院大学出版会（2018年4月）

キャンパスマップの変遷

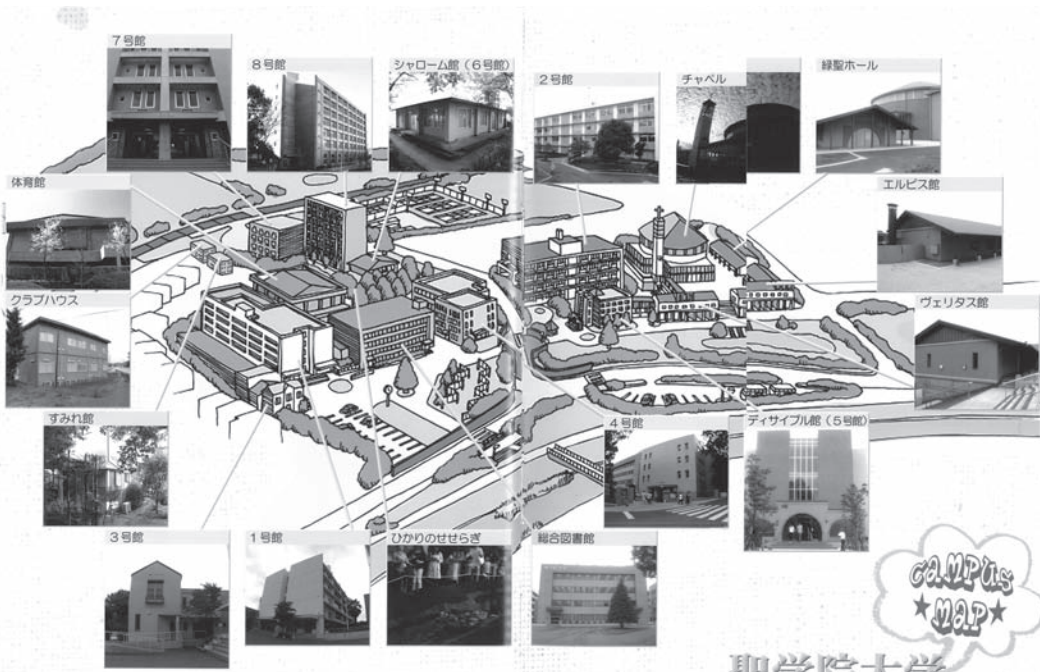


『学生要覧』1998年度より

聖学院大学キャンパスマップ

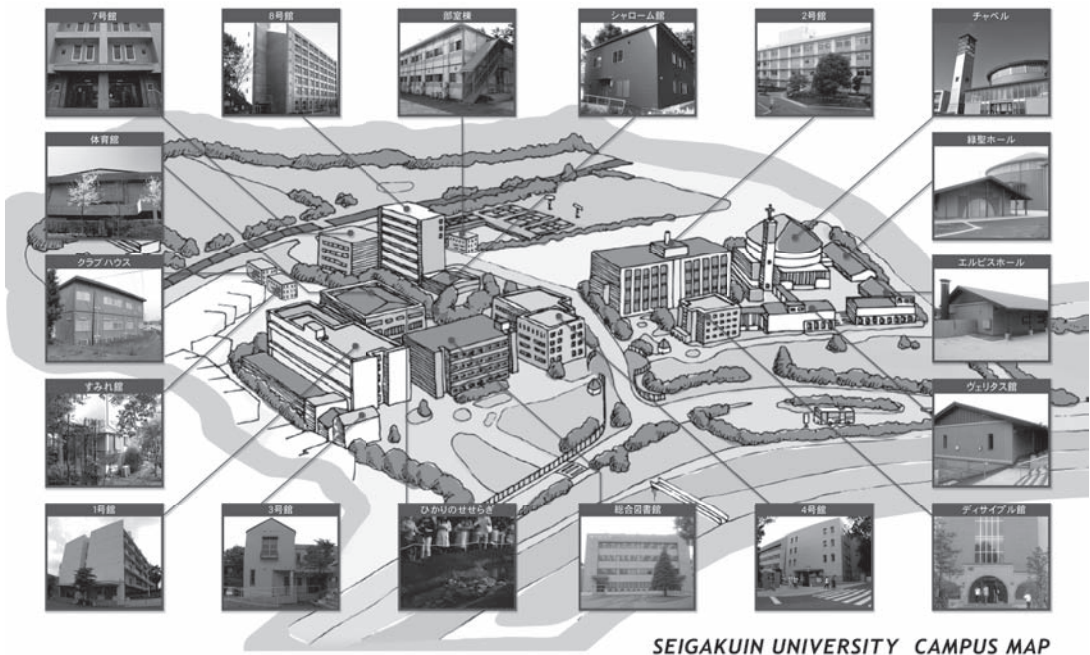


『学生要覧』2001年度より



聖学院大学

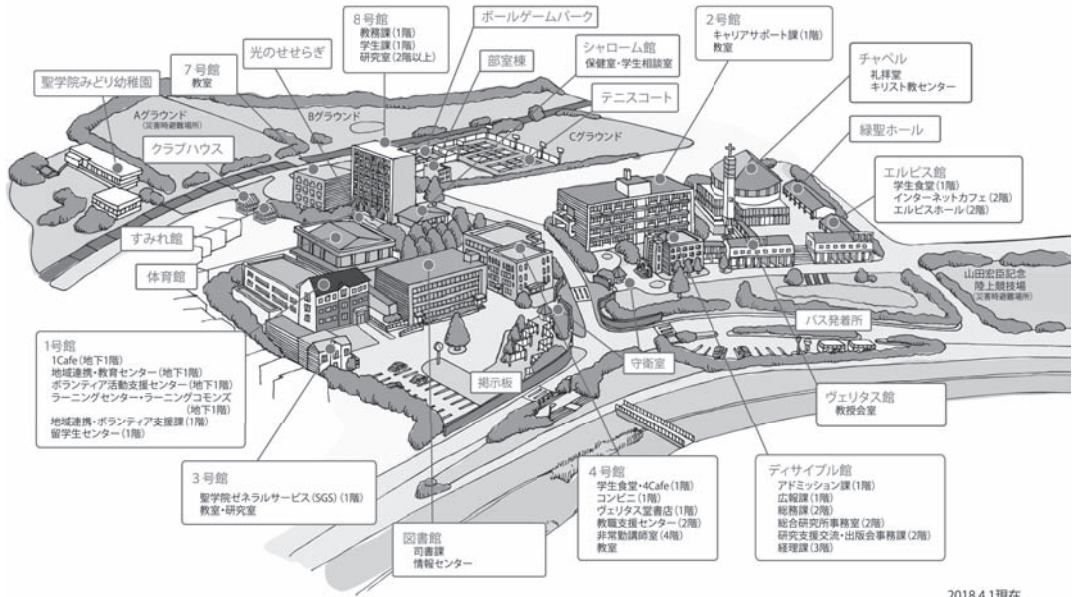
『卒業アルバム』2011年より



SEIGAKUIN UNIVERSITY CAMPUS MAP

『卒業アルバム』2016年より

聖学院大学 CAMPUS MAP



2018.4.1現在

あとかきに代えて

○大学創立 30 周年記念誌発刊の趣旨

聖学院大学は今年度（2018 年度）、創立 30 周年を迎えています。これまで諸事情により本学の歴史的資料を集約、整理するに至らなかったために、そうした貴重な資料は残念ながら各部署に散在するか、もしくは行方が不明な状態にありました。

そこで、大学創立 30 周年記念事業実行委員会の発足を機に、実行委員会事業の一環として「大学創立 30 周年記念誌」の発刊を目指し、「記念誌編集グループ」において、まずはこうした資料の集約、整理作業を大学の各部署に協力を仰ぐ形で実施することとし、その上で、集約された資料をもとに本学の歩みを次代に継承すべく、現時点で可能な限りの体裁をもった「記念誌」を発刊することとしました。

無論、時間的、人間的な制約、予算上の制約等、様々な制約のもとでの制作となるために、本格的な「大学史」の刊行は望むべくもありません。しかしながら、今この時点で何等かの形での「聖学院大学の歴史を留める刊行物」を制作しておかなければ、今後このような刊行を実現するのは更に困難な状況に陥ってしまい、それはとりもなおさず「聖学院大学の歴史の消失」に繋がってしまうこととなります。「創立 30 周年記念事業実行委員会」としても、また大学としても、そのような事態は是非とも避けなければならないと考

えます。

その意味では、本誌は次代へと繋ぐ結節点としての役割を担うものといってもよいかもしれません。来る「大学創立 50 周年」においては、是非とも本格的な「大学史」の刊行を実現していただけることを期待します。

上の文章は 2018 年 12 月 8 日（土）に行われた「ホームカミングデー」にあわせて刊行した「聖学院大学創立 30 周年記念誌刊行予告号 ホームカミング編」に載せた文章です。この「あとかきに代えて」の文章を記している今の時点（2018 年 12 月 24 日）では、まだ印刷所に入稿を済ませていない状態にあります。年内最後の「記念誌編集グループ」の打合せ（12 月 26 日）を経て漸く入稿に到る予定です、年明けから校正作業が始まることとなります。「2018 年度内刊行」を目指したこの事業に残された作業期間はおよそ 3 か月ということになります。

繰り返しになりますが、本記念誌の発刊には多くの障害を伴います。しかしながら、原稿執筆をお願いする方々や、様々な点でご協力いただく教職員の方々のご尽力に報いるためにも、実行委員会一同、日々発刊の実現に向けて尽力していきたいと考えています。

○聖学院大学創立 30 周年記念事業概要

この事業は、本学「ブランド力向上委員会」

(2016 年秋設置) のメンバーを基盤として、
大学・短大卒業生職員を中心に結成された「大
学創立 30 周年記念事業実行委員会」によっ

て企画・実行されたものです。以下に本事業
の概要 (全容) を記します。

大学創立 30 周年記念事業一覧

	寄附活動 / 学生会館建設	ホームカミング	記念誌発刊	グッズ制作その他	学部企画講演会
4 月				記念紙袋 学生手帳用シール	
5 月				記念名刺	
6 月	ASF ニュース リニューアル				政治経済学部①
7 月				記念シール (宮原聖子 ステッカー) 宮原聖子のハニテラ (7/21 OC)	政治経済学部②
8 月				宮原聖子のハニテラ (8/1 職員, 有識者会, 8/4 OC)	
9 月				バインダー 宮原聖子のハニテラ (教授会, 9/15 OC)	心理福祉学部①
10 月				30周年記念サイト開設 宮原聖子のハニテラ (10/31 OC)	政治経済学部③ ④
11 月					政治経済学部⑤ ⑥⑦
12 月		ホームカミング デー (12/8)	刊行予告号 発刊 (12/8)	宮原聖子のハニテラ (12/8 ホームカミング デー, 12/19, 20 クリス マス礼拝)	
1 月					心理福祉学部②
2 月					
3 月			発刊 (予定)		

○記念グッズから



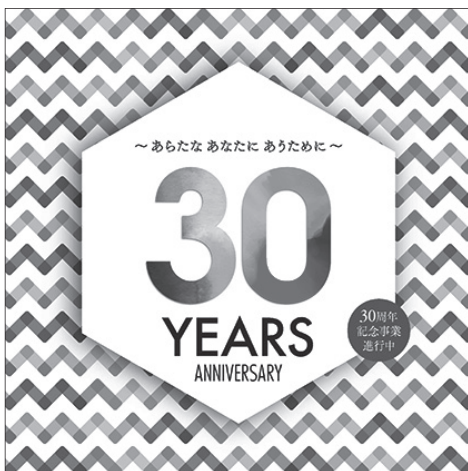
宮原聖子のハニテラ：さいたまミツバチプロジェクトと大学がコラボレーション！埼玉県産 100% のはちみつを使ったカステラを作りました。その名も「宮原聖子のハニテラ」です。



宮原聖子ステッカー：聖学院大学の非公認ゆるキャラ「宮原聖子」のスケジュール帳用シールを作りました。美容院、デート、レポートなどかわいい聖子が盛りだくさん！



30周年記念紙ぶくろ：30周年オリジナル紙袋を作りました。カラーは聖学院大学のHPで使用している「SEIG SKY」。



左のデザインは、記念事業の象徴として制作されたポスターデザインです。「あらたなあなたに あうために」というキャッチコピーは、2016年度の新年教職員研修会の「グループ協議」で、全教職員で作成したキャッチコピーのうち、最優秀に選ばれたものです。記念事業実行委員会では、「これからの聖学院大学のための30周年」という意味を込めて、このキャッチコピーを30周年記念事業全体の方向性を示すものとして使用しています。

○学部企画講演会 テーマ・講演者等

◆政治経済学部

日付	テーマ	講演者
6/27	平成30年間の日本政治を斬る—テレビ・新聞の報道現場から	小塚かおる（日刊現代ニュース編集部長）
7/18	現代日本の少年犯罪と子どもの貧困の現実—取材現場から見えてきたもの	山寺香（毎日新聞さいたま支局記者）
10/10	社会の課題から、未来の価値をつくる	藤澤烈（一般社団法人RCF代表理事） * RCF=Revalue as Coordinator for the Future!
10/24	時代の正体—取材現場から見た国家権力	松島佳子（神奈川新聞湘南支局記者）
11/7	新聞記者の仕事—取材の現場から	望月衣塑子（東京新聞社会部記者）
11/24	《宗教改革500+1周年記念講演会—多極化する社会とキリスト教の可能性》 （主催 聖学院大学総合図書館・後援 聖学院大学総合研究所・Evangelische Kirche・Deutschland 社会科学研究所） ・第一講演 ルターの自由理解は、文化の壁を越えることができるか？ ・第二講演 世界社会における、キリスト教、人間愛、人権 《記念音楽会》（人文学部共催） 祈りのうた～詩篇から黒人霊歌まで～	・企画コーディネーター：土方透 ・講演者 Prof.Dr.Gerhard Wegner（EKD 社会学研究所長、マールブルク大学教授） Prof.Dr.johanness Weiss（カッセル大学名誉教授） 演奏：久保田翠、コロスタシアアネックス
11/28	地域に学び、地域と育つ—地域と共にある大学をめざして ・基調報告：聖学院大学と戸崎地区・宮原地区の連携について（平修久） ・シンポジウム	・企画コーディネーター：佐藤一子（東大名誉教授、本学非常勤講師）、若原幸範 ・パネリスト 長澤不二夫（戸崎まちづくり協議会副会長）、松本宏毅（さいたま北商工協同組合理事長）、吉森寛子（政治経済学部卒業生）、河橋晃郁（政治経済学部卒業生）

◆心理福祉学部

日付	テーマ	講演者
9/26	共生社会の実現に向けて私たちができること	・登壇者：齊藤美咲（人間福祉学科卒業生）、朴猷一（こども心理学科卒業生） ・司会・コメンテーター：中谷茂一、大橋良枝
1/16	子ども・若者たちの貧困	・コーディネーター・講演：藤田孝典（特定非営利活動法人ほっとプラス代表理事、反貧困ネットワーク埼玉代表、本学客員准教授、社会福祉士） ・シンポジスト：佐山奈々恵（人間福祉学科4年生）、上村真木（上尾市子ども支援課、精神保健福祉士）、市橋耕太（東京合同法律事務所、弁護士）

（敬称略）

○その他、30周年を機に推進した事業

◆&Seig プロジェクト（株式会社ロフトワークとの共創事業）



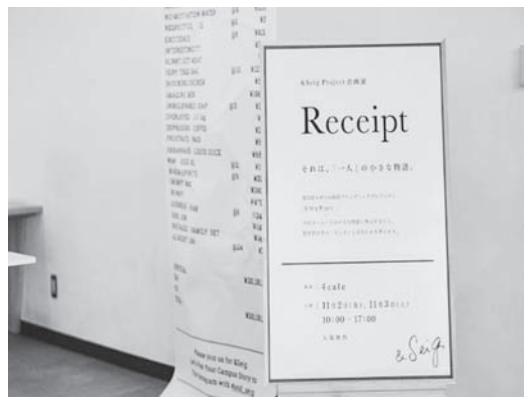
「&Seig プロジェクト」は聖学院大学の「良さ」を発見し、発信する事業で、株式会社ロフトワークと共同で展開しています。30周年を機に新しくなった本学タグライン、「一人を愛し、一人を育む。」もこの共同事業に

おいて制作されました。

このほか、2018年度の「&Seig プロジェクト」では、次のような事業も行いました。



「&SEIG MAGAZINE」の発刊



ヴェリタス祭での「&SEIG展」の開催

◆SDGs 推進



2018年6月、学校法人聖学院として、グローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行うことになりました。

聖学院大学創立 30 周年記念事業実行委員会組織

○実行委員長 清水均

○実行委員会リーダー 杉本雅彦

○実行委員会リーダー代理 江連さゆり

○アドバイザー ペニンントン太郎

○寄附関連(「学生会館」設立計画)グループ

張田仰、倉橋基、佐藤嘉一

○ホームカミング企画・運営グループ

西八條平和、磯田和久、江連さゆり、倉橋基

○記念誌編集グループ

白水三千代、横山寿世理、菊池美紀、

国府田秀行、田山恭司

○グッズ制作グループ

江連さゆり、神吉菜々子、張田仰、森清、

田口敦士、山田将人

創立 30 周年記念誌

扉をひらいて

2019 年 3 月 31 日発行

編集・発行

聖学院大学創立 30 周年記念事業実行委員会

〒 362-8585 埼玉県上尾市戸崎 1 番 1 号

電話 048-781-0925 FAX048-726-2962

印刷・製本 クイックス



記念誌の内容は <https://serve.repo.nii.ac.jp> → 「インデックスツリー」 → 「聖学院大学」 → 「聖学院大学記念誌」 でご覧いただけます。または、左記 QR コードでもご覧になれます。

敬虔と学問 ■

pietas et scientia

自由を得させるであらう
あなたがたに

■ 真理は、

一人を愛し、一人を育む。

真理は、あなたがたに自由を得させるで

あろう ἡ ἀλήθεια ἐλευθερώσει ὑμᾶς

自由にする 真理は我らを

敬虔と学問 ■ 神を仰ぎ

Love God and 人に仕う

■ Serve His People

一人を愛し、一人を育む。

真理は我らを自由にする

ἡ ἀλήθεια ἐλευθερώσει ὑμᾶς

Love God and Serve

His People 神を仰ぎ 人に仕う

敬虔と学問